

奇譚クラス

特大号



1

奇譚クラス

1

定價 百四拾円



マニアの方は必ず一本をコレクション下さい
頒価 一部 五百円 (送料五十円)
美術コロタイプ印刷 各葉解説入
〔詳細の説明書はKK通信第七号に〕
全部未発表特写の女体緊縛写真

内容
猿ぐつわ 紅と白 顔 煙 貴
雁字指目 観 念 芋 虫
儀 柱 台 床の置物 鞭 打
目の 綾 滑車吊 高小手
荒 縄 くさり エビ 貴

美しき縛しめ

第二集

九人の緊縛モデルを駆使して完成した緊縛フォトの圧巻未発表の秘作集
代表的な縛りポーズ三十二態

(詳細な説明はKK通信第七号に)

32態

〇貴め写真はいはしいが、印刷紙に焼付けたものは高くて困ると、おっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい
三十二枚の変わったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう 全く素晴らしいです
美術コロタイプ印刷、アルバム装釘
頒価 一部 五百円 (送料三十円)

モデル嬢 股間縛り競艶

各 組 (キヤビネ判)
三枚一組 三百円

問題の股間縛り、各嬢競艶、縛りマニアの絶頂に見送すことの出来ない珍品
中富綾子嬢 三態

純情可憐、芳純正に十七才の乙女、無垢の肌を喰い込んだ痛々しい縄目
杉 美 嬢 三態

昨年十一月号の口絵に掲載して大好評を得た作品
萩 千恵子嬢 三態

乳房を出すのさえ恥しがらる萩嬢を腹立たせた股しり
伊吹真佐子嬢 三態

豊満な肉体をタチに喰い込ませる股間しりばりの縄目
坂口利子嬢 五態

キヤビネ判 五枚一組 五百円

十数態の中から最も強烈な股間縛りの代表作を選ば、股間縛りを流行させた問題の作品も含んだ特別品揃い

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並面菊版和装
美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲島田島のこれぞ美 ▲丸福のこれぞ美 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場裏側 ▲沸々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録 娘風俗年中行事十二月、外特別附録として先人未発表の貴重な春画文庫五章十九項に互って詳説す。晴雨ファンに薦む。

浣腸フォト三態

第一集 第二集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

浣腸責め三態

第一集 第二集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

浣腸と縛りを併用したフォト、手又は足の自由を奪って身動き出来ない姿のま、無理に浣腸されようとする被縛者に、施術者の持つ浣腸器は情容容なく迫ってゆく。浣腸責めの最も出た美しい写真は、皆さんを魅し惑わすのルッポへあててゆく。

女性切腹擬態写真

〇女性切腹姿態写真
各 (手札型六枚一組) 三百円

初めて試みた女性切腹の好評作
第一集 (二人のモデルによる各態)
第二集 (裸体着衣共代表的各態)

〇真刀を用いた女性切腹写真
手札型六枚一組 三百円

真刀が白い腹部の肌へグサリと刺さる思わすゾクリとする真迫した切腹フォト
〇血紅使用の女性切腹写真
各 (手札型六枚一組) 三百円

血紅によって女性切腹の模様の経過を示した珍しい文獻的なフォト
第一集 第二集

女性切腹シリーズ写真

連続八枚続き (順を追うたもの)
キヤビネ判 八枚一組 六百円

女性切腹「立腹」写真

手札型 三枚一組 二百円

華麗な責めの色刷画帖

横トシ豪華美本、各葉説明文句入
三条春彦画 一部 三百円 (送料四十円)

時代物責絵巻

内容
一、山法師と御前 五、八百屋お七の最期
二、女ネリと岡引き 六、新機組と三枝
三、流石と千姫 七、十郎左エ門と腰元
四、大公方と侍女 八、小紫と忠康本

御申込みは迅速と確実を誇る
書房代理部へ
御申込次第迅速厳重荷造の上急送申上げます
代金引替は送料が高くなりますので、必ず前金でお願いします

曙書房代理部

奇譚クラブ臨時増刊号

アリスの人生学校

一冊 百円 (送料其)
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く堂々五百枚に垂んとする傑作口絵、挿絵カット多数挿入

傑作・マゾ・フォト

春日ルミ嬢構成
各組 キヤビネ判 三枚一組 三百円

足紙三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口の中へ足を入れている
B、クロイズ・アッブ、C、男が足を保持して舐めようとしている

足蹴三態

A、ハイヒールで足を蹴る、B、蹴り倒される男、C、後手に縛られた男が、思うままに足を蹴られる

凌辱三態

男性をケダモノのように足下に踏みにじって喜ぶルミ嬢の得意のポーズの中で特にマニアの好む凌辱の姿態

人間椅子三態

A、胸の上へ尻を置いて女王様の休息の椅子となっている
B、人間ソファに居るC、女王様の膝下に屈伏するドレイ

犬の折檻三態

A、犬を仕込まれるワン公、B、女主人を背にするワン公、C、首環とタサリで仕込まれる

人間馬三態

A、乗馬ズボンに馬鞍の女に股がられるB、鞭の苛責、C、乗馬の訓練、

マゾ・フォトのベッド・シーン
キヤビネ判 4枚1組 400円

一、馬乗り 二、首締め 三、押え込み 四、足台

女体縛り悦虐姿態集

川端多奈子嬢

ベテラン多奈子嬢の

定評あるフोट

第一集、第二集

各(手札型七枚一組)三百円

村田那美子嬢

純情型の清新なしぼり

手札型五枚一組二百円

伊吹真佐子嬢

豊満な肉体に強烈なしぼり

手札型五枚一組二百円

急襲

手札型十五枚
一組五百円

モデル (杉美美嬢)

連続十五枚続きで女が縛られる
迄の過程を描いた最優秀作

台上の殉教者

キャビネ判二枚一組二百円

モデル (杉、村田、坂口嬢)

吊り3態特選集

モデル (川端多奈子嬢)

キャビネ判各三枚一組五百円

第一集、第三集

第二集、第四集

二女連縛集

(中富綾子、並川トミ嬢)

手札型六枚一組三百円

椅子責め五態

モデル (伊吹真佐子嬢)

キャビネ判 五枚一組五百円

磔

(キャビネ判)

第一組 二枚一組 三百円

第二組 一枚組 百円

モデル (村田那美子嬢)

半吊り二態

モデル (村田、坂田嬢)

キャビネ判二枚一組二百円

女体各種趣向縛り写真

各組一組 (キャビネ判)

三枚一組
三百円

※三人得意のポーズ

モデル (村田、坂口、杉嬢)

※水辺水責め三態

モデル (萩千恵子嬢)

※悦虐遊戯三態

モデル (坂口、杉二嬢)

※後手高手小手二百体

モデル (伊吹真佐子嬢)

※レインコート3態

モデル (萩千恵子嬢)

※溪流の飛魚

モデル (村田那美子嬢)

※高手小手三態

モデル (木田雅子嬢)

※制服の女学生

モデル (雲井久子嬢)

※野外全裸の縛り

モデル (村田那美子嬢)

※猪吊り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※猿ぐつわ三態

モデル (浅野末乃嬢)

※繃帯縛り3態

モデル (萩千恵子)

※蠟燭責め3態

モデル (坂口、村田、二嬢)

※腰巻縛り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※梯子責め三態

モデル (伊吹真佐子)

※ナイロン女体縛り

モデル (杉美美嬢)

※鞭打ち三態

モデル (杉美美嬢)

※三嬢連縛棒吊り

モデル (杉、村田、坂口、三嬢)

※基盤責め三態

モデル (雲井久子嬢)

※灸責め三態

モデル (杉美美嬢)

※女が女を責める

モデル (坂口、杉、二嬢)

※繃帯縛りの特選

第一集 第二集
モデル (伊吹真佐子嬢)

◎全部卓絶した未発表の特写真写真ばかりです。

◎価格は全部送料共です。どうぞ多少に拘らず御申込み下さい。

◎女体縛りの詳細説明はKK通信第二十三号にあります。



破壞本能文化的理由 林弓志雄
性液 伊藤晴雨

破壞本能文化
非小說性液

伊藤晴雨 林弓志雄

「腹部に依る悦虐」……………兵頭庫一
畸型への愛着……………津久井 毅
残虐なる女性達……………森本愛造

悪の広場……………角 皓子

【子供山笠】……山口幸一

ソドミの祭壇 補遺 宗廟第六編 根 耕 二一

『質草夜話』 井上一雄
白金組次三

あるマゾヒストの手帖から 沼 正 三 著
手帖旧目次

「男が終い限まで」……… 保田
ラブ・レター」……… 村崎明・作
続編「百合子の冒険」……… 保田

告白文 体験談の書き方 初めに投稿される方々へ 一編 集 野村胡堂・西 田 集

切腹願望と闘いじめ
同様の英雄、織田信長
…… 笠置・篠原・作

奇譚クラブ昭和二十九年年度目次………一〇
アブ・ラブ・レーター
男性切腹同性愛者より………二〇
臨 界 存 亡

挿絵と心中し度い……白金紅大
春日ゆきに關する十一章……春日
女體美考見……土岐四段平

春駒……松田精一（文星）
久生……

黄 昏……中川 房夫
現代マゾヒズム芸術時評……原 忠 正
日本訳「残虐なる女性」……森本 愛造

八重松對双乳山凌戰更況放送
丁稚小僧幻想 戦力少年時代物語

夜光島……………吾妻新三

血染の毛綱……伊藤晴雨
口餘「残虐なる女性達」……西條照太郎
女灸点師……長谷川善之

山崎 隆雄

秘蔵………
語り継がれたマニアの記録
「色紙」のページ………
………

大正時代
男色雑誌「驚く人々」……著者野房江之
藤ネルの愛想……監修子方

夫婿の側面凝視……山田美智子
動物嗜好者の手記……藤野 馨
号立……佐々木 浩介

川柳實風景一遊……………
山崎道子、西村

墨わりの…… 野中浩久・著
 新装版 真染の毛調…… 伊東雄一・著
 加増奉加作集 仕置の準備(一)型

「薄羅をよそ」といって、モザル、千恵子、文子、大光と、この朝、百万ドルのお金

残虐なる女性虐待事件「カッセル」を以て日本愛国新聞
外国誌に見た女性の肌膚 Paris Tajou

「女の尻に敷かれる男、女に痛めつけられる男、トイレと浴室での暴行、一階台一階掛」

足を洗って早く乾かす。足の指を
薬子で洗う。アクロバッド 一寸法郎
新人賞受賞 残虐な皮肉費め、リンチ佐田精二・西
千景主演 交響曲の心臓

地獄変相図 一軒の山に、大衆を要請して、林原に赴き、面

唯摩ブイト 櫻（伊賀養生子園）流腸（坂口利子園）
春日高コシト厚真（池畔） 曾一甘山衣道通
伊賀高コシト厚真（池畔）

柳 川 志 貞 風 景 十 態

山村孤風句
瀧 麗子 絵



ハイヒール

股が

脚とよ



浣腸器 片手に 足の 紐を



時折はこんなに使う床柱



お預け

がすんでいめる



こうすればよく

締るのと足をかり



禪は

極手近かな猿

お月



責道具

この

頃のは

凝り

このように

結つて

本を巻く



いやなことから好きとすねてみせ





昭三十九年
四月
時亭

墨ぬり

畔亭数久画

淫の鬼天を覆ふて淫風を吹く



りしに今日しも秋の習
いとて殿は柵村の館を立ち
出で、領分境なる鬼無里の
村境へ至りたるが越後の方
より山越して来
れるみめ美しき
二人の
娘、怪
し奴と
道ばた
の地蔵
を倒し
縛り上げて引据ゆれば恐れ気も
無く領主の前に進み出で、申す
様妾事は越後の国の者に侍り候
が親に別れて只一人善光寺へ赴
くもの路用もつきてとやかくせんと
あわれと思し合力願い奉ると、い
といんぎんにX

(一) いつの頃なりけんみすゞかる信濃国鬼無里の領主柵左衛門信行といえる殿様あり到つて好色の評判国中に高ければ領主鷹狩と聞けば娘や女房は他村へ逃がして領分の百姓は各戸を閉じ生業を休みて外出するものも稀なれば近頃は民百姓の家々よりみめよき女を奪い取る事も出来ず徒らに日を送りしに今日しも秋の習いとて殿は柵村の館を立ち出で、領分境なる鬼無里の村境へ至りたるが越後の方より山越して来れるみめ美しき二人の娘、怪し奴と道ばたの地蔵を倒し縛り上げて引据ゆれば恐れ気も無く領主の前に進み出で、申す様妾事は越後の国の者に侍り候が親に別れて只一人善光寺へ赴くもの路用もつきてとやかくせんとあわれと思し合力願い奉ると、いといんぎんにX



は顔を赤らめて妾はいまだ男を知らざれば殿のお伽をせん術もなしと答えて顔に紅葉を散しけり。
(二) とこんな事をかいて居るとオヤ大昔しの草双紙の本文かと思われるかも知れない。飯綱婆の妖術は江戸に於ていろ／＼な人の
X述べにける殿は好色の目を光らせ汝我家に連れ行かんに榮耀榮華は望みに任せん如何に／＼とい給えば女
心に喰い込んで或る者は金銭に飽きて女

しを今に宴席で小判を座に撒きちらして女の股倉を幫間にのぞかせて自分は見る可きものを見て楽しみ女の羞恥を弄び貞操を弄んで快楽の限りをして居た。

(三) 淫の虫は江戸へ飛んで来て両国回向院附近の見世物小屋を襲った。見世物小屋の興行主は綱渡りの女太夫を荒縄で縛り上げて綱の下には図の如く技身の鎧を並べて若し技芸未熟で落ちたとしても主人と雇人の義務と権利が甚だしく服従を強いられて居た旧幕時代には主人に咎は無いのだから淫の虫に喰い込まれた人々は此女芸人が綱から落ちて鎧に貫かれて血を流すのをローマの闘牛場と同じ様に喝采して見物して居た。

(四) そうした見世物が盛んになつて来たので香具師(テキヤ)仲間の中に女の毛を引き抜いて毛綱を作るといふ宣伝(其頃は口上といつた)をして人を集め田舎から誘拐して来た女を全裸体にして縛り上げ、勿論少しのトリックはあつても女の毛髪を引き抜き血を流すものが行われる様に変つて来た。蛇に巻か



を弄び乍ら賣める方法を考
えて居
た。日

本橋辺の

木綿問屋の主人
上総屋客兵衛は

紀文大
尽の昔

れる女の見世物もあつた。勿論其頃は南洋からホン
トウの大蛇が来る訳はないので拵えものでそれは俗
にいう提灯胴の蛇である。蛇が女の生首を啣えて来
るのは其頃江戸に流
行した刺青の影響で
あるう。けれどもこ
うして飯綱婆の口か
ら吐く淫の虫は漸次
江戸の人
々の臟腑
に喰い込
んで果て
は江戸城
の大奥へ
迄進入し
て行つた
(次号へ
つづく)





自動車の扉から全身をのぞかせた軽装のお嬢さん
果して、どんな下着をつけているでしょうか。

↑
バンド付のハイヒールを投げ出して
仰向けになつたストッキングの間か
ら下着がのぞいている。
↑
アミ目のストッキングをガーターでとめ
る、上半身には、何も下着はつけていな
いらしい。



外国誌にみた女性の肌着

流行はフランスからと云われていますが、そのフランス雑誌にあらわれた女性の肌着の一つを紹介してみます。奇抜なものが沢山ありますが、その中で、白玉模様のワンピースを着した最も平凡なお嬢さんの下着を見せて置きましょう。



→ あられもなく、勇敢にまくり上げられた裾の下には、豊かなお尻にぴったりと喰いついた肌着が肉体の線をそのまゝに惜しげなく露出している。

↑ ぱつと前をまくって、拝して頂いたブリーフ、太股のツケ根まで切り込んでいるので足が一層長く見えて見事な脚線美。

(Paris Tajou avril 53) より

傑作集

備 二 題]

空中飛行

曲芸娘の両手首はブランコの棒に固定され、バンドから通したベルトは、もう一つのブランコの棒に連結された、両足首の鉄環にはくさりがつけられてある。これから奇抜な空中飛行の予行が行われるのである。



逆さ吊り

足首に縄がまかれて、ズルズルと後手に縛られた全身が床を這った。シユミーズはお尻までめくられて、魅力的な脚線が露出した。さて、これから、この縄を吊り上げたら、果して、どうなるでしょうか。

四馬孝

〔仕置の準〕



残虐なる女性達画集 森本愛造 提供説



〔パウル・カム特集〕

(解説は本文188頁参照)



(A) Ein Rechtenfehler.



(C) Die grausame Reiterin.



(B) "Die Peitsche apportieren!"



(F) Dominatrix.



(D) Auf Seinen Schultern.



(G) Dressur



(E) Die Turnstunde.

女の尻に敷かれる男

ルミ嬢が革の紐をふり上げて、ワン公の尻に折檻している。ワン公は後手に縛られているので、頭で支え、従順にお仕置を受けている。

サジスチン……………春日ルミ嬢……………



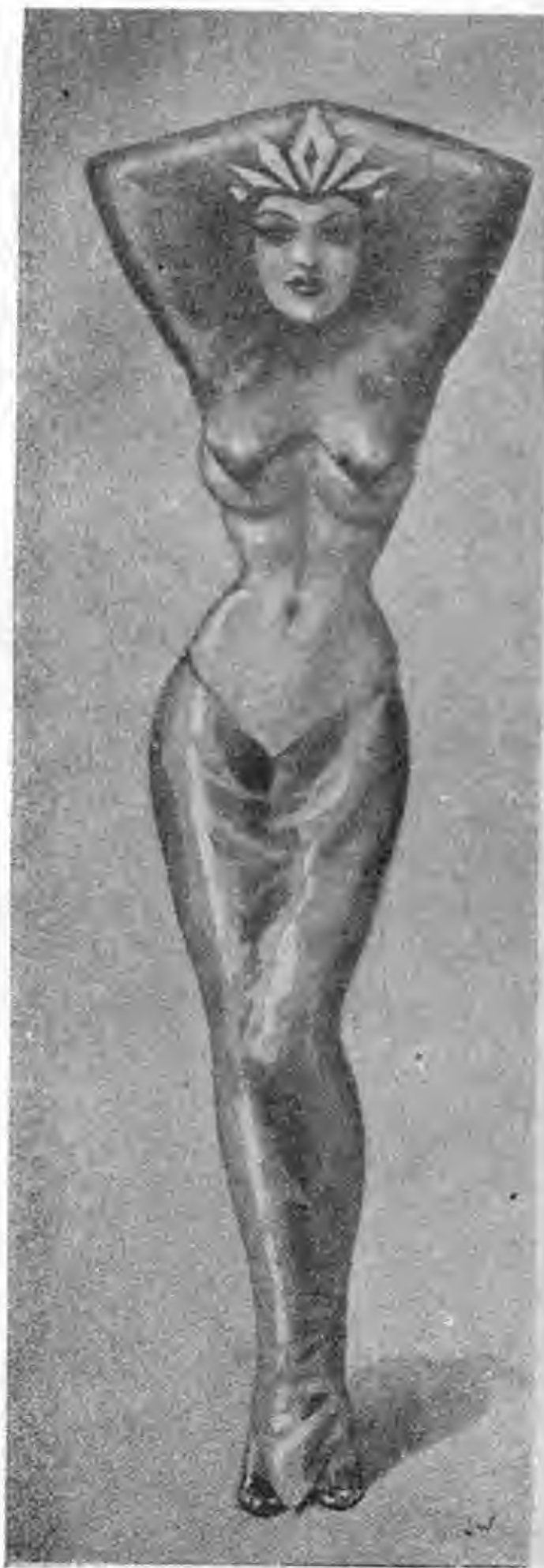


男のモデル……小沼正三……

女に 踏みつけられる 男

ルミ嬢のストッキングをくわえさせられたワン公が、くさりで後手にし
ばられて、芸を仕込まれている。

衣裳化した拘束具



Miss Spaceshir



Milkmaid

百萬ドルのお臀



この豊満な臀部は、マゾ好みであろうか、サド好みであろうか、半長靴、肘まである黒の手袋、コルセット、肌のすいて見えるパンティ、或はフェチ好みかもしれない、それともラジエーターにもたれて窓外の海の景色を眺める単なる美女にすぎないのか。

(Bizarre誌より)

態 二 美 姿

狹山競艇場にて

開催日には、ボートレースの見物で数万の観衆が到する、こゝ狹山競艇場も、今日は明後日からの開催に備えて数人の係員が右横左横する外、人影もまばらである。遊園地の中の各処で撮影の上、いよいよ最後は、見物席の前の金網を利用してのくさりで後手に縛ったポーズ。こゝで撮った十数態の中の二態である。

秋とはいえ、一

点の雲もない紺青の空から降りそぐ太陽光線は、萩嬢の白肌をまぶしいばかりに輝やか



萩千恵子嬢

昭和29年9月2日

し、池から吹いてくる風は髪の毛を快く吹きなぶつてゆく。若し、このポーズのままで、見物席にぎつちり観衆があつたら、どうだろうかと想像したりする。きつと、華艇なんかそつちのけて、ワシヤと沸き立つことだろう。そんな事を考えているうちに、どこからともなく、見物が集つてきそうな気配なので、忽々に、荷物を持つて引き揚げることにした

(辻村記)





今月は麻理をつれてアイスクリーム場へ参りました。彼女、スケートは始めてです。先ず真磨きからはじまつて予定通り盛んにハデなポーズを提供してくれます。でもお転婆で感のいゝ麻理のことです。すぐ上手になるでしょう。以前見たデイズニー漫画「バンビ」

の池のシーンを思い出しました。 すね。

余念なく亡つてゐる麻理を見守りながら、いつか幻想の麻理は画用紙のリンクの上で数々のたのしい演技をはじめたのでした。緊縛スケートだのストリップ・ファイギユアなど皆様、一度見たいもので

X X X

尚十一月号でお願いしたアイデアの件は応募僅少のため中止の己むなきに至りましたが今後とも御援助の程お願い申し上げます。

Suk

suk



戯画

アイス・スケート

畔亭 数久



薄いベールをとおして、そこはかとなく漂う白い肌のエロチシズム、美しい見事なお尻を、ふんだんに拝してくれるポーズ、正面のものは、ベールでかくれると思つたのが、案外鮮明に出たため、残念ながら御披露出来なかつた。今回は、バック・スタイルばかりだが、何れも顔を見せてくれているので親し味のあるフォトとして、ごらん頂けることゝ思う。印刷が果して、ベールのデテイルを出してくれるかが疑問だが、次号では、その点も考えて、変つたものを御目にかけようと思う。



薄^{はく}羅^らをまといて

モデル……………萩千恵子嬢

變相圖

虹兒・画

針火 之末 山虫



地獄

畏 稽 処

杉 原



手 袋

黒い革の手袋が白肌に喰い込むように、素晴らしいアクセントをなしている、そして、見上げた女の顔に凄艶な被虐美が妖しく漂っている。手袋は生き物のように、どこまでも柔肌に喰いついている。白い猿ぐつわが効果的だ。

辻村 隆 実演・着装





モデル 川邊砂登子嬢

足首に鎖のある風景

踏 台

「邪魔になるじゃないか」と罵られながら、女王様が用を足される間、タイルにうずくまっている。女王様の気まぐれで思いがけない御馳走にあずかるかもしれないから。



腰 掛

女王様がお化粧される間、許可が下りるまでじつと、女王様のお尻を支えていなければならない。洗面の水が手荒く首筋に落ちてきたつて。

トイレと浴室での奉仕

春日ルミ嬢
小沼正三

女王様に対する奴隷奴の奉仕は、トイレと浴室で最もよく忠実に、しかも熱心に行われる。平常奴隷の存在を意識しない女王様も、この時には、奴隷を重宝に使用する。殊に入浴では三助としてよく働く奴隷を効果的に活用するが、気にいらないことがあると、即刻、退室を命じて、そのあとで苛酷なお仕置が待っている。

おみ足を洗わせていただく



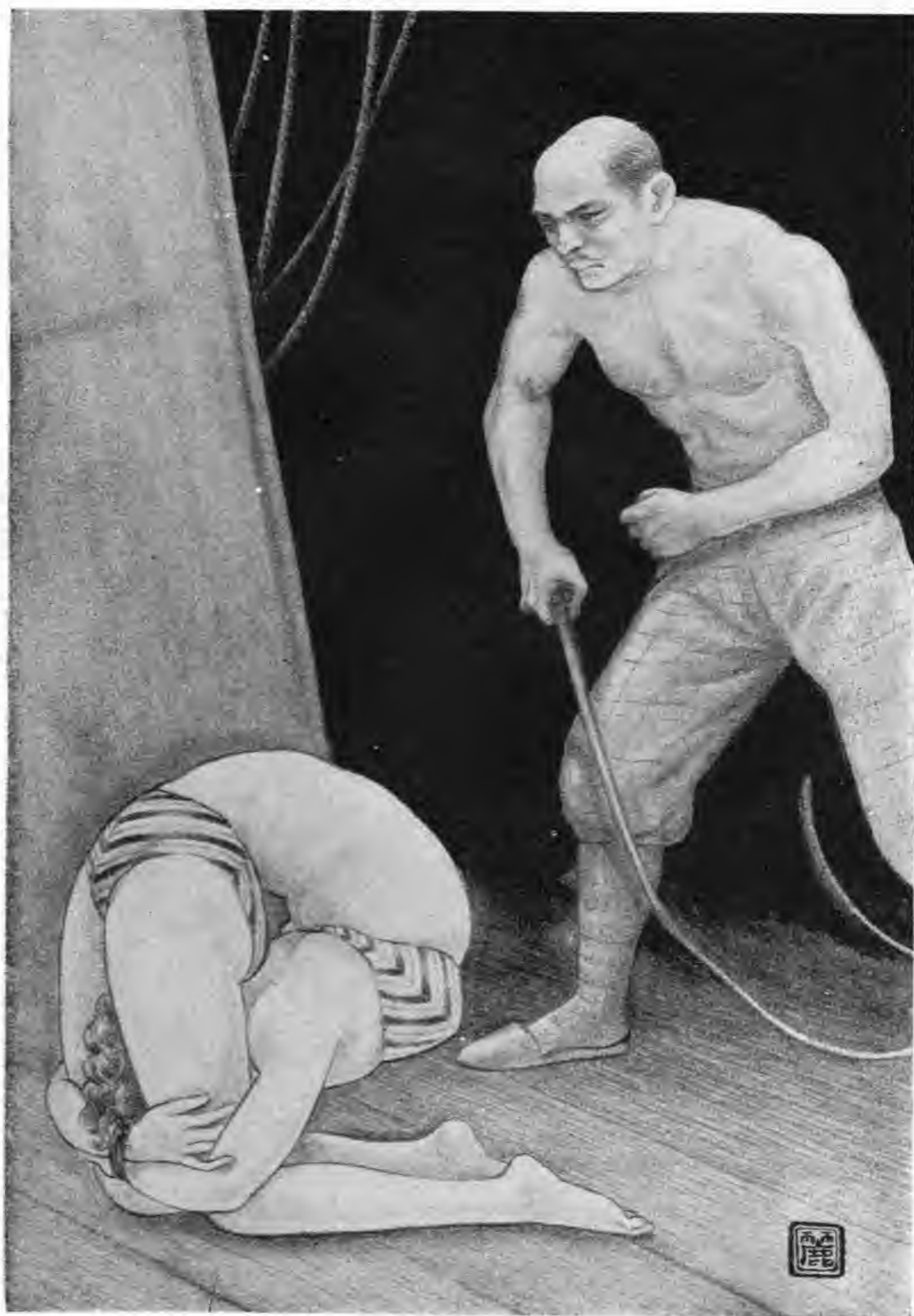
おみ足の匂をかがせていただく



子・画

アクロバット

深夜の舞台で、アクロバットのダンサーが只一人、親方から訓練を受けている。明日の舞台にそなえて激しいムチがむき出しの肌に火花と散る。苦痛にあえぐ女の汗がじつとりとにじみ出てきた。



一寸法師

見世物の一寸法師は一座の人気者である。彼の機嫌を損じた綱渡りの娘が、舞台裏で逆さ吊りのリシチをうっている。寝静つて誰もいない部屋で、娘の悲鳴だけが、かすかにしびきり響つてゆく。

滝麗





残虐な皮革責め

水に濡れた皮革で、両手をひろげて樹に縛りつけられたまゝ、数時間も放つておかれた彼女は、最初の中はなんともなかつたのに、濡れた革が乾くにつれて、そのぢぢみのため、次第に足が宙に浮いてきた。



リンチ 悪人の手中に落ちた、保安官の女助手ロイは、無謀な私刑の場に引き出された美しい西部娘も愛馬の上で、後手に縛められて、観念の眼を閉じて、彼等のなすがまゝに身をまかせるより仕方がなかった。

鼻いじめ あッ、とうとう、鼻いじめをやりやがつた！物好きにも程がある。こんな写真を口絵にのせるとは、けしからん、全く。



おみ足拝見（誰のてしょうか？）

テーブルの下に、こつそり忍び込んで、カメラのシャッターをきつたカメラ・マンは、卓の角で頭をイヤという程打ちつけて、とうとうバテてしまいました。さて、この脚線美を見せたモデル嬢は誰でしょう。

磔

モデル・伊吹眞佐子嬢

柱に後手に縛られ、足首を括られているのだが、下半身をカットしたために見えない。身動きの出来ない時の表情をよくごらん下さい。のどの縄が一寸締めすぎているのかもしれない。



浣腸

浣腸、浣腸といったつて、こんな写真か、と云い給う勿れ、これでも苦心の作、20ccの浣腸器にグリセリンを吸入しているところ、これから、浣腸、排泄と十数枚の連続撮影をしたのだが、先ずこの無難なところで御鑑賞を願う次第である。

春日
伊吹

二嬢名コンビ写真〔池 畔〕

秋草咲きみだれる
甘山古戦場にて

珍らしくルミ嬢が下駄をはいている。真佐子嬢は勿論ハダシである。曆の上では秋とはいえ、陽はまだきつく、二人の上に木の間洩れた光が強いハイライトをつくっている。



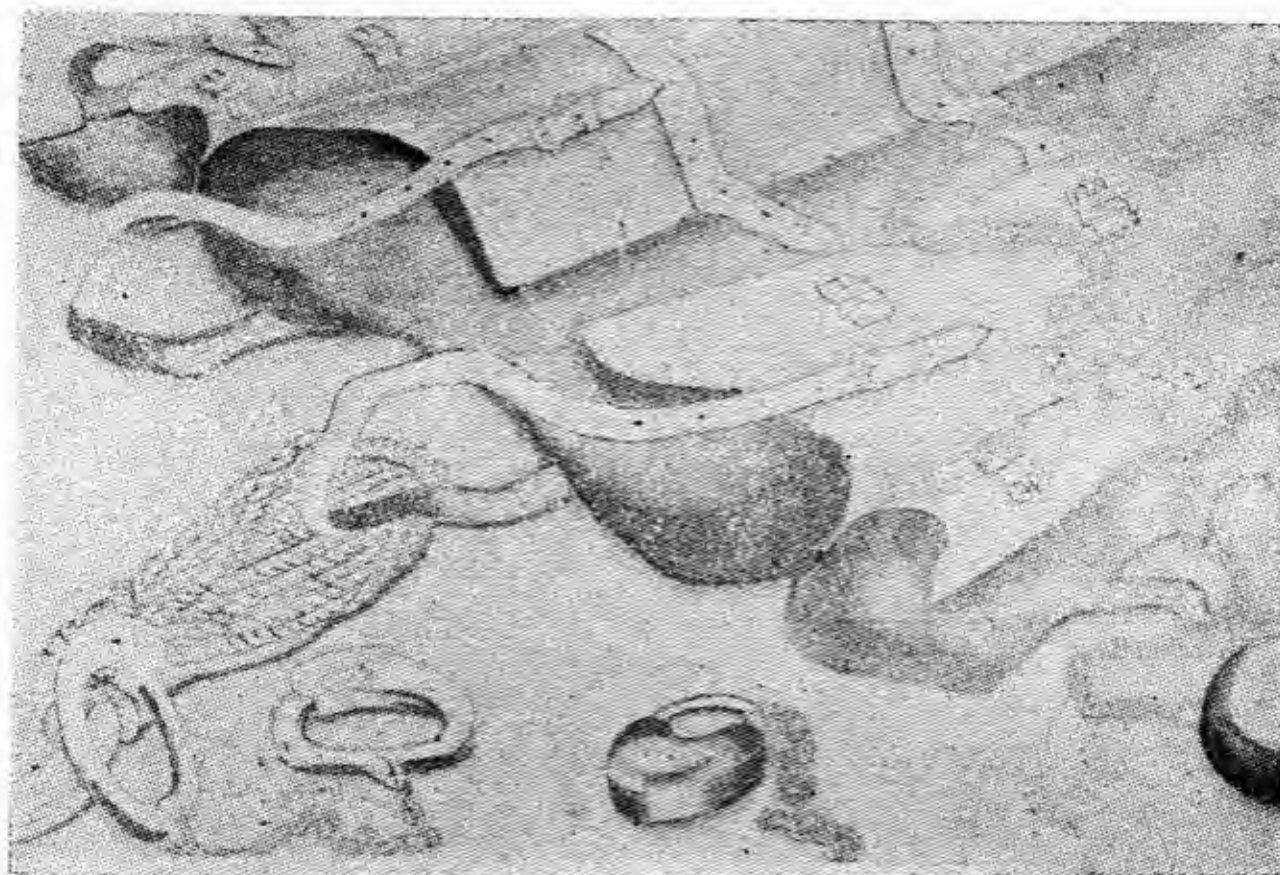
文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1955年 新年号

(第九卷 第一号 通刊第七十六号)

—— 特 別 増 大 号 ——



戒具の図 (刑事博物図鑑より)

東京集治監にて使用の搾衣、手錠、足枷、捕縄等

破壊本能の文化的理由

ある種の誤解に答えて――

林 弓 志 雄



(一)

周知のように、フロイドは、性が性格に影響することを主張して、リビドー欲求の反動形成としての性格特徴を説明したが新フロイド派の女流精神分析学者力カレン・

ボルネイは、――New ways in Psychoanalysis 1939 の全訳――「フロイド」の批判の中で次の如く論じている。(同書三六頁――三九頁)

「性的前戯にせよ、倒錯にせよ、結局の満足は生殖器にある。フェラチオにおける口

の興奮は、性質も強さも腔の興奮と同じである」とフロイドは述べているが、実際はフェラチオも接吻と同様、口の粘膜の快感ほど重要なものではない。口の所作は、たんに生殖器の満足のための条件であり、打ったり打たれたり、裸に見せたり見られたり

或る姿勢を要求したりするのが条件となるのと同じである。フロイドは、この反駁を知っていたが、これは彼の説に対する反証とは見なかったのである。

要するにフロイドは、性的興奮を刺激したり、性的満足の条件となったりする種々の要因に関して、豊にわれわれの智識を肥せてくれた。だが、彼はその要因そのものが性的であることを証明しなかった。そのうえ、彼の説明には不用意な一般化がつきまとった。残酷な行為を見て性的興奮をおぼえる者がいるからといって、残酷さが性衝動の要素だという一般化はなりたたない。

というカレン・ホルネイは「それには、生物学的な理由でなく、文化的な理由を探すべきだ」と批判している。

私は、ここで精神分析学の諸問題を取り上げようとしているのではなくて、カレン・ホルネイの云うように生物学的な理由にばかり拘泥せず、文化的理由の追及に突き進むことによって、人間の破壊本能の本質と、その形態の変化に迫ることができると信ずるが故に引例したのである。

さて、人間の破壊本能についてフロイドは

「われわれは、破壊本能が性愛と融合して内に向いてマソヒズムとなり、外に向けられてサディズムとなるのを、いつもこの眼で見て来た。しかし、なぜわれわれが性愛に関係のない攻撃と破壊が、ゆきわたっている事実を見逃し、人生の解決に当って、それに正しい意義を与えなかったのかを私は理解できない」

と言っているが、マソヒズムやサディズムの本体が、人間の原始的な本能である、破壊本能にあることが明らかにされ、本能なるが故に、すべての人間が享有する心理現象であることが指摘されるのである。

したがって今では、マソヒズムやサディズムを、ある特定な(変態性慾者と呼ぶところの)一群の偏執者にのみ存在する、異常な性格的心理だというような偏見は、漸次、打ち破られて——こうした傾向は、本能として、誰にでもある、普遍的なものであることが、正しく理解されるようになったのである。が、なぜ私がこんな話を、ここに持ち出したかと云えば、実は、いまだ

に跡を絶たない、この問題に関する世間の誤解に答えたいためなのである。

つい先日、大阪の某日刊紙の投書欄に、ヌード写真や、責め写真などの掲載されているエロ本を取締れと、えらく道徳者ぶった云い方で、皮相の論難を加えた一文を見たが、世間には、この式の意見に附和雷同する人がかなり多いのではないかと思われる。

殊に、それを取り上げるといふのではなく一般にある夫らの偏見に、ある意味での、理解を求めるためと、あさはかな非難に反駁することによって、誤解をとりのぞきたいと思うのである。

世間ではヌードをすぐエロだと断じ、責めの写真を見ては、エロものと片付けてしまいが、いったい、何がエロなのかと云う、深い考え方は、全然行われていないようである。

今しも、私がカレン・ホルネイの著書を引合いに出したように、サディズムもマソヒズムも、性慾満足の手段条件としてあるもので、もとより、人間生活の文化性を覆すような危険な代物でないばかりか、実際

的には長い人間の性生活を潤沢してきたのだが、さらに、副次的なこととしては、粗暴であるべき破壊が、耽美的なサディズムやマソヒズムの愛情生活によって昇華され、他面、性慾に關係のない人生に対する破壊作用を、未然に防止して、人間の文化社会を安全にしているという事実も見逃してはならない。

(サディズムや、マソヒズムの傾向を罪惡視することが、実に、おかしいものだということに、思い至ってもらえば幸いである。)

(二)

さらに、話をすすめよう。

文化的な背景、つまり、現代社会の風潮というものが、人間の破壊本能にどう響いてくるのかということを考えて見よう。

本誌九月号に、吾妻新氏がこのことについて「私は訴える」の中で十分に卓見を示されたのだが、私は、少しく観点を交えて見る。

現代における特質は、人間の破壊本能が、著しく自己破壊の方向に内攻している

ことをまず提示したい。戦争中は、外征兵士はすべて外的にその破壊性を露出して残酷が兵舎の内外に漲った。社会的にも、暗殺が流行したように、たしかに、精神的サドの風潮を巻き起したが、終戦後——自主が喪失して、植民地的卑屈が浸透するに至り、やがて、自己処罰の、やる瀬ない溜息が充満するようになった。

その現象は、ヒロポン中毒となり、自動車強盗となり、一家心中となり、家庭の破壊となり、妾殺しとなり、妻殺しとなり……それに、ティン・エイジャの、妄動的な強盗、強姦殺人事件となって、いっそう世相を暗澹憂鬱な、曇り日の枯野の如き、荒廃の中に沈没させるようになった。

いったい——かかる世相の裏付けは、生活に対する光明を失った現代人の堪え難い宥めようのない自己処罰(被虐、自虐)の脅迫的衝動そのものであり、それは文明破壊の末期的症状として見られるのである。

殊に青少年が、世相の波の中で、明日への希望がもてず、確乎たる信念生活の建てようがなく、家庭そのものにも愛情を欠くようになって、沸るが如き、青春時の破壊

本能が、その文化的捌け口である、社会と家庭で、強度の抑制と禁止に会い、勢い自己処罰(自虐)の内攻的な異常心理を形成するようになったのだが、それは今では、良心の癌になっているようである。

私達は、ある事物の行詰りに会うと、思わず自分の頭を、痛いほどコツン、コツンと叩くが——それは、自己処罰の初期的象現で、現代人は、日夜、何かの形で自虐しているのである。

その状態が、現代の生活では、病的にまで昂進せざるを得ない条件の下にある。中年層の者は、その衝動が性慾と結びついてマソヒズムになったり、さらに移行して、サディズムともなつて、性的享樂の範囲で昇華させているので、実害が比較的に見当らないが、しかし、そう言った経路を辿り得ないで、発狂する人は、恐らく予想外に多いのではないかと思われる。

青少年には、その面の昇華機会が閉ざれているので、多くは、犯罪や反社会性と結びついてしまうのである。青少年には、むしろ適切な——たとえばカール・A・メニンジャーが示唆したように、科学的に、耽

美的に、道徳的に破壊本能の衝動を昇華させることの必要があり、そのためには、娛樂のような創造的昇華を通じて放散させるべきだろうが、青少年の多くは、経済的に恵まれざる階級に属するから、パチンコ一つが、実際には娛樂できないのが真実だろう、したがって、その衝動は、事実上抑圧禁止されたも同然であって、痛ましい青年心理の内攻的自虐の症候が眼に映るようである。

ひとたび、犯罪性や、反社会的行為と繋がった自虐心理は、そこに異常な願望をもちはじめるのは論の俟たないところである。

最近の傾向として、犯罪人になりたい願望が漲漫的である。(昔の刑務所入り志願者)それを細別すると、空腹との結びつきで、檻房に入りたい願望、一つの見栄で手錠をかけられたい願望、刑罰の宣言を受けたい願望、などがあり、また一方には、喧嘩をして傷害を受けたい願望、浮浪してみたい願望、などもあり、それらの被虐願望が達せられない場合に、はじめて、兇悪なる強盗殺人をやったのけるのである。(たいていの兇悪犯の青年が女性型であること

も関連している)

通常、私たちは、この場合の心理説明を自暴自棄と云う、これが自己処罰であり、被虐であり自虐である。

現代文明は、人間を益々自暴自棄のタイハイの中に追い込んでいっているのは、等しく文明批評家の痛歎するところである。人間の破壊本能の形態変化も、その理由を、かかる文化の影響において理解されなければならないと思う。

(三)

ついで、犯罪について一考を払いたい。

犯罪とは、遺伝素質と、心身変化と、生活状況の三相の相互関係から生じる生活現象である、というのが最近の定説のようであるが、これについて、東京少年院長谷貞信氏は「少年犯罪論」でこう論じておられる。

「反社会性は遺伝素質を根基とし、受胎時、胎生時、出生時及び出生以後の心身障害を副因とし、更に生活条件との相互関係のうちに形成され、発展するものであって、親の心身状態に発端を有し、本人の生活に關係する凡ての生活条件のうち、不健

全な家庭生活、躰の欠陥、とりわけ放從不節制、短気粗暴の激成、金銭物品の取扱いの粗末さ、金銭の出し放し、浪費、虚言、子女の不良行状に対する親の心やりの不足、戦災学校、其他の学校の不健全状態、校外生活の不健全、盛り場、インフレ、生活難の影響、少年不良化の普遍化の影響のため、次第に反社会性が形成される」と述べ、さらに反社会性発展の要因の統計をあげている。

要 因	人 員	%
買 食	一、〇八九六六・六五	
映 画	一、〇四八六四・一四	
盗 癖	一、〇三五六三・三四	
交 友	六八九四二・一七	
家 出	六〇六三七・〇九	
保護団逃走	五九一三六・一七	
勤務先逃走	五八三三五・六八	
浮 浪	五〇四三〇・八四	
喫 茶 店	三八三二三・四四	
公 娼	二七七一六・九五	
私 娼	二七二一六・六五	
カフエー	二一九一三・四〇	
ミルクホール	一八八一・五〇	

娯楽	一八六二一・三八
運動競技	一二一・七・四一
玩具	五三・三・二四
女給	四一・二・五一
芸妓	二〇・一・二二
小説、雑誌、新聞	一五・〇・九二
柔道、剣道、大弓	六・〇・三七
父の教唆	二・〇・一二
従兄の教唆	一・〇・〇六
親方の教唆	一・〇・〇六

右の、谷氏が要因として列举されたものの中で、新聞雑誌の影響が、他の項目のものに比して、あまりにも比重が軽いという事実は、エロ雑誌を眼の仇にしておられる人の側にとっては、いささか拍子抜けであるかも知れないが、青少年の反社会性発展の基因としては、眼に映ることよりも、もっとじかに訴えてくるところのもの、触れてくるところのものの方が意味が大きいのは当然である。

例えば、映画の感動は、活字を通しての空想よりも深刻でもあるし、また青少年がどの程度の活字を理解判読するかと云う

に、その範囲は極めて限られている。それに盗癖、交友、家出などの生活条件は決定的なもので、防犯的な立場からも、また、少年の善導の立場からも、近視眼的な偏見をすてて、根本の問題に対決していく熱情こそ必要であろうと思われる。

こゝで、一ト言触れたい問題は、最近一、二の事件が報道されたが、青少年の性犯罪についてである。

高校生が、ワイセツ行為をし、多数の女子を凌辱したというのだが、甚だ遺憾なこととは同感の至りだが、それを単に教育上の欠陥とも云い切れないし、本人の特異な性格とも断じ切れない。問題はもっと複雑である。

私の言いたいことは、こう云う性犯罪が直ちにサディズムと結びつけられることの愚かさを指摘したいのである。

強姦という行為自体にサド的な興奮を覚えるのだろうか―と推理するのは、恐らく、未開時代の、遺習的な情感がその人の血の中にあって、ふっと刺戟されたからであると思う。

だが、実際は、性慾衝動の突発的なもの

が、強姦という形式を通して奔流したのであって、はじめから、強姦そのものの残虐性に性慾したのではないのである。

責めの図模様は、あれを強姦と結びつける人は、まず無いと言ってよい。我々の心情は、貞操を暴力で奪うことの、むしろ、憎むべきことを知り、その罪悪感がひとたび起るとどんなに熾烈な情慾も冷却するものであって、それは我々の近代的教養によって解決される。

責め図は、人間の原始的な破壊本能を、サディズム的な、マソヒズム的な範疇で、人間的愛情によって浄化された、一つの愛情表現―なのである。それは、熱烈な接吻と、少しも変ることのない、性愛の条件的意味をもっているのである。

暴行をした高校生の問題は、サディズムでも何でもないものであり、この問題の解決には、遺伝素質、心身の変化、生活条件の調節が、科学的に、心理学的に、ある定められた方論に従って処置されるべきだと思ふ。

(四)

性の問題の追及は、人間そのものの究明でもあるし、人間文化の推進の根本命題でもある。

私達は長い世紀の、性愛神秘主義の、封建的ペールを払いのけて、やっと、科学の光りと、文芸的批評のスポット・ライトを当てがったのである。そこで、生命の火とともに燃えている、破壊本能の行方に、サディズムとマソヒズムの潮流を確め得たのである。

私達は、さらに、心理学的にも、科学的にも、ほんの問題の糸口を捉えたに過ぎないのである。

研究はこれからであり、我々が、現代人の性愛生活を、いかに幸福に導き得るかの――真摯な努力も、今後の研究にかけられるわけである。

私達のような、寄稿家――読者――は、互いに本誌を通じて、この至上の目的に邁進しているし、本誌は、この読者の要望を荷って、故なき偏狭なる誤解や、非難や、その他の困難に屈せず、その文献的雑誌の使命を真ッ向にふりかざして業績を打ち樹てつつある。

それにしても世の短見者流が独善的に批判するのはよいとしても、当局者に向って強権を以て取締れと要請するに至っては、これを黙過することはできない。少しくそのことに論及しよう。ものの功罪は、容易に判定できることではないが、本誌の如き特殊な分野に根を下す雑誌のもつ意義は、猶更らである。我田引水的に主張するのではないが、サディストや、マソヒストにして、屢々誤れる劣等感に捉れている人があ

る。そのままにしておく、影に怯える如く、神経症的な――一種の脅迫性の自己不確定性型の性格を帯びるようになるものだがそのような類似型の人で、本誌を読む機会を得て、忽ち医された実例がある。この事実は、本誌が病的な、異常発達を遂げた癌のような良心に対して、名医の役割を果しているのだとも云える。或はその他に、社会悪と人間性墮落の、安全緩衝地帯となっていることも想像できるのである。

だが、そうした主張は、確な数字的、具体的根拠を示すにしては、いろいろな事情で差控えねばならぬ点もあるので、茲では良心的な編集態度を示すことによって、公

正なる批判が受けられれば、筆者をはじめ編集者にとっても光榮とするものだ。

最後に私は、我々の研究と、その発表が日本国憲法の保障の下にある以上、その基本的人権の侵害に対しては、これを許さないという固い良心をもっていることを申し上げておきたい。云うまでもなく、憲法第二十一条では言論の自由が保障され、第二十三条では、学問研究の自由が、民主主義の鉄則として保障されている。

もし、この線が崩れるというのならば、我々は筆を折って、潔く民主主義を放棄しよう。かくの如きことは、どんな強権な政府が出現しようとも、国民の許すところではない筈である。

私達は、社会の明るい徳義を尊重しつつ、一意、真摯なる研究に没頭するもので、社会の健全化に協力を各まぬものだし、善言には傾聴する誠意をもっている。

ただ、本誌が我々執筆者にとっても、また読者にとっても、我れ自らの、人間性の自由を謳う砦なるが故に、永久に死守しつづける熱情をもっていることを表明しておきたい。

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

繩と足の遍歴

(續・あぶのたわこと)

幾山疑迷



この前の愚文で一応私の習癖について御披露申上げたわけだが、書き落した事柄や映画がいくつかあるので再び筆を執った。

最近、エレイン・スチュワートの見事な足が私の魂を奪っている。その指、その形、正に一箇の芸術品以外の何者でもない。チャリシイの足と好一对という所。好きな女優の好ましくない足といえ、前記の外に島崎雪子有馬稲子、高峰秀子、南田洋子、アン・ブライス、バーバラ・スタンウィック、イブリン・キイス、ジャネット・リーなどがある。顔がキレイだと足は駄目で、足が美しいとお顔がまずいのは何か宿命的な因縁でもあるのかと、小さい頃からよく頭をひねったものだったけれど、今でもある程度そんな気がしてならない。島崎や有馬のあのチャーミングな美貌がラムーアやチャリシイの見事な足を具えていたら、どんなに私の胸は高鳴ることだろう。「大根足！」全く嫌な日本語だ。けれども日本に女性がいる限り永久に滅びることのない言葉なのだろう(失礼)

「奇ク」などで足をなめる写真や記事を見ると私も一度でいゝからそんなチャンスを探みたいと思う。ある夜絶世の美女の寝室に一人の怪漢が現われ、みる／＼うちに彼女を縛り



上げキレイな唇に猿ぐつわをかけてそっと懐中電燈を足に当てる……小刻みにふるえる百万ドルの脚線美、彼は満足気にニタ／＼笑いながらそのすんなり伸びた足指を弄ぶ。口づけしたり、しゃぶったり、鼻でこすったりしてしばし桃源境をさまようのだ。その時の彼の神々しいまでに満足をしたゝえた笑顔を見よ。この世の一切の名誉を捨て、美女の素足々に全生命を捧げて悔いない男！ アブの官能の乱舞。彼はやがてピンクの絵の具と白い紙を取り出す、主なる目的の指紋ならぬ蹠紋(?)を頂こうというのだ。両方の足裏に丁寧に塗ったピンクの液がそのまゝ白紙に美しい蹠形を画いて、彼をこの上もなく喜ばせる。無事大任を果たした彼は、今一度、足指に接吻してサツと闇に消えて行く。そしてその翌朝、彼女はそのあられもない姿態を女中に発見されるのだ……この夢を私は度々胸に画いては果し得ぬ願いの幻影に酔っている。本当に美女の素晴らしい素足をなめることが出来

たら！ もう思っただけで気が狂いそうだ。挿絵画家の中では岩田専太郎、富永謙太郎、中一弥の描く足が好きだ。志村立美、三谷一馬などともいゝが前者ほどには好きではない。今地方新聞に連載中の鹿島孝二作「おとこ大学習細君教育」にこんな一節が出て来る。

「クいい気持！ とあや子が声を上げた。足を動かした。半ズボンなので彼女の両膝は丸出しである。白くて、たっぷり肉がついていて悩ましい。しかし昌平はそれよりも貞子の足の方に魅力を感じるのである。貞子は座っている。が、下が板で痛いので、足を曲げてやや斜めに体勢をとっている。その少し横に出した足の何と誘惑を感じさせること！ 西洋人も支那人も、女性の素足を見せられると、著しく欲情をかき立てられるそうだが——いやそんなことを考えながら貞子の足を見、この足だったらどんなに興奮するだろうと思うと、昌平自身欲情をぐいとあおり立てられるのだった。昌平は自分を取りしめるために横を向いた。云々」全く我が意を得たりというべきだ。

小さい頃、母から足が汚ないとか、お前の足は中指がずい分長いんだね、などと足に関して言われると思春期の少女のように

顔がほてったものだった。体操の時間、ハダシで庭に集合した時や、始まって教室へ入る時の足洗い場など人に変に思われる位、足元ばかり見つめていた私。素晴らしい足を見つけるとその夜は一晚中興奮して眠れなかった思い出。

濡れた足跡が一つ／＼生きて私の目にとびこんで来る喜び。今でも直ったわけではないが小さい頃の方が純真だったので、ボーッとなるなり方が強烈だった。街の演芸会場へ歌を聞きに行った夜、すぐ前に坐った女の人のキチンと重ねた足裏にすっかり魅きつけられて歌がそっちのけになってしまったのが、つい昨夜のことのように思い出される。スカー



トの裾でかくそうとするのだが、すぐポツカリ可愛い指が顔を出す。五つの桜貝のような指！ さわってみたい、なめてみたいという欲望を一生懸命抑えていた思い出。家のすぐ横に素晴らしい足を持ったキレイな娘が住んでいた。ある夜、電球が切れたとか切れないとかで、家の座敷へ上って電燈にすかして見ている時、私は気づかれないように彼女の足元に転がって心ゆくまでその指、その力ガットのチャームを看取させて貰ったことがある。よく縁先に腰かけて足裏を拭いている情景にぶつかり、ほんのり赤味のかゝった美術品を鑑賞することができたが、嫁いで行ってしまった今はその望みも消えた。

映画に出てくる女優の素足について、書いてみよう。「肉のロウ人形」で女が素裸で手足に鉄輪をはめられ、あわやロウ漬けにされんとする緊迫シーンあり。立体天然色映画だけにピク／＼動く足指



が悩ましく心にやきつけられた。唯、側面からの描写だけだったので残念だった。（尚、この映画には拷問を受けたり後手に縛られて首を切られたりする美女の人形が出て来て興味があった）「にがい米」「シーラ山の狼」のシルヴァーナ・マンガノ、前者の寝そべって左の足裏を見せたスチール写真が秀逸、後者では素裸でマッサージュされるシーンで両足先が見えて印象的だった。「恋の緋牡丹」の島崎雪子、あられもなく素足をニョキツと出して彼氏をくすぐる場合があつてギョツとしたものだが、何分スタイルが頂きかねるので

甘美な陶醉などというわけにはいかない。「ストロンボリ」のバークマン、海岸で靴を脱いで素足を見せるシーンを予告篇で見ただけなので惜しかったと思う。「シンバットの冒険」のモリー・オハラ、寝そべっている足先をフェアバンクスがなでる所があるが、予告篇と本篇と違うのでガツカリした。「ノートルダム」のせむし男の彼女、カシ

モドに助けられた鐘楼の上で、うつぶせになって足裏を見せた。可愛い足指が今でも心にやきついている。「めし」「白魚」の原節子づけ／＼と素足や足裏を見せるので色気はない。「ブンガワン・ソロ」「若い人」「その後のウツカリ夫人」の久慈あさみ、特に「若い人」の床をしいている場面がエロチックだった。「おかあさん」の香川京子、足裏まで十分見せてくれる、好きな足ではないので興味なし。「情婦マノン」のセシル・オーブリ素足の場面は沢山あるが、香川の場合と同じ。「弥太郎笠」の岸恵子、素足の浴衣姿が美しい。「カルメン故郷に帰る」の高峰秀子形は好きではないが色付のセイで何かひきつけるものがあつた。（小林トシ子と舞台でハダシで躍る場面）。

「ローマの休日」のヘップバーン、ベックのベッドでうつぶせに寝ている時、両足を揃えて一寸覗かせるのだが、カメラが遠すぎて残念だった。宿の小母さんに見つかって裸で逃げ廻る時のハダシも興味をそそった。「ボルチア家の毒薬」のマルチン・キャロル、足の爪を掃除させているシーンでぐ／＼とひきつける。風呂場から裸ハダシで逃げ出す場面や寝ている所を引きずり出される場面など、ハラ

くする所はいくつもあったがカメラが遠すぎるので傑作はなかった。足だけ写してもエロチックな気分は出せるのに惜しいことだ。「浮気なカロリーヌ」では、つま先で窓辺へ行く所を後から写す。可愛いかがと、カーテンの蔭にかくれた時、一寸覗いた足先、何とその早いカメラの動きよ。気のきかぬことおびたらしい。「フランス航路」のシーン・ラッセル、「腰拔二挺拳銃」の入浴シーンには及ばなかったが甲板の海水着姿はいゝと思う。身長に比して小型な足が可愛い。「一本刀土俵入り」の高峰三枝子、酔っぱらってヒョロ／＼歩いて鼻緒を切り、つま先で茶店へ入る場面、白い素足が妙に心にきついた。再公開の「モダン・タイムス」では、ポーレット・ゴダートの素足が見られそうに楽しんだ。

× ×
小さい頃は私は相当の暴れん坊だったのでいつも鬼大将、遊びと言えはおきまりのチャンバラや捕物ごっこで日を送った



ものだ。必ず女の子や（もう彼女は結婚して一児の母となっている）小さい男の子を電柱に縛りつけていじめなければ気がすまなかった。今から考えるとあの娘は相当のマゾヒストだったらしい。縛って嫌と言われた覚えがない。よく母に見つかって、人を縛るものではないとお小言を頂戴したりした。もう一人の女の子は、縄に恐怖感をもったものか縛ろうとするチェスチャーだけで泣き出されてクサったことがある。一寸女の子みたいな二、三級下の男の子を手足とも縛って土管の中に転がし運動靴を脱がせ足袋を脱がして、その形のよい素足を愛撫しようとした時、強い反抗に合っただけで元通りにしたこともあった。ある時は黒いつぶらな瞳が素敵な美貌の少女をやっ

ばれてすぐ解かなければならなかったこともある。（こう書く前に縛った経験がないと述べたことゝ矛盾するようだが、今のようない気持で成熟した処女を縛ったことがないとの意味であることをお断わりしておく）。…今年の何月号だかの中央公論の口絵写真に、アメリカの少女が縛り遊びで後手にされている中に、自然に悲しくなって泣いている写真が載っていた。どこの国の子供でも共通した心理のあることを知って面白く思った。自分では内気だと思っている私のどこからそんなサジズムがとび出して来るのだろう。これでは結婚しても、ワイフを縛り上げなければ性的な興奮を得られないなんてことになるかも知れない。私は時々、女のきょうだい欲しいなあと思うことがある。姉さんでもいゝ、妹でもいゝ、家人のいない日、ギリ／＼に縛り上げて押入れに放りこみ、両足だけ出して下からその美しい足先が小刻みにふるえる情緒を眺められたらどんなに素晴らしいことだろう。甘い幻想の中できり私の欲望は満されないけれど。

「縛られる女の出てくる映画もこの前書き落したのがずい分あるので又書いてみよう。

A級はもう全部あげてしまったので、B級

C級になるのは我慢して頂きたい。「折鶴笠」の山田五十鈴、しごきで柱へ縛られるのだが年増女優なのでワク／＼はしない。「天狗の安」の入江たか子もそうだ。この方は細引で丁寧に縛られ、後手や素足まで見えるので若い女優ならなあ、とため息をついたものだった。「群狼の街」の三条美紀、後手を横から撮って仲々イケルポーズだったが、すぐほどこちやうのでつまらぬ。うなだれた姿は印象的。「ごろつき船」の若杉須美子、風呂に入りながら縛った美女を眺められるとは月形もうまくやったものだ。この映画では相馬千恵子が本式に縛られるが、嫌いな女優なので感興はない。「修羅城秘聞」近くは「謎の百万両」の轟夕起子も同じ。理想的な後手だからあの役が高峰でもあったらねエ。「ジャコ万と鉄」の浜田百合子、太綱で馬ゾリに縛りつけられるサドシーンがあるが虫の好かぬ女ゆえ興味なし。

「疲風からす隊」の草間百合子、五重の塔のテッペンで猿ぐつわ、後手の可憐な姿を見せてくれた。美貌ゆえ、又格別な味があった。「はだか大名」の花柳小菊、原健策の「その女を縛ってしまえ」とか何とかいう台詞があって印象に残る。キレイな後手姿。彼女は「

新選組」でも縛られたまゝ千恵蔵の前へ連れ出される。背中をつきとばされてヨロ／＼と前へのめる、しぐさがよかった。「飛びっちょ判官」の時は、手首の縛ってない縄付きで見事に肩すかし。

十字架にかけられるのはどういうワケか、何とも感じない。例えば「快傑鉄仮面」の月丘千秋、好きな女優だけれど、性的な刺激は一向に起らない。

もっとガツカリしたのは「素浪人奉行」の島崎雪子がある。折角、あなたに縛られ／＼ば嬉しいと言っているのに右太エ門の奴、十手なんか折っちゃって野暮な男気を出したものだ。マニヤの夢をブチこわした無念の一作。

「とんち教室」では三浦光子が珍らしく現代劇で縛られる。相当長いシーンで身をもんだり「私を縛って後悔おしでないよ」などとい

う台詞があったり、後手を見せてほどこせたりして楽しませてくれる。映画の出来とは反対に大した拾い物だった。

「里見八犬伝」の田代百合子、朝雲照代に柱へ縛りつけられるが、どうもインチキらしい

ので、無条件に興奮はしない。「白ろう仮面」の嵯峨三智子、ギリ／＼と庭木へ縛られる可憐な風情。

外国映画では「欲望」という名の電車」でヴィヴィアン・リイが縛られそうになる。わざ／＼両手を背中へねじ上げて縄をかければい／＼ようにしておきながら縛らないなんて！ 全く地団太がふみたくなる。「アンナとシャム王」のリンダ・ターネル鎖でつながれてムチを受けたり変った緊縛方法で火あぶりにされるチャーミングなヌード。「リゴレット」の中で、車にがんじがらめに縛られる女が出てくるが、美女ではないから騒ぐことはない。「夢の宮廷」のロンダ・フレーミングは前手縛りな





ので惜しい。「悪魔が夜来る」の女優が両手を鎖りでつながれる。「悪魔の美しさ」の中でホンの一カット、火刑にされる後手の美女が出てくる。身もたえするのが忘れられない。「ジャバへの順風」のヴェラ・ラルストン、両手を吊られて鞭で打たれる場面あり、但し堪能とまではいかない。「アラスカ珍道中」でドロシイ・ラムーアが椅子へ縛りつけられて猿ぐつわをかまされるが遠写なのでつまらぬ。この前書き落した中での傑作は何と言っても「拳銃を売る男」だ。信じ切った女に見事に裏切られたポール・ムニの堰を切った激怒がすさまじい迫力で女を縛り上げる。あきらめ切った女はなすがまゝに後手にされ

猿ぐつわをはめられ：ムニの心境が分るだけに快哉を叫ばずにはいられない傑出したシーン。キチンと縛った後手や、口に布をつめて猿ぐつわをする所を大胆に見せてくれたマニヤ待望の一篇だった。「死の砂塵」の予告篇に、ヴァージニア・メイオが縛られてたり、手錠をはめられたりする場面が、

出て来たように思ったが、この映画を見損なってしまったので確められず惜しいことをしてしまった。近着のアメリカ映画「タンガニイカ」では、ルス・ローマンが土人に捕まわって縛られるシーンがあるらしい。今から期して待ってしよう。

× ×
縄と足の遍歴、幾山河を越えて私は私の道を往く。素足の美女々々縛られた美女々に私と同じような憧憬を抱く人達と、私は一緒に官能の霊峰へ登って行きたい。(了)

【註】 幾山疑迷氏寄稿の中、ヴァージニア・メイオの「姫君と海賊」、ワンダ・ヘンド

・リックスの「追はぎ」と「新モンテクリスト」、「フアビオラ」は昭和二十八年四月号の「縛られた女優達」と重複。

浜田百合子の「青空大名」花柳小菊と千原しのぶの「片目の魔王」西条鮎子の「流賊黒馬隊」新珠実千代の「鞍馬天狗斬り込む」三浦光子の「大菩薩峠」久慈あさみの「殴り込み甲州路」は昭和二十九年十月号の「たのしきかな時代劇」と重複。

田代百合子の「笛吹童子」鳳八千代の「疾風八百八町」は同十一月号の「女優の縛られ映画速報」と重複。

宇治みさ子の「鬼伏せ街道」乙羽信子の「縮図」淡島千景と宮城千賀子の「花の生涯」高千穂ひづるの「風雲八万騎」桂通子の「太陽のない街」リンダ・ターネルの「海賊黒ひげ」は同十二月号の「縛られた女優達」と重複しますので省略致しました。

【編集部より】 サド、マドに限らず女性の素足の美に関心を持たれる方からの寄稿をお待ちします。

被
虐
少
年
期

(第六部)

ソドミーの祭壇

三 根 耕 二

眠れない夜でした。文少年や池田少年の言葉の持っている意味は、私の稚い心にも或る一つの暗示を与えています。そうです、私は少年達の奇妙な愛情に狙われた獲物なのです。仲よくすると云う事が具体的に何を意味するか、私の乏しい頭では解らないけれど夫婦のようなものだとなると、私は誰かの従属物として独占されようとしているには違いないのです。誰かに独占される、何と云うことでしょうか、まだ稚くても私も男なのですから、そのような奇妙な立場になることはいやでした。しかし、此の世界で私の小さな意志

が通せないことは余りにも明かな事でした。私は固い布団の中で、今迄の恐しかった独房での日々を思い、明日からの私の上にする予想すら出来ぬ運命に、八分の不安と二分の期待に、寝苦しい夜を転々として過し、曉近くなってからウツラ／＼としたゞけでした。

夜が明け、起床ラッパが鳴り布団を片隅にキチンと積上げて、各人がそれ／＼掃除をします。点呼が終って、「出房」です。冷たい廊下のマットの上を一行に検身場に入ります。すべて昨夕の逆で、寝衣を脱ぎ、すっ裸になって看守の前の検身棒をまたいで、次の

室で作業服を着て工場へ出るのです。もとより待ち構えていたような夥しい目に瞞められるのは昨夕から覚悟の前でした。工場に出ると一列に三十人ずつ位が並んで洗面します。終わった者から屋外に出て二列に整列する、全員が出ると又点呼です。そして四列になった先頭に四人乃至八人のラッパ手が立って、足ラッパと共に運動場に出ます。広い運動場には他の工場からもラッパの音を響かせて集ってくるのです。

ザツ／＼と駈足の歩調も見事に揃っている運動場に集ってくる各工場の少年達、五百人

余りも居るでしょうか、集合が終ると各工場毎に所定の位置に整列します。体育担当の教官が壇上から号令を掛けて美しい隊形が出来上りますと、壇上には金ピカの肩章もいかめしい長身の所長が上ります。東方遙拝、運動場正面にある皇太神宮への最敬礼とスムーズに進められ、次いで全員上半身裸になって、約二十分間各種の体操をやり、所長或は各課長の訓示があってから、運動場をグル／＼と駈足で廻ってから各工場に帰るのです。

此の朝の日課は仲々苦しいことで、空腹を抱えてフウ／＼云ったものですが、冬は寒気が加わって更に辛いものでした。さて工場に帰ると、配食当番が直ちに食事の用意に取り掛ります。食事が終ると各自の職場に分れて一日の勤めが始まります。午前八時半になりますと「学校」から迎えにきます。入所した時に調べた学力を基礎にしてそれ／＼の学級に編入されていて、尋常一年から三年、同じく四年から六年の二級、それからは青年学校と同じ普通科一年、二年、三年、補習科と云うように、低学年は毎日、青年学校になると、一日置き、補習科は週一回と云うように授業があります。教務課が此の教育を受持っていて当時五人程先生がおりました。

午後は又教練が行われます。これは一期を半年として、一次前期、一次後期と進級して三年で修了する訳です。教練は下士官上りの看守が四人で訓練をします。それを勝村と云う予備の中佐が監督しておりました。教練は三八式歩兵銃や軽機関銃などを使用して行われて猛訓練です。これらの学課や教練の成績は、各自の毎月の責任点数に関係して進級に影響するのです。もう一つ面白い事に姫路少年刑務所内にこれらの教育を、錦陵青年錬成所として、正規の文部省認可の青年学校として扱って、出所してから一般の青年学校へ転入出来ることになっていたのでした。

さて学校のお話で横道にそれましたが、私の方に話を戻しましょう。私は普通科一年でしたので学校は一日置きなので、作業場に行き仕事を始めました。昼前になって学校からも帰ってきて工場は賑やかになります。ボタ餅看守も休憩にゆき、工場には若い交替看守がきました。若い看守などは工場にくると温和しいものです。少年と云っても娑婆にいた時にはいわゆるグレンタイと云われた、暴れ者が多いだけに、もし集団で反抗されたりしては手も足も出ないことが分っている丈に、若い看守達は工場の幹部連には、少々のこと

なら見て見ぬ振りをしています。こんな迎合的な態度が幹部少年達に、常識で考えられぬ振舞をさせるのです。

若い看守は担当台の上で、隣りの事務の少年とおしやべりに夢中です。私を呼びにやってきたのは、同房の池田少年でした。私を連れて手袋作業場の奥にある製品倉庫の中に入ってゆきます。八帖ぐらいの倉庫の中には、出来上った手袋が積まれていました。中に入って薄暗い電灯の所にゆくと、もうそこは、担当台からは全然見えない場所です。そこには私の室長の文少年が特長のある大きな目玉を光らせています。その外、私に仲よくしようとして申込んだ連中、白川、吉崎、谷口、印刷の幹部である大辻のガツリした体も見えます。私は一瞬身に迫る危機を感じて「アッ」と小さい声を立て、倉庫外へ逃れようと思いました。でも入口の扉はピタリと閉ざされてその上、池田少年がその前に立っているのです。しかも外側には小柄の辛幸烈と云うこれも「あんこ」にされている少年が、ニヤリニヤリとしながら、看守のシキテン（見張り）をしているのです。

私はそこに座ってオド／＼と幹部達の顔を見ました。池田が私の腕を押さえると、二人

がかりで私の上衣を脱がせ、シャツまでむしりとってしまうのです。私は身をもがきましたが、何と云っても十六才になったばかりの少年の哀しさ、遅しい彼らにかゝっては小鳥みたいなものです。声を出そうとしましたが、誰かの手が口をふさいでいます。それだけでなく外は手袋編みの機械が物凄い騒音を立てゝいて、到底私の声など外部に聞える筈がありません。それに仮に声が看守の耳に達しても、幹部達のやっていることに、どれ丈干渉するでしょうか、万一看守が彼等を反則者として摘発したとしても、その後、私の上に加えられるであろう復讐のリンチの恐ろしさを考えると、私の声はもう出なくなってしまうのです。

もがいている抵抗を楽しむかのように、上



半身むき出しの私の両腕に、用意してあったらしい細い縄が絡みついてきて、私は後手に縛られていました。その上にメリヤス系の塊りが口に押込まれ、私の小さい唇を割り、白い歯の間に日本手拭が喰込んで、声を出す自由を奪ってしまったのです。私の体はそこにも転がされて、艶々した青白い肌、胸の辺りにも細縄はキリ／＼と執念深い蛇のように、巻きついていたのでした。

前からしめし合せてあったのでしよう、誰か私の身体を軽々と抱え上げると、倉庫の奥の箱の上に下ろしました。箱の上には交換衣服なのでしよう、作業服を何枚も敷いて、裸身を横へても痛くないようにしてあります。私はそこにうつ伏せに寝かされて固定して括りつけられました。その上、足首をも縛りつけて置いて、私のズボンの紐を解きズボンを足首の所まで、ずり下げてしまったのです。私の身体は今一枚のふんどし一つが残されただけで、身動き出来ぬ姿で彼等の前に曝されているのです。彼等は私の足首の縄を解くとズボンを脱

ってしまつて、今度は足首と足首の間を一米位の間隔をあけて、縛りその両端を左右の柱に括りつけてしまいました。つまり私はふんどし一枚で台上に、足を大きく左右に開かれて固定されて縛りつけられているのです。

その時誰かが電灯を明るくし球とつけ替えました。私は明るくなった光線の下に奇妙な恰好で、少年達の視線の前に身を曝しているのです。今や私の肉体は彼等の思うまゝの一個の肉形にしか過ぎません。私は縄の巻きついていゝる身体を、僅かに振り、ちよめてその執拗な恥知らずの視線から逃れようとしていました。

その時、ガラツと戸が開いて誰が入ってきました。

「オイ辛公、大丈夫か」文の声です。

「うんオヤジは今、本を読んでる」

今迄工場一の愛童として有名だったと云われる辛幸烈少年は、半島人にも似合わないきれいな日本語を操ります。それにしても彼は何の為に入ってきたのでしよう。彼は縛られている私の顔の所にきて、そこへ座り込みました。俯伏せにされている私の顔は、座っている辛幸烈の所からはよく見えるのです。彼は辱しめを受けて、ポロ／＼口惜し涙を流して



いる私の顔を、ゆっくりと鑑賞しようと云うつもりなのです。恐らくは今迄、彼の占めて

池田の太い声がそう云っているのです。
「きれいな肌してるナ」

いた工場一の人気者の地位が、此の私の新鮮？ な新入りに取って代られようとしている嫉妬の思いが、その苦しむ顔を、恥しさに喘ぐ顔を、眺めて更に恥かしめてやろうとしているのでしよう。恐らくは辛少年自身も新入少年として、きつと私の様に人身御供に上げられたことがあるのでしよう。ニヤ／＼と、これからお前のされる事はチャアンと知っているんだと、云わんばかりに私に気味の悪い笑いを見せるのです。私は年長者から見られているより、同年輩の少年の前に身動き出来ぬ裸身を曝している、このことの方がどんなに恥かしかったことでしょうか、

「おいこいつは飛切だナ」

大辻らしいのがそう云って、私の太腿のあたりを撫でまわします。

「もう時間がないぞ、調べてしまおう」

文の声がしました。調べるって何を調べよう云うのでしょうか。

私は苦痛で身をものがきました。額からポト／＼流れ落ちる汗、ニヤリ／＼とする辛少年の顔、思わず私は気が遠くなっていました。私には泳えきれぬあまりの屈辱感でいつか気が失っていたのです。でも、しばらくして気がついていました。誰か私の顔に水を吹きかけたのです。私はいつの間にやら仰向けにされていました。今度は皆の顔がよく見えます。私は思わず顔をそむけて、反抗の意志を表しました。ニヤ／＼と多勢の顔がそれを見つめています。しかし何と云う冒瀆でしょう、何も知らなかった無垢の少年の肉体を彼等は面白半分に弄んでいるのです。彼等の云う調べはこれで終わったらいいのです。縄を解いて猿轡も外してくれましたが、私は羞恥と怒りで無言のまゝ、手早く衣服を身にまといました。

「オイ三根、これは新入りの検査だからナ、人に云ったりするとひどい目に逢うぞ」

文がうす笑いを浮かべ乍らそう云うのです。

私は黙って外に出て自分の作業場に帰ってゆきました。多勢の少年達の好奇の視線が注がれていました。中には、「どうしたんや」と聞く奴もおりました。私は黙って首を振って自席で仕事を始めました。

若い看守はまだ担当台の上で何か読みふけているのです。知ってか知らずでか、恐らくは幹部の少年の手が打たれているのでしよう。私は仕事をしながら、先程の事を思い出すと唇がワナ／＼と震える程の、屈辱の思いで思わず顔が赤くなってくるのでした。辛少年が便所へやってきて、私の方へ意味ありげな視線を浴びせてゆきました。あいっ—私は嘲笑と敵意を露骨に現わした彼の視線を、はね返すようにぐっと睨みつけてやりました。

後に解ったのですが、工



場に可愛い少年が新入りとしてくると、自分

の物にしようとして、私のように仲よくしよ

うと云って行きますが、一対一に話がまとまれば簡単ですが、もし一人の少年を何人もが自分の物にしようとなると、結局それらの者達で一度狙われた者を、先程のように展覧に供して、手を引く者は引くと云うことになります。話合いで決しない場合には、結局は決闘で所有者を決めることになるのです。私の場合、一人も手を引きませんでした。飽くまでも私を執心しているのです。それどころか私のいわゆる調べをしてからの方が、かえって彼等の独占欲が強くなったのです。彼等にとって新鮮な魅力のある獲物であったのでしよう。

争いはその日の午後に至って起りました。その日の午後は私は教練日に当って

いて、工場から十人程の少年達と一緒に、運動場に行きました。途中で教務課に寄って、ゲートルを巻き、地下足袋に履き替えます。運動場に出ると他の工場からも集ってきます。私は一年次前期、つまり教練は初歩から教育を受けるのです。眼鏡をかけたカーキ色の服の教官、後で知ったのですが、綽名をグじやが芋々と云う土田看守です。年は二十七八才でもありましょうか、元氣のある教官でした。土田看守は兵役では軍曹だったそうで、大変きびしい人でした。

一年次前期は全部で七十名もいたでしょうが「気ヲツケー」「右へ習エー」と次々に号令されて、私はまごまごしながら人のするようになり、列の中に入り右肘を張って並びました。整列が終ると、勝村中佐がゆっくりと大股で歩いてきて私共の前に立ちます。五十五才位でしょうか、ピンと尖った軍帽の下から炯々とした目が光っています。小柄ですが半長靴を履いて立っている姿は、流石に堂々としています。「教官殿に頭右ツ」と私共は敬礼をして点呼になります。私の名は最後でした。新入生ですから私は勝村中佐の目についたのでしょうか。「お前はまだ若いな、真面目に頑張って早く社会人になるように」と云わ

れました。それから何年間か、私は此の老中佐から割に可愛がられて過したのですが、それは後のお話です。

約二時間、私達は初歩の徒歩訓練を受けました。氣をつけ、廻れ右、拳手の敬礼、と云った簡単な動作ですが、仲々に氣骨の折れるものでした。私がそんな事をしている間に工場では、一寸した事件が持上っていたのです。原因は私を廻っての争奪戦なのです。印刷工の大辻と云う二級と宗島と云う三級、それにメリヤス工の文少年と白川と、二組の殴り合いが始った訳で、ボタ餅の手に依って取鎮められたのですが、四人共看守の皮バンドで大分殴られたらしいのです。無論戒護課に報告すれば懲罰ですが、一度に四人の幹部を失うと、作業上に差支えもあり、それに看守の成績も悪くなりますので、工場だけの処罰だけで済んだらしいのです。

私が教練から戻ってくると、工場の空氣のざわついてるのが感じられました。——ハテナ何かあったのかな——と思い乍ら、点呼をすませて席に帰りますと、小野寺がそとやってきて、(ゴロ)喧嘩のあったことを教えて呉れました。それから一寸顔を赤くして「お前もへんな事されたか？」

と聞くのです。私は小野寺もやられたのかと思って

「ウン恥かしい事されたんや、お前もか？」と訊ねますと、彼は昼から三人の幹部にやはり倉庫に連込まれて、私と同じような洗礼を受けたのだそうで、

「でも俺、修智学園などでもへんな事されたから案外平氣さ」と云うのです。成程警察に始めて連れて行かれた何も知らなかった私とは違って、小野寺は十二の時に感化院に送られ、そこを逃げ出して、再び捕えられて上級の感化院へ、又逃げる云う工合に七ヶ所の感化施設を経ているのです。可愛いむっくりと肥えた、どこかの坊ちゃんのような彼のことです。そのあちこちで、年長者から狙われた経験があるのは当たり前でしょう。当時の少年犯は、初めの内は説諭、回が重って少年審判所に送られて審判を受けて、一級、二級の感化院に送られます。級に応じて、一号処分とか二号処分と云われます。最初の内は規則の割に緩やかな施設に送られて、待遇も割に良いのです。短かい時間で許されるのですが、仲には規則生活がいやで逃走する者があるのです。それらは次々と重い上級の処分を受けて、厳しい所

にと入れられるのです。それでも学園と云うのは逃走が容易なのです。しかし七号、八号処分となると、国立少年院に送られるのです。之がいわゆる感化院の終点で、格段に設備も頑丈となり、規則も厳しくなります。こゝでも手に負えなくなると、初めて裁判所で審理されて、少年刑務所に送られることになります。少年刑務所に送られる者の殆んどは此の道程を経ているのですが、僅かの少年達は初めての犯罪で一足飛びに、少年刑務所の門を潜るのです。

私などのように、殺人、強盗、強姦、放火等の重罪の場合は、満十四才に達していると感化院でなく、最初から、少年刑務所へ送られてしまつて、多くのすれ切った古強者の中で辛い経験を味わせられるのです。私の場合も前に書いたと思いますが、公判の時期が一・二箇月早ければ、感化院の保護処分で済んだのですが、誕生日を迎えた所で裁判があつて、満十四才と云う点で此処の鉄門へと送られてしまつたのです。公判の時、弁護士はその点を衡いて検事と論争した位で、その為少年刑務所でもギリ／＼一杯の最年少者となつた訳でした。

しかし少年法に依つて、再び罪を犯さぬ限

り前科をつけず、更生の道が開かれていて、その点恵まれていた訳です。その代り二度目に犯罪をしますと、一度に前の分もついて前科二犯と云う事になるのです。現在は少年法が改正されて、満二十才までと云うことになってゐるようで、いわゆる日大ギヤングの山際、先日の大阪での行李詰死体事件で伯母を殺害した黒田と云つた悪質犯人でも、その恩典に浴して少年刑務所に収容されるのです。戦前は満十八才まで、十九才、二十才では大人の扱いで前科がつくのです。

大分話が横道にそれました。さて小野寺も洗礼を受けたと云つても、私と較べればその精神的屈辱感は少い訳でした。その内に「入浴」があるので皆整列して炊事場の横の、浴場に行きます。こゝの入浴はすべて号令に依つて行われるのです。二十人ずつ中に入りまゝ。一度に二十人入れる湯舟が三つ並んでいます。長細い湯舟に十人ずつ背中合せに入ります。右を向いて十人、左を向いて十人と云う訳で雑談を防ぐ為です。「前洗えッ」「入浴」と云う訳で、二十人の少年達が湯に浸っている間に、脱衣場で次の二十人が脱衣する訳です。「上れ身体洗え」の号令が向う側の流し場に上り、一個ずつ配られる石鹸で全

身を洗うのですが、その時には次の二十人が第一の湯舟に入っているのです。洗い終ると「上り湯入れッ」の号令で二番目の湯舟に入る、次の組は流し場で身体を洗う、三番目の二十人が入ってきていると云う訳で、一度に六十人ずつが浴場内に入っているのです。

大体夏季は五分位、冬は七分位ずつで動作します。湯に浸れるのは十分から十五分程で、少年達の楽しみの一つでした。こゝで申上げて置きたいのは、前にも書きました階級に依つて、一級者は毎日、二級者は隔日、三級は三日に一度、四級は四日に一度と云う工合になっていて、上級者に対する優遇の一つなのです。最も三級者は四日に一度位でしたし、その後時局の進展と共に、全部週に一度位になってしまいました。

さて私は二番目に入つたのですが、先に入つていた文少年の背中を見て、私は心の中で思わず「アツ」と叫びました。石鹸にまみれた彼の逞しい背中に真赤な皮バンドの痕が、痛々しい交錯した筋を残しています。その所々には薄く血がにじんでいるのです。私は思わず彼の顔を見ました。さぞ痛いだろうと思つたからですが、彼はさして痛そうな気色も見せず、平気で体を洗っているのです。追々

に解ってきたのですが、少年囚達は音を上げると軽蔑されるので、大抵の者は殴られても他の者の見ている前では、叫んだり泣いたりしないのです。でもそんなのは大抵は古い連中だけで、普通の少年は大抵は呻き、泣き叫ぶのが多いのです。しかし幹部ともなるとそんな態度は取れない意地があるのです。

私は恐る／＼大辻などの姿を目で深しました。一番端の方に白川の長身の姿を見つけました。彼も同じでした。背から脇腹にかけて、幾筋も赤い痕を残していました。私は身体が縮むような気がしました。私が原因なのです、その為に四人の幹部達の肉体に、この惨らしい痕を残したのです。彼等は一体どう思っているのでしょうか、私は彼等から復讐されるのではないかと、恐ろしい不安に襲われました。身体が湯舟の中で小刻みにふるえているのです。その時、身体を洗っていた文がくるりと振向いて、私にニヤリと笑いかけました。――お前の為にこんな傷がついたゾ――と云っているような気がして、私はふうと気が遠くなっていました。でもすぐに気がつきました。浴場係の看守から怒鳴りつけられました。

「コラッ気分が悪いのに、風呂に入る奴があ

るかッ」

私は二人の幹部に抱えられるようにして、工場に連れてられて帰ってきました。

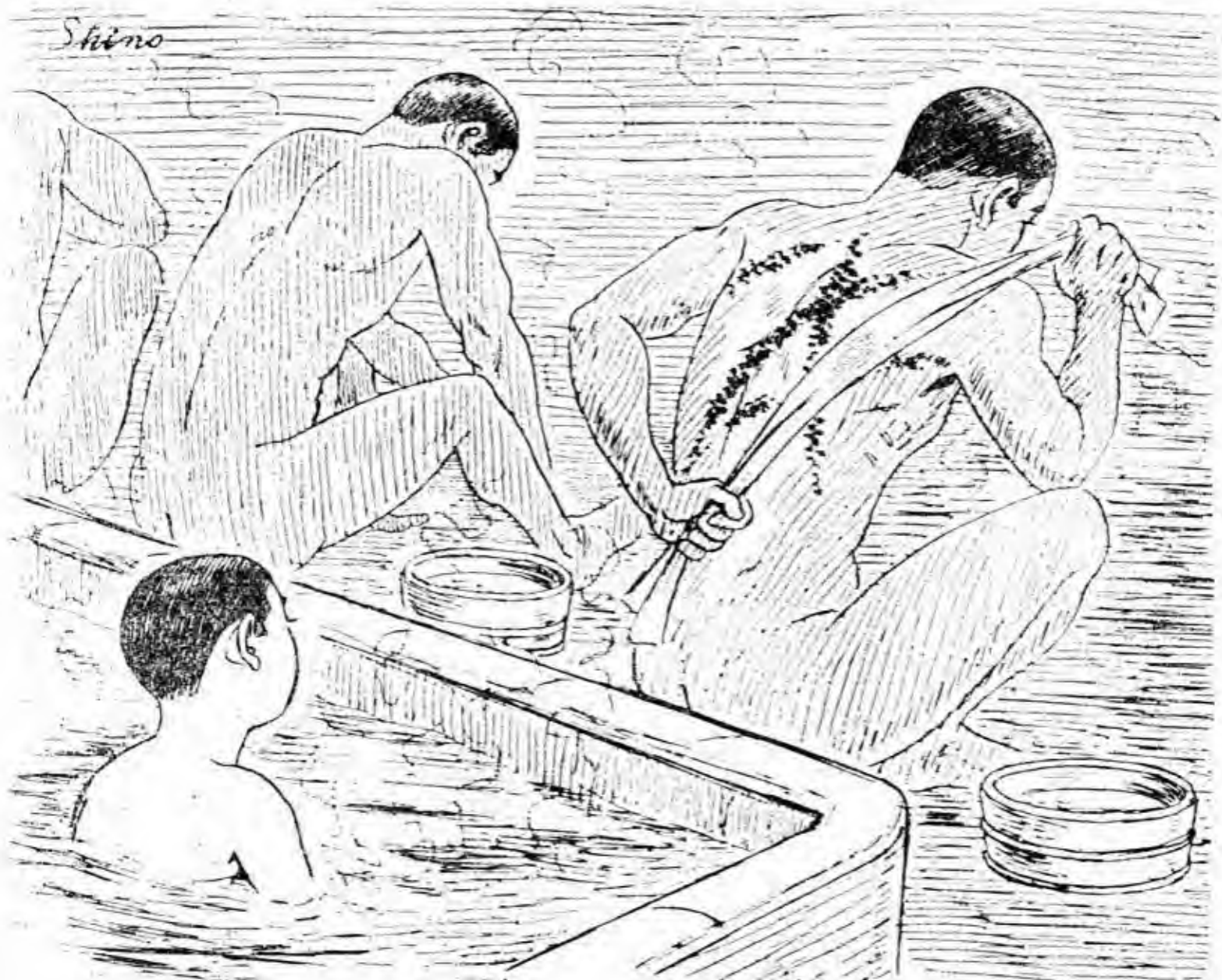
非常薬品箱から粉薬を出して呉れた、ボタ餅こと戸口看守は、

「おい三根、どうした？

しっかりせんと四年も勤まらんぞ」と温かい目でそう云うのです。

「何かあったら先生に云ってちゃんと駄目だぞ」

――でも私にどうして今日



のことが云えるでしょう。あの屈辱の数々、私のこの苦しみも所詮訴えることも出来ないのです。私はその日も悩みを抱いて房に戻りました。文少年が私に対してどんな態度に出るだろうか？ 不安の気持を抑えながら、私

はトボ／＼と自分の房にと帰りました。室内にはもう皆帰っていて、私の姿を見ると冷たい空気が流れたように思ったのですが、それは私の思い過しでしょうか。定った通りの点検も終って、机を前にして私共はそれ／＼の

席に座りました。沈黙がしばらくの間、室内を占領しているやり切れない空気でした。

(次回につづく)

「腹部に依る悦虐」

兵 頭 庫 一

男性の身体の内では一番女性的な部分と云えば腹であるから、女体の代用として自己の腹を玩弄することは一部マゾヒスト男性には有り勝である。又女性の切腹マニアが自身の腹に依って悦虐する如く、男性マゾヒストが女体の代りに自らの女性的な部分に依る悦虐を行うことは自然の理である。こうした男性は自己の腹に対して女体の一部に対すると同様に強いナルシストになっている。愛するが故に虐げると云う一見矛盾した法則はこの場合にも行われている、臍を中心としてムッチリ

膨れた腹は蕾の様な乳首を中心としたフックラ盛上った女の乳房にも似て、極めて魅力に富んだものである。若し色が白く且つ肌理がこまかくてビロード感覚があれば錦上更に花を添える。彼は先ずその姿態を惚れ惚れと眺めて、うっとりとなり乍ら手で軽く愛撫してすべ／＼した触感を楽しむだろう。次にこの愛着物に対し種法の方法で加虐をするが、この時生ずる筈の痛苦の感覚は変性して筆舌には表現出来ない陶醉感となり、悦虐の極に達するのである。

加虐の方法の第一は、痛覚に訴えることである。この代表的なものが切腹であることは云う迄もない。昔の武士が赤心を吐露する手段として行った方法が、アブに利用されようとは妙な話であるが、事實は紙一重であるから面白い、アブニストが一々深さ何ミリと云う切り方をしていては命がいくら有っても足りないから、一ミリ以内で赤い糸を引く位かせいぜい、みみず張れで止めて置くのだ。又それで十分悦虐の境地に入ることが出来るから有難い。道具としては真刀がぴったりして良いが、下手をすると深くやってしまふ恐れがあるから切出しとか錐、釘、針其他良く尖らせた鉛筆、妻楊子等何でも利用出来る。痛覚に似たものに圧覚があるがこれには木刀を用いる。寧ろこの方法の方が傷痕が残らないので毎晩でも出来るが痛覚程の味が無い。例えば木刀の尖へ腹を当て、仰臥しその上へ布団をのせ、だんだんその数を増す方法

である。逆に木刀の尖へ腹を当て、それにのしかって段々自分の重みを加えて行っても同じ事である。更に接触面積を拡げて大きな重錘の様な物を乗せる場合もある。このケースの変形として太い麻縄等で腹を鼓の様にくびるとか、梁に引掛けた麻縄の輪に腹を引掛けて宙ブランに成って前後にゆすぶって、その苦しみを味う方法も有る。こうなると腹への外全身に加えられる苦しみに依って一層、劇しい陶醉感を催して来る。

次には温度に依る刺戟である。普通には熱感を与える。例えばローソクの「熱い涙」をポタリ／＼と滴下する方法は一番無難だと思われる。又火に焙った金物をのせて一過性の熱苦を味うのも一つの方法だろう。その逆は冷感を与える場合で、厳寒に全裸になって積雪の上へ腹這いになったり、手洗鉢に張った氷を叩き割って、それを腹の上にのせたりしても良い、或は又冷い煉瓦の上へ腹這いになる程度でも良いと思う。



二以上に述べた様な種々の方法で悦虐を行うのは、一人のマゾヒスト男性が自己の腹を女体の一部と錯覚して陶醉境に入らんとする一種の自慰であるが、若し彼が一人のサド女性を得て琴瑟相和した時は、この御兩人こそアブの世界の最も幸福者となるだろう。

(この項終り)

「十一月号を読んで」

拙稿「切腹と自害への要求」が、全国の切

腹自害マニアの内一人でも共感をして下さった嬉しいと思います。女性切腹マニアとしてニューフェイス原桐咲代氏の登場を喜びます。(一回限りとはお名残り惜しいですね)でも、正面正座した二つの写真は、得難いものと思います。長襦袢の方はその表情が真に迫って居り、白無垢の方は私の最も好むポーズであります。欲を云えば髪は高島田に結い袖や裾をもっと長くして、白布の上に座った姿でもう少し遠写にした方が良いと思います。丁髷の介錯人を添えたら更に良いでしょう。三宝は腹切刀を取った後は後へ廻すのが定法と思うので少くとも、もう少し横にずらして長く裾を引いた間から長襦袢なり腰巻を覗かせるべきだと思います。又普通は女性が切腹する(自害も同じ)時は嗜みとして両膝を白い扱帯で縛ったものだ聞いています。私の想像では切腹と云う非常なショックを受けて、劇痛に堪えつゝ力の限り腹を切るのだから、とても姿勢を正して居ったり、平気な表情では有り得ないと思うので、或程度姿勢もくずし、表情も悲痛にゆがませないと真に迫ったポーズとは云い難い、こう云っても、私は原桐氏の写真をこき下ろす様な悪気は毛頭なく、只私の憧れを満す為に注文を出したのですから、どうか誤解なされない様にお願ひします。

(切腹信者)

懸賞 告白と手記と体験 入選

夫婦の倒錯遊戯

(格闘ごっこについて)

山田 美知子



「おい、ちよっと此方を向いてごらん」

或る日の夕食後の事。

平凡な見合結婚と、そのあとに続いた半年足らずの、此れ又平凡な明け暮れのうちに夫の赤紙。そしてその空白の二年間が経過して復員したのが約半年前。当時住居は疎開先の農村ではありました

が、夫の仕事も定まって漸く安定して来た私達の夫婦生活でした。

「向いてどうするの？」

「もっと此方へ顔をお出し」

私は編みかけの毛糸を下へ置いて

「はい。此んな顔でございます」

とてれかくしに、フザケ乍ら夫の前の机の上へ真正面から顔を突き出しました。

一体何をしようと云うのか知ら……と思った私の好奇心を裏切つて、夫のした事はつまらない戯れ……。

「こうすると苦しいかい？」

強たかに鼻を摘まゝれた私は鼻声になって



「ええ。そんなに強く摘まんじや痛いわ」

と半ば笑い乍ら眉をしかめました。

「お前の鼻は摘まむのに持ってこいだよ」

「高いでしょう？」

「高い事も高いがね。第一鼻の腔が大きい。大きくて空を向いている。風通しがよさそうだ」

「いや、もう放して……。お白粉がはげるわ」

私の鼻翼は正常なふくらんだ状態に戻ろうとして夫の指先の力に抵抗しています。

漸く鼻を開放した夫は、今度は鏡台を茶の間へ持って来るように云いつけました。そしていつになく私の傍らに寄りそって

「さあ、こうして姿鏡をのぞいて御覧」

と、手鏡を私の鼻の直下に当てがったものです。その時、手鏡から反転して姿鏡に映じたものは、私自身でさえも今まで見た事もない自分の鼻腔のボカリと開いた二つの空洞の形でした。

「あら、いやだわ。穴がまる見え……」

くすりと笑い乍ら振返ると、夫の眼がちよっと異様に光っています。

「お前の鼻……いゝ形だ。それにすばらしく高い。僕は正直なところお前の鼻に魅力を感じて結婚したんだよ」「いやよ。鼻の事ばかり云って……」「何を云ってるんだ。その鼻がなくて何んのおのれが美知子かな……って訳さ。今夜はその鼻の腔を掃除して上げるから仰向けにおなり

……」「いやよ、鼻の腔なんぞ……」「まあお聞き。日本の女の人是一般に鼻の腔の手入れが足りないんだ。そして鼻の腔はきたないものだ決めてかゝっている。ところが欧米諸国では婦人の鼻の腔の美しさと云う事が中々重要な問題で、女の人にはみな腔の手入れや化粧もするんだ。折角お前なんか外人にも負けないくらい立派な鼻を持つていながら、手入れが不足じや勿体ない。お前が此れ以上美人になりたければ、鼻の腔の手入れが大切だよ。さあ仰向いてごらん」妙に熱心な夫の言葉に何にが何んだか判らないまま、私は遂に仰向けとなりました。夫は電気スタンドを近寄せて先ず最初に毛抜き道具を取り出すのです。

まあ凡そ、鼻の腔をこんなに間近かにそしてこんなに綿密に、異性にのぞき込まれるなんて事は生れて初めての経験です。相手が一生連れ添うべく誓った夫なればこそ……私は半ば眼を閉じて……そして幾分快い陶醉感と共にその羞恥の一と時を忍んだものです。

冷たい毛抜き道具の感触やちくりと毛が抜きとられる痛みを、何度も繰り返しているうちにどうやら第一段階が終了して、夫はちり紙をひねり固めて愈々掃清にとりかゝりました。それが又至って無残なもので、腔の相当奥の方まで情容赦もなく突っ込んでグルリ……と廻転させ、腔の形が変ってしまうのではないかと私が心配になって来るのも構わずに、左右の腔を散々いじくり廻した挙句、今度はどうするかと伏眼を開けて見ていると、紅筆を使って鼻腔の中……鼻柱の両側面と鼻翼の裏面へ丹念に紅をさしました。

考えて見ると結婚の当初から夫には私の鼻の腔ばかりのぞき込むと云う、変な癖があった事に今更ら気がついて参ります。

「男って……。変なものね」

鼻腔の手入れが済んで、何だかスツとした呼吸を意識し乍ら、私はちよっと夫の顔を見直したものです。

然し夫の要求は矢張り満足させて上げ度い……と云う気持。私は毎日鏡に向って鼻腔に化粧をもするようにしました。

今更ら再認識させられた私の鼻。それは身分不相応にツンと図抜けて高く、不等辺三角形の整った形の鼻腔も随分大きくてラッパ状に切れ抜がって空を向き、肉の薄目の小鼻は怒った猫属の表情を思わせるようにキリリと弧を描いています。よく云っても悪く云っても風通しのよい鼻息の荒い恰好です。然し夫がその後告白したところでは、見合の時に私の鼻を一目見ただけで腔の大きさを迄大体想像出来たのだそうで「よし、此の鼻だけはどんな事があるうとも手に入れなくっちゃ……」と決心したと云うのです。呆れた事に私の鼻が欲しさに一生の伴侶として妻の人格に付いては、全るで何一つ考察する事もせずゴールインしてしまったらしいのです。

不思議なもので私が鼻腔の手入れをするようになってから、もう此れで何処にも羞かしい箇処がなくなつたと云う気持が起つて、仰向きになつて鼻腔を夫にのぞかれるのが割合平気になりましたが、その私の大胆さに応じるように夫も今までに見られなかった熱情的な態度を示し、此れを転期として夫婦生活全般が急に新鮮な気分となり、生きかえつたように弾んで来たのです。

鼻腔の問題で私の柔順性を打診し、大丈夫と見究めをつけた夫は間もなく次の新ら手を案出しました。然し此れとてもその時考へ出されたものではなく総べては夫の予定の計画であつたのです。

或る夜。私は無理矢理に眉毛の尻の方を半分程剃り落されて、そのあとへ思い切り吊り上つた所謂デイトリツヒ型の眉を画かされま



した。毛生際まで急傾斜で延長された鋭い眉は、同時にアイシヤドウを施した凄い両眼と共に、男の一人や二人位、簡単に噛み殺しそうな妖婦を出現させました。

夫は昼間に於ける「温順且つ貞淑な人妻としての表現」に対して夜間は対照的な「残忍且つ淫乱な妖婦に変貌」する事の必要性……と云う、判ったような判らないような屁理屈を開陳して、私の顔に「自分の好み」に応じたメーキャップを施して大分満足するような表情でした。

然し私とその凄いいメーキャップにふさわしい女としての個性を、閨中に発揮し始めるまで、まだ若干の期間を要しました。

恰度結婚後全る四年、昭和二十三年の春、たしか三月の或る夜の事でした。

湯から帰った私をいきなり引っかくえるようにして夫は帯を解かせました。そしてズロースを脱がせると湯上りの素肌へ相撲用の褌を締め込ませたものです。その締め方は普通の六尺褌の場合と同じ要領ですが、変っているのは直接……当る部分をギリ／＼絞ってたゞでさえ堅いズックの生地が全るでワイヤーロープのようになってたのを、力限り……締め上げるのです。詳細な説明はちよっと羞かしいのですが、夫は両手を使って色々と手段を尽し、要するに可能な限り……込ませたのです。その結果……

受ける緊縛の感じは、正直なところ感じ……以上のものとなる事は、御納得頂けるでしょう。そして前で、腰に巻かれた部分をくゞり後へ折り返すときは、普通の中にも抜けて……惨澹たる状況を隠蔽してしましますから、外見では何んの変てつもない恰好となりますが締め込んでいる本人の私はとっても大変な神経の負担で、恰度棒で

も嵌められたように腰と股の筋肉が些かの融通も効きません。

私は羞恥で身もだえをして思わずその場に座り込みました。そして又ぞろびっくりさせられたのです……と云うのは、座る……と云う姿勢が緊々たる褌に対して腰や股の筋肉を最大限に、抵抗させる事に外なりませんでした。

皆様は満たされそうで今一步満ち足りないと言ったような、どうにもやる瀬ない切ない気持……を、経験された事とおありの事と思います。そしてそれが私の此の場合、恋愛と云う心理的なものを主題として居らず、それが性的欲求から直接訴えてくるものであり、然もその対照である夫と云う相手が眼前に存在している場合を御推察頂けたら幸いです。

私は大変な不作法さで、夫の膝の上へどさりと身体を投げ出ししました。

夫は私の褌を撫で乍らちよつと意地悪い眼つきで、私の気分の変化を観察していましたが、「さあ美知子。今夜はひとつ無茶苦茶に暴れて見るんだな」と促します。「暴れるってどうする事なの？」「教えてあげるよ」。私はもう半分捨鉢気分で夫のお望み通りの、物凄い妖婦になり切ったつもりで、思う存分狂暴に振舞ってやろうと云う考えが勃然と湧き起って来ました。

そしてその夜。私は初めてサディスティックな行為と云うものに陶醉する快味を、幾分かでも経験する事が出来たと云えるのです。

それ等の行為は、皆夫の求めに応じ夫の命じる儘に行った訳で、後述の説明と重複する恐れがありますので、こゝでは略す事に致します。

然し乍ら、何処までも度し難い私は、その夜の事をまだこんな風

に考えていたのです。

私の夫のように一風変わった性質の男性に対しては、妻としての正常な行為の外に凡そそれと対照的な、恰度悪戯盛りの子供が親に対し馴れ親しむの余り礼を失する行為をなす如く、云わば野性むき出しの親愛感若しくは信頼感と云ったものを、閨中に時折り表現する必要があり、夫も又そうした事を求めているに違いない……と。

然し此れで夫の性癖を総べて私が理解した訳ではない……と云う事は誰方にもお判りになりましょう。

それこそ此んな有り来りの理屈で解釈出来得よう筈のない、夫の魂の中に……はちよつと大袈裟ですが……兎も角も、何をおいてもひたむきに私に対して求めようとする、夫個有の特異な願望の蠢めきに外なりませんでした。

さてそれはそれとして、此の禪が私の持っている重要な扉を開く鍵となった事はたしかで、私が夫の求めるまでもなく、阿修羅の如く挑みかゝる女……夫の云う残忍且つ淫乱な妖婦……となる為の大切な一段階でありました。

此処でちよつと申上げて置きますが、私達夫婦には当時まだ幼なかつた子供があるのです。然しこのようなお話に子供の事に関してまで説明してきますと、肝心の本筋に煩わしいお荷物を持たせるようなものですから、わざと触れない事に致します。

さて、それから暫らくたった或る夜の事、夫は新しい試みに着手しました。

先ず何時の間に買つて来たのか、粹な模様の日本手拭を取り出して、私の顔に泥棒が被るような頬被りをさせたのです。

燃った手拭の一部分が、私の馬鹿高い鼻の下でムザとばかりに引

っかけられて、今まで差支えなく続けていた呼吸が途端に閉塞されると、吐き出した息は塞がった鼻腔の出口で熱を帯びて充満し、鼻翼を裏側から一杯に押し上げますが、それでも駄目だとなると仕方なしに開いた口唇から、ハアと云うかすかな音を残して散逸するのです。そして綿布特有の臭気を嗅ぐ以外に用無しとなった鼻腔に代つて今や開き放しの口唇が呼吸器の機能を代行する事になります。

私は生れつき割合澄んだ声が出ますが、それはきつと鼻腔の大きい為でしょう。然しその天来の美声も此の頬被りに出合わしている間は、哀れにも情ない鼻声となり果てるのです。

然しその時私は、半ば習慣のようになっていた例の禪の緊縛で既に或る程度……してしまひ、此の夫の新らしい試みを何んの苦もなく存外平然と受け入れたのみか、それまで気づかなかつた鼻と云うものの、性慾に対する密接な関連性を意識したのです。

私は高い鼻を持っている。どうか此の身分不似合な鼻を中心として自分の顔会体を美しく見せ……一段と魅力のあるものにしたものだ。それが何よりの夫に対する好意的奉仕であり、又私自身にも誇りと情操を持続させる為の一つの根元的素因ともなるに違いない。……とまあ、こう云つた私の日常抱いている考え……その考えが、突然戸惑いをしなければなりませんでした。

夫は私の性質が模範的であり家事に熟練した良妻である事を求めていますようにし、又更に私が魅力に溢れた美貌の持ち主で……実際にどうだか判りませんが……交際場裡で恥じる必要のない麗人である事を望んでもいるでしょう。然し、その上にもう一つ複雑怪奇な重要欠くべからざる私への欲求があつたとは……。



を施す事に依って、此の鼻の持っている性格——性的傾向を最も露骨に表現させてその魅力を味う事を望んで居り——同時に私が天馬空を征く勢いで充分に鼻の個性を発揮する事に依って、私自身にも異常な性的興奮を享受する方法を教えて呉れた——とでも申せましょうか。

考えて見ますと顔の真中に臆面もなく開放されている二つの孔。そしてそれが何んと云う不可思議な形態を持っている事でしよう。顔面に突出している事を論外としても何故此のように、出口で両側へ翼を拡げた如く頑張った姿を表示しなければならぬのでしようか。同じ意味ですが——あぐらをかいた小鼻の持つ形態の神秘性——その中にこそ、きつと私達夫婦に与えられる最終の回答がひそんでいるに違いありません。

瞳を眼頭に寄せて直接鼻頭を注視しますと手拭を噛まされた私の鼻は、一層高らかに反り返って仰向き、鼻翼は最大限に拡張されて厳然たる不動の戦斗態勢を持っています。若し手拭が透明なものであったとしたら、此の時の下からのぞいた私の鼻腔はこの上もなく威張り返った傲慢さと、鬼をもひしぐ旺盛な闘志を象徴していた事でしよう。元来が高慢と意地っ張りの強さを示している私の鼻。若し常日頃の私の性質に女らしい淑やかさがあるとしたら、それこそは鼻に相談なしに、鼻以外のものが持ち寄りで合成した要素に違いありません。

そして私は鼻に引っかけられた手拭を意識した時、初めて禪を締められた時と同じように妖しい興奮を感じて、我れ知らず顔面の筋肉を鼻筋へ集中させた物凄い表情を形作り、次の夫の差出す長い日本刀を何んのためらいもなく受取って左脇に差していたのです。

「此の刀どうなさったの？」「買って来たのさ。前から注文して置いたんだ。此れが一番長い奴なんだよ」。此れは演劇用の小道具で中身はジュラルミン製で、現在に至るまで私達の夫婦生活にひと役勤めているのです。

私のしめている女帯に刀なぞは唯さえ差し込み難い上に、漸く帯の裏側を通過した太い鞘は、今度は腰の素肌に巻き締めている禪の分厚いふくらみに遮ぎられ、鐔もとまで落とし込むのはちょっと骨の折れる仕度でした。

「女の泥棒ね、此の刀で貴方をおどかすって訳なの？」「まあ待てよ。此れからがお芝居なんだから……」

夫は私にきっちりとしごきでたすきをかけさせ、着物の裾を大きくくまくり上げて尻からげの恰好とし、真新しい草鞋をとり出して白足袋の上からはかせました。

私は自分の扮装を姿鏡に映して見たとき、その姿の余りに異様なのに、羞恥で激しく胸のふるえるのを意識しました。夫に至ってはためつすがめつ舐めるように観察し「いゝぞ」とため息を吐く始末です。

手っ取り早くこの辺で私達が秘事の前戯として演じる剣戟とも格闘ごっこともつかない、一種の戯劇の大体標準的な筋書を御紹介致しますしやう。

おことわりして置きますが、これは決して映画や演劇を見るようなあんな爽快なスピーディなものではありません。至ってスローモーションでその上出来るだけ声も小さくしなければなりませんし、全体としてはホンの真似事に過ぎません。唯表情だけは出来るだけお互いに実感を出すように工夫し、時には双方呼吸が合うとでも云

うのでしょうか、相当な迫真力を与えられる事もあります。
 先ず物々しい扮装の私は隣室から忍び寄って、寝ている夫の枕を蹴飛ばします。夫は蒲団の上に起き直って大いに恐怖の色を浮かべ「僕をどうしようと云うんだ」とたずねるのです。「シ—ッ。あたしM子よ。貴方のあれをもらいに来たのよ」「いやだ。女のくせに強盗になって僕の大切なあれをとろうなんて」「ワン。素直に出さな



きゃどてっ腹に風孔があくって事を御存じ？ あたしがどれ程凄い女だか見せて上げましょうか」。夫は隙を見て私に組みついて来るのを、脚を上げて苦もなく蹴り倒します。夫は不恰好に仰向けに転がり惨めにへたばった胸の上を、デンとばかりに私の草鞋ばきの左足で踏みつけられてしまいます。「お助け」「何がお助けなの？ 手向うなんて生意気だわ。あれを出さなきゃあ、承知しないわよ」

私は示威的に刀の柄に手をかけて凄みます。「降参々々。そんなに強く踏まないで下さい。胸が潰れそうだ。貴女にはとても敵わない。あれを出しますから許して下さい」「じゃ許して下さい」「そして私は脚を離します。夫は起き上って又挑戦して来ます。「この嘘吐きの卑怯者」と私は夫の右手首を掴んで後向けに捻じ上げ、左手で夫の首筋を押さえて畳に顔を擦りつけます。

「どうなのさ。弱虫のくせに……」「あいたゝ。あいたゝ」。夫は悲鳴を上げて「お願い……お願い……どうかもう一度だけ許して……一生貴女の云いつけを守ります。美しくてお強い貴女の召使いになります。奴隷になります。だから許して……」と哀願しますが、私は冷酷無惨に「喧しいわね。最初から素直に出せばよいのに……貴方が出さないのな

らあたしは貴方を殺してゐるともつものなのよ。貴方を殺す事ぐらいあたしは平ちゃらなのよ。まあもうちとばかり痛い目にあわせてやろう」と夫の両手を紐で縛り上げて、タオルで猿轡をかませた上、座敷中をこずき廻します。夫はよろめきつまずき倒れ、蹴られ踏まれ、顔の上へ跨がられて鞭をこすりつけられ、最後に床柱に縛りつけられて散々頭を殴られるのです。「どうなの？ 女に此れだけ馬鹿にされゝば幾ら貴方が意気地なしでも生きちゃいられないでしょう。だからあたしが殺して上げましょうか？」私は夫の猿轡を外します。夫は世にも情ない顔をして「でも生命ばかりはお助け下さいまし」と哀願します。「えゝもう此の意気地なしの虫けら奴。何んてえ弱い男なんでしょう。出てゆけ。さあ紐を解いてやるから何処へなと出てゆけ。見るのもいやよ」。私は夫の縛めを解いて激しく蹴り倒します。夫は俯伏せに倒れたまゝため息をついて「あゝ刀さえあったら女なんかに負けやしないんだが」と云います。「フン、そう云うんならもう一度此れを貸して上げるからかゝって来る？」私は自分の腰から刀を抜いて夫に持たせます。夫は拔身を振りかぶって今度こそは勝てるぞと云う表情で眼を輝やかし「やっ」とばかりに斬り込んで来ますが、お気の毒に何しろ私は此の際は武芸百般に通じた大女傑で、たちまち刀をたゞき落され、その上私の右拳の当身を喰って「うーん」と唸り乍らよろめきます。「えゝ面倒くさい。此のバツタ奴。一そバラしちまった方が清々するわ」。私は刀を拾って夫の正面から「えいっ」と気合諸共、バラリンズンと左肩を斬り下げます。「うわーあ」と叫び後向きになつて逃げようとするのを、「何処へ行くのさ。えいくそ」と今度は胴を横に払います。「ひえーっ」と絶叫してのけぞる背中へ「こ

れでもか」と袈裟がけ。「今更ら逃げるなんて笑わせるじゃないの。折角殺してやろうってのに」。私は夫を滅多斬りにします。最後に夫の脇腹へ切っ先を突っ込んで「往生際の悪い。念仏なと唱えたらどうなの？ あたしに殺されりゃ本望の筈よ。さあ死んでお行き」と抉るように刀身を廻します。此の場合私は右手に長い刀の柄を持ち左手で夫の胸倉をとっています。夫の脇腹には予め座蒲団を入れてジュラルミンの切っ先が当てがわれても痛くないようにして置きます。夫は「げえーっ」と呻き次に「ヒイ／＼」と喘ぎ乍ら孤空を掴み、眼と歯を激しくむき出し唇や頬を痙攣させて、その悶え苦しむ表情の熱演振りは真に迫って物凄く、私もそれに引きずられて如何にも残酷な兇行を演じている如く、唇を噛みしめ、鼻筋にしわを寄せ「これでもか、これでもか」と、半ば夢中になって負けず劣らず名演技を振う訳です。そのうちに「ヒッ」と云う断末魔の声と共に夫の身体が崩れかゝる処を、私は挟り込んでいた刀を引っこ抜いて左脚で蹴倒し乍ら、「もろいものだわねえ」と云うのです。夫は一旦俯伏せに倒れますが、それを私は足先で蹴り動かし仰向きにし、「フンさあまないじゃないの」とつぶやき乍ら悠々と夫の寝巻の袖で刀身の血のりを拭き、さて片脚を夫の胸にかけて「腕はよし、刀はよし、おかげ様でよく斬れた事」と、刀身を月光ならぬ螢光灯にかざしてながめ乍ら大見栄を切る訳です。大体此れが立ち廻りの筋書で直ぐ今度は組打ち場面となるのです。が、先に申しましたように極く静かに演じませんと、第一に近所に聞こえる恐れもあり、又折角寝ている子供が目覚めます心配もあります。又動作も注意して怪我や必要以上の苦痛を与えるような事も避けなければなりません。

然し、小声で低く押し殺した脅迫の言葉は却って実感が出るものです。

又、私の腰に差した刀は刃渡りだけで二尺六寸五分もあり、帯の高さや差した時の具合で、私が右腕を一杯に伸ばしても抜刀出来ない事があり、随時タイムを要求して夫に手伝ってもらうのです。こうした滑稽な事は始終起こりまして、時には興奮を忘れて笑い転げた夜もあります。

さて組打ちの筋を最初の部分だけちょっと説明します。

私が倒れた夫に止めを刺すべく胸の上へ馬乗りに跨がりますと、こゝで夫が再び抵抗を始めるのです。

私が匕首（初めの頃は匕首がまだなかったので果物用のナイフを使っていました）を抜き放ち、夫の咽喉へ突立てようとすると、夫は僅かに自由の効く左手で私の匕首を握った右の手首を掴んで、刺されまいとして防ぎます。此の場合夫の右腕は私の左の膝の下に組み敷かれていますから、その左手だけの絶望的な抵抗は本当に哀れなもので、私は遊んでいる自分の左手でなん時でも夫の抵抗を排除する事が出来ますし、又面倒なら左手で止めを刺す事も出来る訳です。そこで夫は、又ぞろ齒の浮くようなお世辞を並べて哀願しますが、その当意即妙な夫の言葉が、興奮している私にとって非常に快よく感じられる場合があるのです。どうかするといつの間にか自分が強くて美しい巴御前のような勇婦であるかのような、錯覚に陥入る事すらあるのです。

大てい組打ちになって間もなくタイムを設けて私の褌を解き外します。此処で前戯としての格闘ごっこは終る事になり、此れから後のお芝居は予め定められた筋と云うものがなくなります。此れ

以上の記述は双方の体位の問題にも触れますし、会話等もきわどい事柄を含んで参りますから、大体此の辺までの説明に止めたいと思います。

x x x x x

一見複雑な私達夫婦の性癖を、どう分析すればよいかと云う事に就いて、私達なりに考えている事をお話し致しまして皆様の御批判を賜り度いと存じます。

今日迄奇譚クラブを読んでも、私達の性癖と完全に一致した記事には一度もお目にかゝりません。さりとて、私等の性癖が「縛り」「責め」「切腹」「女闘美」等の記事と何んの関係もないとは云えません。それどころか、殊に最近の真鍋様。北谷様。古くは升岡様（二十八年一月号の鼻孔礼讃）等の記事は「鼻」を主題としている点で密接な結びつきがあり、土俵四股平氏の女相撲に関する記事や、口絵写真の女レスリング等も私達にとっても興味深く、又、八月号所載の「フエチシストの悲願」の文中に記された鼻に関する奇ク編集に対する希望は、その儘私達の希望に外なりません。十月号の「講談調のマゾの構想」に至っては、扮装が違ふだけの事で私達の実演と誠によく類似して居ります。

元より分析：なぞと云っても何一つ専門的な研究もした事のない私達は、唯絶好の相手と結婚した偶然の喜びを、飽くまで享受しているだけの一本槍の実行派に過ぎません。だからと申してはおかしいかも知れませんが、実際のところ奇譚クラブだけが唯一の参考書で、私の云う分析もその記事傾向と私達の性傾向の間に近似点を見出し、関連性を発見しようと努めたゞけの事で、どうか私達の幼稚さをお笑いになりませんように……

（おわり）

私の夫が「女の鼻」に対する一種の偏執性を持って居ります事は明瞭で、又私が自分の鼻に何らかの異様な細工を施し、特に鼻腔を拡張、鼻翼を上方へ圧迫された場合に興奮を感じるようになった事も確かな事実です。又私にとって、最近特に女闘美の写真や記事に性的衝動を覚えるようになった事と、それから推して、元々サディスティックな性質が潜在していたに違いないと云う発見です。

夫はフェチシストであり同時にサドとマゾを兼ねた、此の道——と云うものがあるとしましたら——での勇士の一人になれる資格は充分とも云うべきでしょう。

夫は先ず女である私の肉体の、性的要処を一つ残らず縛り上げる為に物凄い扮装を案出し、今度はその扮装の女——つまり私に責められる為にあられない戯劇の筋書の作者となったのです。云いかえるならば加虐と被虐を同時に賞味した上、更に女の鼻に対する奇妙な偏執性の満足——と云う三重の慾の深い性分が苦心の結果生み出した「格闘ごっこ」なのです。然し此れは実際には逆の論議で、本来から云えば此の三重のものが融合状態で幼年の頃から夫の肉体に宿っていた——と云うのが本当でしょう。

夫の願いに依れば女を縛って丸太棒のようにした処で行き過ぎ見たいなものだし、普通の女から縛られて見ただけでは物足りない。逆に考えて——女からやっつけられる場合、その女が我れと自ら、活動に支障のない程度に自己の身体を縛っている——なんて第一変てこなものだ——と云ったところから——先ず女自体を縛る代用物となり——その女が加虐者の立場となっても矛盾感がなく——より一層活動に便利で、然も物々しい勇まし気な外見となる——ような女の扮装がどうしても必要となる訳なのです。



今此の扮装用具を列挙して、その個々に就いて説明して見ましよう。尚今までの記述になかったものは、皆その後新調したものですから御諒承下さいますように。

一、褌——明らかに股間と胴を緊縛します。

二、たすき——腋下の緊縛。

三、手甲と脚絆——手甲は中指のつけ根。手首。腕の関節の下をそれ／＼付け紐で縛りますし、脚絆は同様の意味で膝下と足首を縛ります。

四、草鞋——足に対する責め縛り。

五、白い晒木綿を乳房の上まで巻く事——胴から乳房に対する縛り以上右の一から五までは何れも女体を責め縛る手段であり、然も同時にその女が勇ましい闘争的外見となり、加虐者として何ら不合理な矛盾を感じさせないのです。

六、胸に巻いた晒木綿に匕首を挿込む事——女の柔肌と鋭利な兇器——と云う事は一種のスリルを感じさせられる事で、女体の切腹愛好者の心理と似て居り、又緊縛された木綿の下に挿入された匕首の太い鞘は、そのまゝ女の胸の筋肉に対する責め道具ともなり、更にその女がやくざ渡世人に似た恰好となつて加虐者としての扮装に適當する。

七、覆面頭巾。頬被り。仮面——何れも猿轡やマスク。或いは眼帯等の顔面に対する責め手段を一層徹底させ、鼻に対する圧迫手段としても合理的であり、然もその女の顔が凄く不気味な加虐者そのものズバリとなります。これを云いかえれば女に対する責めの目的を達し、特に女の鼻を加虐する事に依つて逆にその女を戦闘的な表情に変化させ、女から責められたいと云う今一つの願望を

視覚的に達する事になり、夫の持つ三重の願いが一度に遂げられる訳で、最も重要な扮装上の絶対条件なのです。

八、女の帯——(特に拵えたものに非ず)巾の広い女帯を胸高に締め、男のサデイズムを満足させる事になります。夫が私の扮装にいつも女帯を用いさせる理由もつまり此処にある訳で、又女としての美しさを表現させる上にも女帯は女の着物と共に切り離せないではないでしょうか。

九、女の着物——長い袂は明らかに女を美しい玩弄物にしたもので大体此の際女帯と同じ意味があるのです。又たすきと云うものをさせる必要上からも女の着物を度外視する訳にはいかないのです。十、女の袴——胸高にはいた時の女らしさを表現する色と、そして優美な闘争的形態は夫にとって誠に都合のよい衣裳です。

十一、刀——女の脇や腰に対して太い刀の鞘はそのまゝ加虐手段となります。馬鹿にならないもので暫らく刀を差して、急にそれを抜き取ると腰の神経が張合いを失つたように頼りなく感じられます。又女の胸先に突き出している刀の長い柄は視覚的に加虐感と被虐感を味う事も出来ましょう。女が長い大刀を構えた姿——それは又夫にとって圧倒的な魅力に外なりません。

十二、剣道用防具一式——大体鎧と同じ。

十三、胴丸鎧と兜一式——弱い女に重い鎧と云う事は實際的に加虐であり、柔かい女の肉体に武骨張った堅い鎧と云う事は視覚的に加虐感を与えます。然も武者の姿はそのまゝ加虐者の立場と一致して何んの矛盾もありません。

煩わしいまでに沢山な紐と紐との結び合わせを経て完成する、物々しい鎧武者姿の妙に晴れがましい羞恥感。何んもなくズッシ

リと体重が増したような壮大な感じ。動く時に触れ合う音の快よさ。例の禪の緊縛や念の入った覆面の上に手間をかけて着けた鉄の面と鎧兜は、錯覚とは云え急に強くなったような気分を私に起こさせ、やがてそれが性的興奮と合体して羞恥感を征服してしまします。私にとっても鎧兜は一番の喜びをもたらせて呉れるのです。

以上で大体の説明を終わりました。結論としてつけ加えますなら、私達の性癖は奇譚クラブの記事傾向の大部分と関連を持って居り、むしろそれ等を綜合したものであるとも云えましょう。私達の考えの浅い点に付きましてはどうぞ御教示下さいますよう御願ひ申上げ

浣腸通信に寄せて

羽村 京子

十二月号を拝見して、またまた浣腸の記事がたく山のっているのは大変うれしいことでした。浣腸マニヤの方々のお便りを見て、多くの方が女性の浣腸に興味をもっていられるのが、何かしらたまたまなくたのしいことのような感じがしました。下腹が静かに張ってくる感じを好まれる方、消え入るような恥ずかしさを好まれる方、他人をそういう気持ちにおとし入れてよろこばれる方、いろいろ重点のちがいはあっても、みなおなじ浣腸マニヤなのですから。

敬義先生の医学相談も面白く拝見しました。直腸がなんなどとおど

かされて、少しこわくなりましたが、このようなものも、もっと詳しいのを度々のせて下さいませ。ただ、空気は無害だとありました。が、空気の方が腸粘膜を刺戟するように、私の経験では、思いますがいかがでしょうか。

こう書いていっているうちに、私の空想は空想を生んで、思わず胸が高鳴ってまいります。浣腸を入門として、こう門から直腸、大腸という浣腸マニヤの性感帯には、いろいろな倒錯の諸相がまつわりついているからです。私一人の興味

ます。どちらかと云うと研究とか論議とか云う面よりも、感覚による実行が先に立ってしまふ私達です。又々どんな珍奇な器物を用いどんな突飛な愚行を演じる事やら、夫も私もその点では至って無軌道な性質になってしまっているのです。又そのうちに変わった事をお知らせする折もございましょう。

夫の駄文「サド女性の覆面」と云い、又私の拙文と云い誌面をけがして申訳もございません。序でと云えば誠に失礼でございますが真鍋様にお詫び申し上げます。「あられもない私の扮装写真は実際まだ一枚も撮った事がございません」……夫はモデルを探すんだと張り切って居ります故に近いうちに何んとかするつもりと存じます。

かもしれないませんが、マゾ女性の一つの夢を申し上げます。

私が屠殺され、料理されて、内臓はすぐその場で食べられてしましますが、肉は私の腸に詰められて、腸詰として保存されるという空想です。腸詰の中でも、直腸をつかった部分が最もすばらしいので、この部分は、他のどれよりも大きく、むしろ少し平べったく丸っこい形につくってあり、肉がうんとたく山入っていて重く、それに大切なことは、その上端にはこう門がそっくりそのまゝ、切り離されないでついているということなんです。この人間の腸詰の王様は、

他の部分の小さきまごまの腸詰と一しよに、大きな冷蔵庫の中にしまっておかれますが、それにはきれいに印刷したレッテルが貼りつけてあり、そのレッテルには「羽村京子」とちゃんとネームが入っています。それを取り出して食べる人は、「ああ、これがあの羽村京子の腸詰だな」と思っているが、その上端にとび出している私のこう門を眺めるでしょう。そして、その中にぎゅっちりつまっている、私の腰やお尻や股のところの一番おいしい肉を食べるでしょう。

非 小 説

性

液

(十二)

伊 藤 晴 雨

「浅草とは思えない位静かですねえ」

「こうやって二人ッ切りでいる所を五九郎先生が見たらどう思うでしょうねえ」

「オヤ昔しの思い出かい、焼木杭の話なら何もわざわざ僕を呼び出すには当たらないじゃないか」

「イヤな人だワ、知らないワよそんな事。それより今の話しあなたどう思う……賛成してくれる……くれない、どっちなのさア」

友江は美津夫の首ッ玉へ右の手をかけて、左の手は美津夫の股の処をゆすぶって居る。

「君がやるというんなら行ってもいいがね、

太夫元は誰れなの？」

「ほれ、あんたも知って居る新花町の垣田さ」

「一座は誰れだい、真逆君一人じゃあ、あるまいね」

「深沢先生と村田先生、それから山田九州男（山田五十鈴の父）さんなんかの大一座なのさ」

「ホー、そいつは素敵だ、而して乗り先はどこだい」

「大阪の千日前よ、今度千日前の敷島倶楽部の女将が四、五日前東京へ来た序に私達の芝居を見て大阪で蓋を開けたらという話を垣田に持ち込んだのさ、すると垣田も此頃お手

揚げになって居る所だったので渡りに船と斗りに手付けをとっちゃまってそれからの話なのさ、給金はトッパライだっていうのだから妾し行く事に決めたのよ、あんたはどう、行かない？」

「大阪か、いゝねえ、でも大阪には角座に山長ってえ大敵があるし朝日座には新声劇があるしね」

「いゝじゃないの、道頓堀は千日前とは見物も違うし、それからこっちは今東京毎日と大阪毎日で評判の柳川春葉先生が作者になって下さるんですもの大丈夫よ、ねえ行きましようよ、あなた」

二人が話している時

「こちらで御座いますよ」

女中の声と共に這入って来たのは垣田と西五辻文仲という男爵であった。

「よう、やっちよるね、ワッハッハッハ、舞台の外の濡れ場を見せられちゃあ大いに飲まずんばあるべ可らずじや、さア二人共僕の部屋へ来給え、大いにやろう。石原君、此の方かね、天皇陛下の伯父さんに当る西五辻さんじや」

「ハッ、私は五九郎一座の石原で御座いますハッ」

「そんなに固くならんでもよろしい、私もナア少しは話しが判る、此度の芝居の件で此垣田君と行を共にする事になったんじや、何分たのみますぞ」

酒は運ばれ、芸妓が来て男爵は立上って器用にかっぽれや浅い川を踊った。粋な華族様だと二人は感心して居ると、一間おいた隣りの座敷でドタンバタンの大騒ぎが始まって転げ込んで来たのは市村記者であった。

「あッ垣田君か、やられた畜生」

「どうした市村君」

「五九郎になぐられちゃったんだ、畜生どうするか見ろ」

「ナニ五九郎になぐられたっていうのか、だらしがナカ、まあ静かにし給え」

垣田が市村記者をなだめて居る処へ来たのは五九郎で、四尺九寸五分の短小な男が六尺大の市村記者を掴えて庭先へ投げ飛ばしてしまった。

「己れを嘗めるのもいゝ加減にしたらどや、元はこれでも自由党の壮士、板垣退助の玄関で身体を張った自由党の壮士、武智故半や、役者やさかいに我慢して居たんや、新聞記者が怖ろしくて役者稼業が出来よるかいつ」

五九郎は常の温顔に似ず上方訛りを交えた

タンカを切って居る。市村記者は捨ゼリフを残して尻尾を巻いて帰って行った。

「エラお騒がせいたしやした、市村ちゆう奴ホんに無礼な奴じや」

五九郎は帰ろうとして友江と思わず顔を見合せたが素知らぬ風をして帰って行った。

弁天山の十一時の鐘が風に誘われて浅草の響きを伝えて来た。

………

午後八時三十分発神戸行急行の列車が東京駅を発車しようとする時、駆けつけたのは五九郎一座の下駄頭取の竹さんで一座の花形石原を垣田に攫われたのを感じ附いて飛んで来たが三等車を捜して居ない事が判ると二等車を風潰しに捜したが姿が見えない。村田に聞いても深沢に聞いても知らないというのでよもやとは思いつつも食堂車を覗くと垣田と柳川春葉と石原と友江と四人で食卓についてビールを呷って居る。

「時に柳川君、今度の大阪は千日前なので思いついた狂言をやりたいと太夫元がいつて居るんで僕も工夫がつかん、それで御同行を願ったちう訳じやが、おかげで本は出来て居るが狂言の表題がいつて考えが浮ばんですナア人肉の市々の二番煎じになるのではおもしろく

ないし何とかえゝ名題がありませんかナア、柳川君」

「そうだね、相手が大阪の見物で場所が千日前の敷島倶楽部と来ては、どっちみち見世物だねえ、マトモな芝居をやったって這入りっこはないだろうよ」

「何かというのは無い時に出る言葉だって云うが全くじや。西五辻さんは又乗りおくれかな、ワッハッハッハ、オイ、ボーイ、ビールを持って来い」

食堂車の窓に生けてあるチューリップの花を見つめて二の替り狂言の名題を考えて居た春葉先生の顔を窓の外から見た竹さんは石原の居るのを見るなり飛び込んで来た。

「垣田先生酷うござよ、石原を抜いて行くなア」

垣田は平然としてビールの満を引き乍ら「マアエ、帰ったら五九郎にそういうて下さい、此男には因縁がついて居る、五九郎から受け取った給金は大阪へ着いたらスグ送るからといつてくれ給え」

「ソリヤアいけませんよ、先生、此の役者は五九郎先生とは切っても切れない仲なんですから」

「馬鹿ッ、そんな事を云うとるんじやナカッ

此男が横浜に居る時に僕が貸しがあるんじや、えゝかね、それを今度清算する為に連れて行くといつてくれ給え、判ったろうね」

判らないといえは十八人力と自称する腕力沙汰にも及び兼ねないので竹さんは発車の笛が鳴るので慌てゝ車を下りて行つた。ワアッハッハと垣田は例の豪傑笑いを態と仕乍らまた又ビールを呷つた。

「先生の腕は凄いもんですね、流石の竹さんが文句を云わずに帰って行つた処恐れ入りましたワ」

「芝居道の借金は判証文を入れるんじやなしマ、トモに払う奴があるものか、ナア柳川君」

「ソリヤそうと今考えた名題だがね文芸的では無いが千日前なら適当だろうと思つてク性液々という題にしたよ、チト露骨かも知れないがね」

「セエという字は姓名の姓でエキは易者の易かね」

「フツフツフ、違ふよ、まるで君違ふよ困つたナア」



垣田は辛うじて自分の姓名を書く程度の無学だが腕力が物をいうのと劇界十数年の経歴が先生と呼ばれて芝居の荷を動かして居るのであるから無理も利くという訳である。

横浜から乗り込んだ連中が食堂へ這入つて来たのでク性液々の説明は中止となつて後は四方山咄しから幕内の咄しに変わつて熱海を過ぎた頃には垣田と春葉両先生は寝台に潜り込んだ。準幹部である友江と石原は三等車の腰掛へ帰って行つた。本来ならば二等車へ乗せる可き準幹部の連中の旅費を垣田は三等車へ乗せて置いて其差額を自分の懐にギツてしまつたのは芝居道では此事をクピンを行く々と云っている。

関ヶ原を過ぎる頃は雪となった伊吹山が窓の外に見えて奸雄石田三成や島津義弘の足跡はどこだろふなどと役者稼業の中で読書家の友江は考え込んで居る内に能登川や八幡と琵琶湖の沿岸を通つて大

津に近づいた時分には夜が明け離れて瀬田の唐橋が見える頃、外套を被って寝て居た友江の後側の男が眠りから覚めて起き上った。顔を見合せると友江はあつと云った。

「どうも久し振りだね、五九郎一座に入ったとは聞いたがこんな所で君に逢おうとは思わなかったね、僕はあれから東北から北海道、樺太と散々の御難続きさ、旅カバンのエフも綺麗な内が花で散々摺り切れちゃっちゃあ、お仕舞いさ」

「そんな厭味を云わないだっていゝじやありませんか」

「僕はお恥かしいが、まだ昨日から弁当に有りつかないんだ。君に逢った斗りで恥かしいが」

「えゝ判りましたワ、妾しはこれから大阪へ乗るんです。少いけどこれ丈けあげますわ、そうしてこれからどこへ行くんですの」

「昔し開盛座に居た頃の山長が今大阪で飛ぶ鳥を落す勢だつて云うから加入させて貰おうと思うのさ」

「丁度いゝワ、梅田迄一緒になって行きましよう、此の人石原さんていうのよ」

「初めましてというと幕明きの仕出し見たいですね、お互様にどうぞ」

「おい二人共食堂車へ来いよ、ワアハッハッハ、朝の東海道はえゝ心持ちじやよ」

「あの方が此度の仕打ちよ、では一寸行ってくるわね」

友江と石原が食堂へ消えると乗り合せた座員達はうらぶれた形ちの加藤憲治と名乗っている梅堂豊吉の姿をシロ／＼と眺めて居た。

朝の食堂車はまだお客が少いの垣田は柳川先生と共に又ビールをのんでいる。

「何か変った乗り込みをして、アツと云わせたいもんじやが、柳川君に工夫は無いじやろうか」

「昨夜から考えたんだがね、実は奇抜な事を思いついたんだが、実行する勇氣があるかどうかという問題なんだね」

「という」と

「ク人肉の市改題異郷の鬼」で女が縛られてバルチザンに弄ばれる処がヤマになっている……それからヒントを得たんだが乗り込みと

いったって一旦大阪へ着いてから形式的に又梅田から劇場迄自動車で乗りつける位のもので真逆此寒空に大阪特有の船乗り込みも出来まいから僕の考えでは女優と女形を出来るだけ沢山盛装させて残らず荒縄や鎖で縛られた女を先頭に立て大阪中を乗り廻すんだ。どう

だ名案だろう」

「成る程ソリヤ至極いゝが警察の方は」

「一々そんな事を届けていたら不許可と決っているじやあないか、黙って実行するさ、後は始末書一本で済むだろうじやあないか、昔し話になるがね、コートとあれはたしか明治卅六年頃だったか、まだ大阪に自動車が無かった頃、川上が明治座でクオセロをやって其次に大阪でやった時、自動車で町廻りを仕様として島の内署へ届けると署長の云う事が実に面白いじやあないか、クそんな危険な車で大阪市中を乗り廻すんなら前日から其通過の図面を出せ」と来たね、どうだ君呆れたろう。それから見ると日本も急速に進歩したものだねえ」

「えゝ、えゝ、実にえゝ考えじや。そいじやアそういう事に決めて、大阪の町々を驚かすかな、ワアッハッハッハハッハッハ」

昨年の二月号より連載中の、伊藤晴雨先生の「性液」は、満天下ファンの絶賛を博しておりましたが、愈々次号二月号をもつて完結することになりました。一回の休みもなく、熱筆をお揮い下さった老先生の御尽力に感謝すると共に、次作に期待したいと思います。

懸賞 告白と手記と体験 入選

『色^{イロ}惚^ボけのペーヂ』魔^マ像^{ゾウ}保^{タモツ}・記

畔亭 数久・画

テーマ「色惚けのペーヂ」の下に幾つかの記録を続けて行きたいと思っています。記録の中でも特にフアンタジーと現実との懸隔の狭いもの、即ちごく最近のものから始めて明日に続けて行きたいと思って居ります尚、真実の告白故に、私の環境を具体的に

述べたくなかった所^セ為^イでしようか、それとも私自身の拙い作文力の所^セ為^イでしようか、兎も角ブローグの頁を簡単にすべく、気儘なセンスで運びましたので、折角の体験なのにドキュメンタル性の感受が薄れはしないかと心配です。それ故此処に改めて

告白に至っては終始一貫私が身に染みて体験したところの忠実なる敘事的記録である事を誓います。マゾヒスト諸氏の夜毎切望して飽くなきところの悪夢の価値を高めるべく、そして亦得難きサド女性への現実に於ける遭遇の手掛りとなる為に――。



今日も亦、午後の一時を過ぎる頃にペーヂの朝がやって来た。丁度軌道に乗れるノーマルな人々が一仕事終え、昼休を迎え、そして再び開始せる活動に精出す頃に、彼にとっての黄色い太陽は、未だ寢床に瘠せた体を横たえる彼を恥かしめて居た。そして衰弱した彼の肉体は、長い間の過去を物語り、女は恐いと云っていた。「あーアッ……」と歳にも似合わない力無い欠伸をしながら彼は何か思い出したかの様に猫背の悪い姿勢で起き上った。

前 戯

暫くしてペーヂは女の次に恐い鏡と頸つ引きに恐怖を抱いて立って居た。其処にはテストステロン缺乏ぎみな、三角形を逆さにした様な頬っこけ顔が、いとも憐げに覗いていた——トロロと濁ったお下り目尻が——、気になる中央のチンコロ鼻が、……自分でさえ蹴ってやりたい……否、「お前は正直者な鏡だろうか？それとも倒錯せる性慾迄も反射する秀

でた鏡なのか」既に意志無きペーヂに狂って残れる唯一つの、それも幽な自惚心は挑戦を試る。彼は細腕を二つに折り曲げ、出来るだけ力を籠めて太くに映して見る。駄目だ、力溜どころか顔さえ引き締まらない。

「ネエー腕の細い人はアブですッテ、巾着頭はマゾだッテ、典型的ネ誰かさんは。コラッ巾着頭のペーヂや！その顔で見上げてゴラ姉さんを……フツ眺え向きのマゾボーイ」鏡はいつもそんな風に、見下す女主人のきつい目つきの様に、ペーヂのか弱き抗いを崩折ってしまうのであった。彼のプライドは真紅に爛れた何千丈の谷底に突き落とされた。けれど諄い彼の思考は、或いは重症マゾヒストと呼びたい様な彼の鈍った性慾は、途中で折れそうな小枝に、「男の価値は外形に左右されない」と叫びながら引掛った。彼に在って中ブラリンの状態は辛かったので、日頃認める人間体に表われる々と云う箴言にお願いして、色の世界に来てもらった時、小枝が折れた。……と同時に彼の自己意識は、人間より開放され、小人となりて速やかに貴婦人の靴底に潜り込んでいた。

インフエリオリティー・コンプレックスよ現実回避の懶心よ、或いは肯定せる厭世観よ

吾が身のセクスと接独し給うな、火花散るそれとそれとの混血境は触れてはならないマゾの界、素敵で憐れなパラダイス。

思考の快樂ここに在り。

男の合作戦争と妖女の創造マゾ・ボーイペーヂは選んだ平和境、マゾに生命を賭けようよ、思考を逆転すれば良い。

常人が榮華を望むなら榮華の席は満員になるかも知れないよ。さらば空席に短き生命を刻まん。

告白(一)

(昭和二十九年八月二十九日の無銭行脚)

色惚けのペーヂや、今日もお前は街に行く、女主人を探しにか底無しポケットのズボンを穿いて。

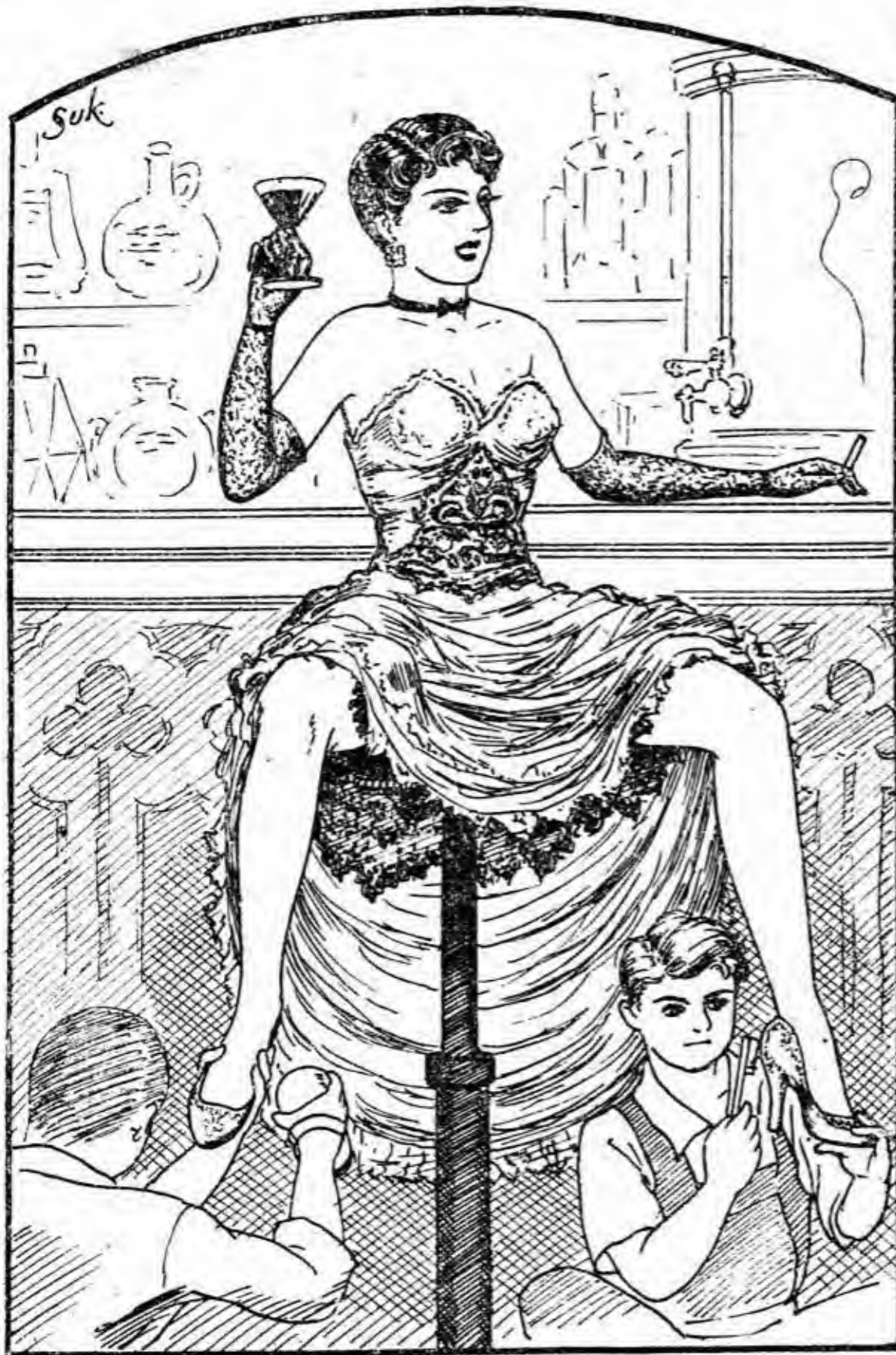
もうかなりも前からの事、私は、マゾなイメヂーのみでは満足し得なくなり、内心に於けるイメヂーの価値を存続せしめんと、その実証を現実の上に渴望し、更にはその現実に於ける女主のサド性の真実の程度が、僕のエクスタシーを上下せしめ始めて居た。色ではない色を漁るそうした悪習が為に、今日も亦

仕事をサボって誰も知人と遇う恐れのない、僕の家から程遠い米軍港横須賀の街を若松町に向って歩いて居た。駅前からバスに乗っても十円だが、僕が徒歩を選んだ理由は懷中に下男志願用の履歴書の一通を忍ばせていたからだ。僕は、米水兵、在留外人、女給、そしてオンリーに埋まる、そんな横須賀が好きだった。寧ろ東京以上に行き交う御婦人方は美しく、素敵な身型をしていた。唇から食出た外国製ルーシュの塗り方等、實際私好みの色彩が満ち溢れていた。軟々とせる小さな足が鋭角に翳える踵の高い素敵なハイヒールは邦人オフリミットのカフェー街のクロッシングを跋扈する……。白・赤・黒のパンプス、サンダル、バックスキーンと、……ハイヒールは呼び掛ける。——「あたし達のハイヒールは、ナイロンに包まれたアタシ達の美しい足を一層長く遅しく、ヒップをも尚更誇張してその下に這蹲り、平伏する憐なお前達男のトンネルを、より潜り良く、より峻しくする女の武器なん

だよ——僕は熱っぽく見詰めていた。逆眉立てた女達の色香は、婦人達に依って道路権の譲渡を余儀無くさせられ、小さくなった僕を横辻の片隅に恥かしめていた。

羨ましき靴磨

ふと、或る光景がペーチの目前に拡大された。彼は蛇の前の蛙の様に竦んでしまった。そしてバー・ポパイの開け放されたドアの中に充血した視線は釘付けられた。其処にはパーテン台に居並ぶ素脚の背の高い回転椅子に、三人の女給さんが足をぶらぶらさせなが



ら、キツキツとして笑い戯れていた。そしてその中の煙草をふかした二十四・五のカットさんが、太股もあらわに大股を開いて二つの靴磨台に真赤なハイヒールをのせ、一足のハイヒールに、それぞれ一人の少年が、かすずいて懸命に磨いていた。お姉様方は少年など眼中にないであろうか、いや少年どころか、日本の男など問題外なのである。二人の少年は、そのポリウームのある、こんもりとした、その股の間に吸い込まれるかに見えて居た。僕は少年が羨ましかった。そんな風に股を開いたり窄めたりして磨かせていた彼女は、瞬間、少年達の頭上に、二本の圧倒的な足を延ばしてから、よけいに股を開いた。「アッ！ズロースが……」「凄いな」と僕のセクスが全身にササやいたと同時に彼女は、僕を睨んだ。僕は、顔の真紅に火照るのを感じ、慌てゝ彼女の視線から逃れた。そして恥辱的悪口の飛んで来ない事を、お願いしながら、恍惚けた顔して振り返り振り返りその場を立ち去った。暫くして、彼女達の嘲る様な笑い声を背に聞いて、僕は、どきまぎしたが、アタリの男達にマゾを見透されない様に、速やかにかの嘲笑とは、何んら関係のない人となつて歩いた。内心と表面の咄嗟的矛盾は微な眩と

なつて消えて行った。

飯のボーイ志願

数あるバーの中にも、雑役は愚か、ボーイやバーテンの募集広告に至る迄、この日に限って見られなかった。低賃金でマゾヒストを利用しようと云う聰明なマダムは居ないものか、そんな事を考えながら大滝町近くに来た時、僕は見つけた。「在った、在った」屋号は忘れたが、掃除婦募集の張紙が、僕は、そのカフエーの前を行ったり来たりした。婦が夫ではないからだ。けれど表札が女の名前であつた。「アッ、マダムの経営だ」僕は、家を出る時、身仕度せる縫れ縫れのズボンと薄汚れたYシャツ姿で、その店のカーテンをくぐった。米国水兵が数名、女給とダンスをしていた。僕は出来るだけミスボラしげに、田舎くさく、けれど善人で大人しげに装って、一番ドアの近くに女同士踊っていた二人の女給さんに、小さな声で尋ねた。「こちらに、掃除婦募集と出て居りますけど、男ではいけないでしょうか」と、一人の女は嫌悪を感じたらしく「婦と書いてあるんだから、男じや駄目でしょうネ」と険ある調子で云った。その油ぎった女の表情には、女のマゾチヒス

ムの裏返りが読めた。恐らくは、彼女達の入る便所の掃除など僕にやられたのでは、男に對する彼女の大切なイメヂーに傷がつき、性に支障をきたす事になるのである。僕の性向と彼女の性向とが衝突回凹していたのではなからうか。こんな時、こんな女は度外れた狂的サドにもなり兼ねないし、亦、僕にしてみても、新聞三面に良く見る、変態殺人にも似た殺意に落ち入り易いのだと思った。も一人のシンパンツにナイロン・ブラウスの女給さんは「マダムに聞いて来て上げる」と云いながら二階に昇って行ったが、すぐに戻つて来て言った。「急ぐから男でもいいけれど勤まるかってマダムが云ってるけれど、……アタシ達の部屋の掃除もするのよ、それに此処の床の雑巾がけも全部するのよ」と赤い背の高いハイヒールの爪先で、コツコツと床を踏み鳴らして僕に教えた。この調子では、僕の尋ねたい所の婦人便所の掃除も勿論、僕の役目にされるのである。そして慣るに従つて、中には、或はアタシモ、アタシモとズロースの洗濯まで、皆さんから云いつかる様になるかも知れない。……僕が何一つ特に男らしい質の価値を発見されずに、唯々従順にしているならば。僕は、すっかりしない気分

なつて来ているのを払いのける様に、

「お金どの位貰えるんですか」と、その声はかすれていた。彼女は云った「四千円位じゃないの、だけどアンタ家何処？」僕は用意の履歴書を見せる。「東京ネ、無理だな、今男の人の寝るとこ無いのよ、だから近所の人で他に仕事持っていて、アルバイト旁々やって呉れる様な人が一番いゝんだけど、でも裏から二階に昇るとこ在るから行って聞いてゴラン」僕はどうもすみませんでしたと外へ出、横木戸から入って階段を昇った。入口には油の染みたハイヒールが三足、脱ぎ捨てられて在った。変に思われるといけないので僕は、大声で、失礼します、と靴をぬいだ。

十畳と六畳の二間続きの部屋は、女の香で噓うそていた。外人好みの、色とりどりの肌着や衣裳が、部屋一杯に懸かっていて、僕の心を震わした。マダムと二人の年増さんが鏡台に向つて、シユミーズ姿で化粧をしていた。三十二・三であろうか、体格のいゝマダムが立膝をして、こっちを向いた。僕はバカな顔して大きな立膝の前に両手をついて挨拶した。マダムは軽い会釈もなしに「履歴書持つて来たんでしよう、見せてゴラン」と仰言うかった。僕は立膝の前に小さく畏まって返事を待つて居

た。「今、寝るとこ無いんだけど、……大人しそうな男だね」とマダムが云ったので、化粧していた年増さんが笑った。その嘲笑もつかぬ笑の中には、一種の色香があった。一体、僕は幾つ位に見られるのであろうか。

「その中考えてやるから、二三日下のボックスでも寝られないかい、給料は、食事付で四千円だよ、……チヨットあんた、それで何時から来るの」「明日からでも来ます」薄いシユミーズからは、ズロースが透いて見え、特に股の附根に食い込むゴムのあたりが、僕の目付を変にした。マダムの太股が一番肉感的だった。歳よりかなり下に見える僕は、何んの事なく雇傭が決定し、「では、どうぞ宜しく」と階段を降りた。僕は若松町に向つて歩きながら考えていた。——恐しくスレツカラシな女ばかりだと、そしてあんな家二度と無いかも知れないから、いっそ思い切つて飛び込んでしまおうかと、けれど僕は、色々の事情で、どうしても住み込むわけにいかなかったので見す見すチヤンスを逃さざるを得なかった。で、慰めの為の気休めを考えた——かの刺戟が跡切れ跡切れに僕を襲えば、僕は気違になるかも知れない。——亦、かの刺戟に日がな一日襲われ続けられるなら、僕は、死

んでしまふ、生命を削る様なものだ——。それに女の下で働く事の可能を、そして、男を下にこき使うのに、何んのこだわりも無い女達の居る事を、現実の上に認めたではないか。僕のイメヂーは死ななかつたし、……それでいゝのだ。それに僕はもっと多くの凡ゆる条件から好適な刹那の陶醉境を知っているではないか、そして、其処での女主達は、最前のカフェーの女達の様に、ノーマルな日常生活の感覚の分別内で、何んのこだわりも無く男をこき使うのではなく、更にそれ以上の女の快楽をしながら、僕をさいなむ女主達であるのだ。僕は、急ぎ足にボロ靴を運んで、若松町の目的地辺りに来た。巷に氾濫する瞳は、スカートを活潑に翻えして、僕を貶おとしすんでいた。

横須賀の泥

色惚けのペーヂや、今日もお前は街に来た、女主人を探しにか、
底無しポケットのズボンを
穿いて

若松町に在る四軒の映画館の中、僕の望みを適えるに相応しい条件をそなえるものは、第一劇場である。そしてその条件とは、先ず

二階席の構造であるが、正面スクリーンに対して階段式に椅子が配置せられ、その階段の中程の段を通路としてとったものであり、段の急なものは程絶好のものである事。次には、封切館ではない迄も、封切館的存在である事で、それは二・三流館に比して女性の多く入る傾向があり、より着飾った婦人達が多いと云う理由に依るものであった。

クスマス都へ行く。上映中か、アメリカ映画だな、僕は第一劇場前に佇んで、暫し客の傾向を確認した。米人、オンリー、女給などがアベックで、或は友達同士で次々に入場した。彼等は必ずと云っても良い程、特別料金の二階席に昇って行く。それに反して、この街の普通一般の日本人は殆んどが普通料金の一階席で観覧するのが常だった。

二階席に亦、ハイヒールの婦人が昇って行く、僕は二階席には婦人が多い事を知った。そして、多数の婦人の中に稀なる婦人を見出す事は小数の中に求めるよりも率がよい。ましてや、それ等婦人の大半が、あの道にソフィス・テイケイテッドされたオンリーや女給ばかりではないかと、胸をはずませ、どうか今日も素敵な女主人に隷従出来ます様にと百五十円の二階席を求め、三段跳びに駆け上

って扉を押した。案の定、場内は、色とりどりに着飾った婦人達の衣裳で絢爛と女の香に満ちていた。而も日本の男性の姿は、例に依ってごく小数しか見当らなかった。

先程説明せるかの通路の上に、僕の坐高程もあるうか、一段と高くに連なる椅子席の一系列に、僕は視野を狭めた。その列には、足を組んだ数人の婦人が疎に脚線美を見せ、ハイヒールの靴先を下のかの通路の上に突き出していた。それ等の中にも、ひととき目立っていた。(僕の立つ左端入口から正反対の右入口に近い、その例の右端に)黒と白の形の良い二足のハイヒールが仲良く並んで特別高くに、突き出されていた。「アー足台」僕はハットしたが、馳る心臓を抑制して先ず便所に行き、出しなに今日二度目の、鏡との前戯を済ませた。僕の顔は、今朝よりも数倍憐れになっていた。この街の婦人達の色香が、僕の脳神経をして、そんなにも下劣な事を考えさせて居たのだ。人間は体に表れるのだ。僕は便所を出て廊下を急いだ。二階席券検閲ボックスの二人の女従業員が、憐れなみすばらしい僕を、二階に来るのが不思議だと云う顔付で、亦、二階はお前なんかの来る所じやないと云う態度で僕を見ていた。僕はその前を小さく

なって素速く通り、右端のドアから暗い場内へ入った。其処には最前、僕の内心の中に「足台」を誓わせた、今日の女主になるであろうところのお二人が、相変らず、足を高くに組んで僕の心臓を止めんばかりに突き出していた。僕はその女主の席の隣りに、しやがんで、スクリーンに見入る様な風を装いながら、ちらりちらりと、かの女主人達を盗み見た。――仮に右端からAさんBさんとしよう。二人共長身に属する、肉感的な柄で、歳の頃は、Aさんが三十、Bさんが二十八、九で容貌は姉妹でもあるうか、二人共目鼻立ちの大きい、エキゾチックな美人で、鈴の様な目をしてるのだが、目尻の釣り上がりぎみの、眉毛の長い、きつい美貌には、マゾを偲ばせる印象はとんとなく、二人共福ぶくしい面長な顔だちに、例の唇からはみだしたルーシユの化粧をしていた。何スタイルか髪容も洒落たものだったが、Bさんの頭は聊尖って見えた。僕が巾着頭でマゾヒストなら、トンガリ頭のBさんはサディストか？凹凹としてAさんは何んと云う生地か、艶のある見るからに柔そうなワンピースを、Bさんは、両脇が膝より十糎程上の中股の辺りで割れている刺繍入りの支那服を、誂物なのか、それぞれピタ



リと着こなし、ピチピチしたボリュームのある健康な肉体の線を見事に画いていた。似ている女同士が、あんなに気安そうに話しているところを見ると、どうしても姉妹だった。姉妹でオンリーでも、それともバーでも経営

しているのであろうか。Bさんの隣りにアメリカ人が掛けていたが、一向にさっきから話をしない所を見ると連ではないと、いつか僕の中着頭に在って、そんな観察が敏速に済まされていた。

僕の視線はお二人のパンブスの爪先に結びつけられていた。僕の頭は性慾で一杯だった羞恥も何もあったものではない、僕はその突き出されたお二人の素晴らしい足下を慕って丁度Aさんの靴底が僕の頭上にある様な位置

に、奴隷が足台になる様な敬服した気持で近付き、ベタリとその足下の通路に腰を降ろして胡坐をかいてしまった。画面は通路より一段下った目前の椅子席の背で半ば遮ぎられたが、僕は見える様な風をして、お二人の股下に在ってAさんのダイヤを散りばめた黒ハイヒールの靴底を嘗める様にして見上げていた。其処には、僕の頭からでも生えたかのように美しい太い脚線が聳え、他から見ると小さな僕を圧し潰すかの状態を呈していた事だろう。僕は更にその恐ろしい脚線を辿って、小さな僕を抱くかの様に覆い被さっている頭上の太股の中を、見上げる様なかっこうで凝視した。けれどスカートに覆われた暗い部分には、太い太股が微かな隙間すら作らずに組合わせられ、ナイロンの青色がかゝったシエミ

ズのレースの端が、組まれた二本の太股の間に挟まれていた以外には、ズロースの窪みなど、どうしても見る事が出来なかった。

首を延ばしてBさんの方を覗いた。Bさんは支那服の股の割れ目から派手に、附根から組まれた太股が、小さな桃色の三角形の窪みとなって幽かに匂っていた。「スゴイナ」僕は幾度か溜息の様に呟いた。二人の女主人の股下には成熟せる女香が、沈滞せる生暖かな空気中に発散されていた。香水の、化粧の、股間の、……何んとも云えない芳香がミックスして僕の身心を縮ませていた。次に僕は背中をまるめた姿勢を僅に延ばした。Bさんのハイヒールに踞える足がストッキングを通して甘酸っぱい香を僕の鼻面に匂わせた。「ア——僕は気が遠くなりそうだ、」そっと、そのバックスキーンの白靴に囲まれて盛り上ったBさんの足の甲に、犬の様にクンクン鼻を擦り寄せて、そっと嗅いで見る。狂気の沙汰だ。オ——僕の体は恼しき女主人達の色香に、おののき震えているではないか。BさんがAさんをコソクのが感じられた。主人を慕う小犬の鼻息は、敏感な女の足を通して、お二人に悟られてしまったのだ。お二人の女主人は自分達の足下に芋虫の様に背中をまるめて小

さくなって震えている、見窄らしい仔犬を見下した。そしてその仔犬は、チンコロの様な間の抜けた顔をして、アタシの新調の白ハイヒールに頬擦りしているではないか。Bさんは足を引っ込めるところか、女の揶揄い心を起したのであろうか、僕の鼻面に突きつけたハイヒールの爪先を、丁度、猫を戯らす時でもあるかの様に上下に揺すぶってみた。僕は実に滑稽な憐れな顔をして、その爪先の上下に合わせて、猫が足に戯らされる時の様に、目を見はって、一二、一二と首を振って、その爪先を追っかけた。今迄堪える様にしていたお二人の女主人の、「フフフ」と云う嘲笑が、何んの遠慮心も含まずに、僕の頭上に聞こえ、増々Bさんは色々な動かし方を始めた。——爪先はいったん逃げておいて、サツと僕の鼻面に突きつけられる——僕はサツと首を引いて、後退する——亦そっと僕が近寄ると——僕の額の辺に逃げて、かの爪先が上下して僕をあやす、そしてそれではまだ女主人の悪戯心が飽き足らないと見えて、女王のハイヒールの爪先は踵部を軸にして、小さな輪を画いた。——僕の鼻面に魔力を持って画かれる女王の爪先の画く輪の通りに僕のチンコロ鼻が輪を作る、僕は犬にするおまわりをさせら

れていたのだ。而もAさんは僕の滑稽な様をBさんにも見せるべく見下すBさんの視野の範囲に僕の間の抜けた顔を誘って行って、そうした芸当をさせていたのだ。何故なら、その時、甘酸っぱい香を匂わせてむっとする様な体温が僕の頬を撫でてAさんの太股がハダけられ、大きい半円を画きながら派手に足組が組替えられ、Aさんのハイヒールの爪先が僕の鼻面に突きつけられたではないか。

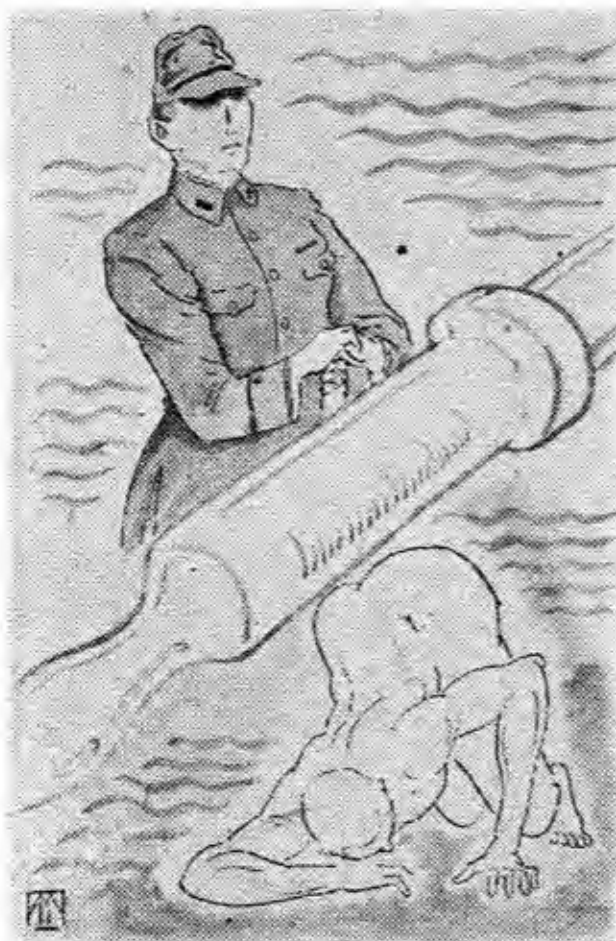
そして、僕の鼻面に突きつけられた白と黒の二足のハイヒールは、惱しく笑いこけりながら、僕を交互に揶揄った。僕は映画に女主人を奪われぬ為に忙しく交互に戯れついた。けれど、やがて二人の女主人は、再びスクリーンに見入ってしまった。僕の頭上に、それぞれハイヒールを突き出したまゝ。僕はその時既に、お二人の心の中に在って、最早犬以上の何者でも無くなっていたのだ。

二十分後にペーチは横須賀駅のプラットフォームのベンチに掛けていた。ク追忆を奏するピヨロンの溜息にも似た一抹のペーソスがペーチをば憐れげに、何かの抜け殻の様にシヨンポリとさせていた。顔をふせたペーチの瞳には涙にも似た一種の雲が懸った。

秘^ひ虐^{ぎやく}

懸賞（告白と手記と体験）入選

秘かなる加虐、そういうサジズムもあるということをしは話してみたいのです。



はしがき

これから記していこうとするのは、戦争当時の事柄ですから、私がマゾヒストとして過していた時期に当るわけですが、その時の相

手であったYと云う将校にだけは奇妙にサジスティックな欲望を持ち続けていたものです。

ずっと幼い頃から、私は軍人に対して一種特別な興味を感じていました。それは単にソドミアだけではなくその深部には微量乍らも可成りに根強いサジズムが潜在していたようです。その時分はまだ私の性向の一部分を占めているにすぎなかったサドが、軍人に対してだけ集中的に現れ

て来ると云うのも、不思議と云えば不思議でした。

Y大尉は、母のクラス・メートの弟に当る人で、私の住む市の部隊へ移って来た時に、母が下宿先の世話や何かをしてやった関係で私とも自然知り合うようになったのです。彼は、恰で軍人になる為に生れて来たように軍服のよく似合う男でした。Y大尉の権力者らしい横暴さや荒々しい動作も、私にはすべて男らしく感じられ、それが亦サジスティックな

青葉 楨一

感情をチクリ／＼と刺戟するのです。

彼と私の交渉は、厳密に云ったら同性愛関係とは云えないかも知れません。大体大尉がソドミアであったかマゾヒストであったかも、彼亡き今では確める由ありません。十も年下の私には、己の欲望を彼に強制する事などとても出来ない事でした。それは勿論大尉も私には充分な好意を示してくれました。弟のように可愛がってはくれました。でも、それ以上の愛情となると、矢張り私の一方的なものでは無かったのでしょうか。私は秘かに彼を愛し、愛するが故に秘かに虐めて自分の心を満していたのです。

秘かなる加虐——そういうサジズムも有る

と云う事を私はお話ししてみようと思うのです。

第一章のモデルは、Y大尉の場合が初めての経験では無いのですが、彼が軍人である為に、サジスチックな感情が倍加される処に意味があると云えましょう。又、第二章の「浣腸」は、私は少年時代から抱き続けて来

た浣腸願望（年長の同性に浣腸を施したい）の最初の実現で、忘れる事が出来ません。

モデルについて

絵に興味を持つ私は、時々男のモデルを雇っては、デッサンやクロッキーの勉強をしていました。

私がY大尉に、モデルを頼みたいと考えたのは、彼の裸体を心ゆく迄眺めたい気持の他に、もっと別の動機があったのです。それは江戸時代の画壇で写生派に属する円山応挙について伝わる挿話からヒントを得たもので、その話と云うのは次のような事です。

「応挙は、裸体写生の必要を痛感すると直ぐにそれを実行に移した。彼の熱心さに動かされた或る武士が着物を脱いだ、さて禪だけは武士の体面上とるわけに参らぬ、と頑強に拒んだ。併し武士の面目など応挙にとっては凡そ意味ないもので、その全裸の姿態を写す事こそが重大だった。結局武士の方で面目を捨て、禪をはずさざるを得なかったのである。」（日本英雄伝より）

私は前から此の話が非常に気に入っていました。最初頑強に拒否し続けていた武士が、応挙の熱意に負けて、厭々乍らもう／＼禪

も脱されて了う有様は、ジーンと滲んで来るようなサジズムを感じさせます。武士の面目丸潰れのみじめな姿——否応無しに真ッ裸にされ、応挙の恣の視線に曝され乍ら彼はそう思ったでしょうし、その為に泣き出したいような気持だったかも知れません。その時の光景を想像すると、私は応挙が羨ましくも妬ましくも思えて仕様がなかったのです。

そうです。私は武士をY大尉に、応挙を自分に見立て、その挿話を現代に再現して見ようと考えたのです。武士だからこそ起るサジズムを軍人に当てはめて、秘かな加虐を悦びたいと思ったのです。併し時代のズレがあります。今の軍人が、果して昔の武士のように禪をとる事を体面にかゝわると考えるかどうか、それは疑問でしたが、私は期待に胸をふくらませて彼にモデルの事を頼んでみました。

「いゝとも。難しい事じやアないんだらう。俺は絵の事はよく知らないが——」
「えゝ。裸になって、一寸ポーズをつけて下されば——」

「おやすい御用だ。裸になるくらい——。今からでもいいぜ」

「そうですか。そうお願い出来たら……！」



私ははずむ心を押えて、デッサンの道具を取揃えました。Y大尉はいとも簡単に裸になる事を承知しましたが、まさか禪迄とらされるとは考えてもいないに違いありません。いざとなって彼が何んな表情をするか実に楽しみです。私が舌舐めずりをして待ちかまえているとも知らないで、大尉はサッサと服を脱ぐと、禪一本になって、

「此の辺でいゝのかい——？」

と壁を背にして此方を向きました。

(サア、此れからだ。キリリと確く結んだ断り立ての真白な六尺禪を、彼が果して脱ってくれるか何うか——)

そう思うと私の心は一段と緊張しました。

「——Yさん。アノ、真ッ裸になって頂けませんか……」

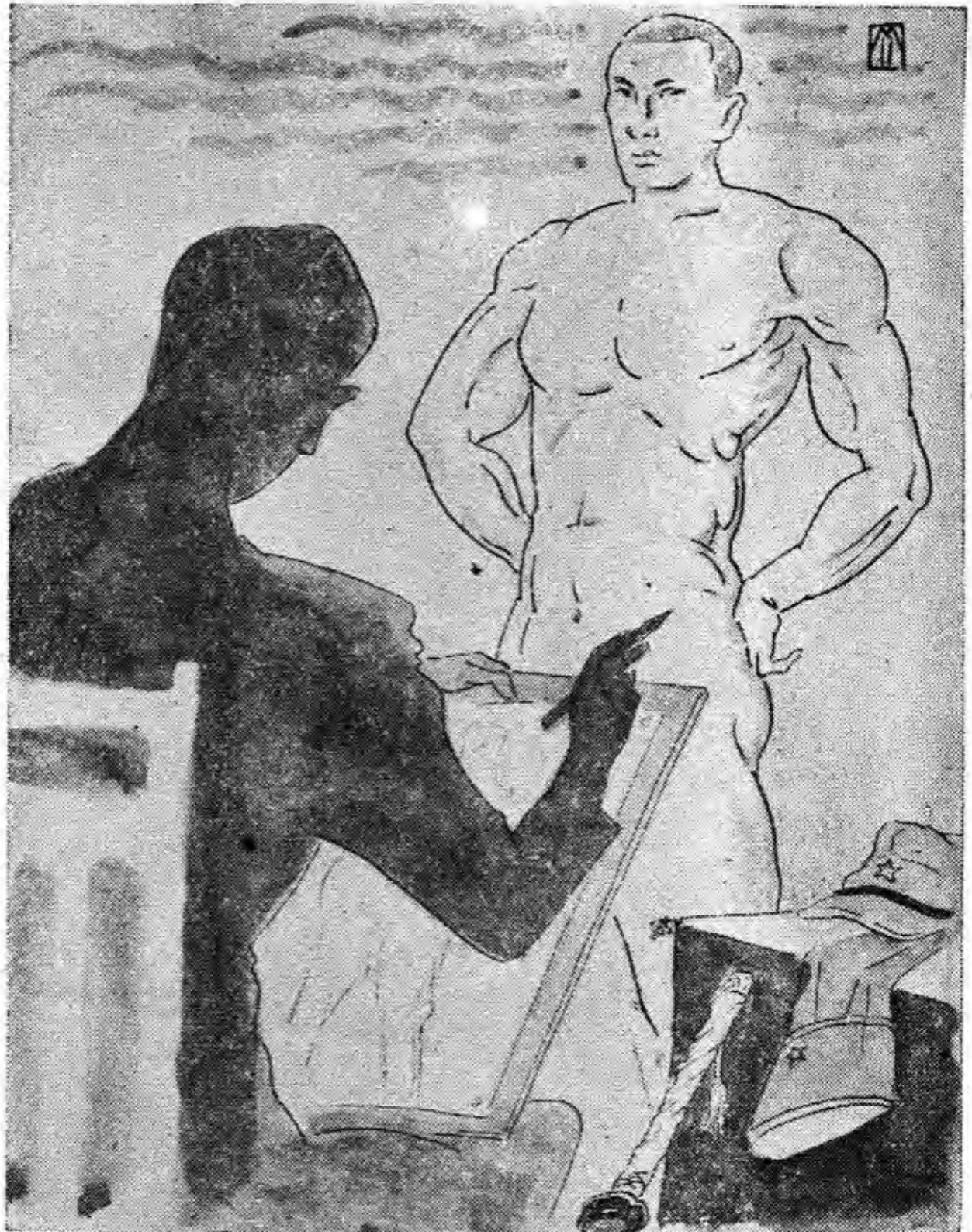
私は思い切ってそう云ってみました。

「真ッ裸って——じゃア、禪もとるのかい——？」

「えゝ。絵の事は御存知無いから無理もありませんが、デッサンのモデルっていったら全裸って事になってるんです。猿股も禪もしていちやア駄目なんですヨ」

「へえ、そう云うものかい……」

大尉は、驚いたと云うふうにそう云いまし



た。

「こんな話があるんですよ——」

と私は、応挙の挿話を手短かに話して聞かせました。

「——ふうん……」

と感心したように唸った大尉は、すぐに武士の立場が恰度今の自分と同じである事に気付いたらしく、擦ったように笑いました。

「——矢張り、昔の武士だったら、禪をはずす事は、体面にかゝわると考えたでしょうか

？」

「そう私は悪戯っぽく訊いてみました。」

「それはそうだろう。もし公衆の面前だったら尚更の事だ——」

「貴方でもそうですか……？」

「そりや大勢の前だったら面目も何もあったもんじやアないさ。褌を剥がされる事は、軍人の権威を剥がれるのと同じだ。形の上だけの事でも立派な凌辱だね。屈辱だよ——」

「恥かしいのとは違う感情ですか——？」

「女の子じゃないし恥かしくは無いが、つまり陰部は普通人の前では隠しておきたいそれを露出しなければならぬと云うのは、意志の蹂躪だろ。だから屈辱感を感じるんだね」

「被虐感とも通じますね」

「マゾヒズムか。うむ、それも確かだ——」

「こんな短い会話も、私にとっては極めて悦しいものでした。」

「サテと、——此れから俺も、君に褌を脱がされるんだナ……」

「でも、御迷惑だったら」

「何、平気さ。君だけなら——。誰も来やしないだろ？」

「えゝ、扉には錠を下してあるし、窓にはカーテンが引いてありますから、その点は大丈

夫ですけど——」

「ならいゝよ。風呂屋へ行ったと思やア何でもない——」

ワザ／＼「風呂屋へ——」などと云うのは矢張り何となく恥かしいからだろうと考えると、快感が腰の周りを撫ぜるようでした。

Y大尉は褌の結目に手をかけました。

私は、急速にもりあがって来る昂奮に胸を波打たせ乍ら、ジット大尉を見守っていました。

スル／＼と褌がはずされて、今や大尉は一条をも纏わぬ全裸体で私の眼前に立っています。ハッと息を呑む程、彼の肉体は逞ましく美事でした。

モデルの経験など無い彼は、全裸の肉体を私の呵責ない視線に曝されて、変に安定感の崩れた、何とも云えない具合の悪さを感じている事でしよう。

それで私は充分満足でした。

併し回を重ねて来ると、段々不感症になって了います。そこでポーズに工夫がいるようになる訳です。例えば、徴兵検査で肛門を検る時の姿勢をとらせるとか、出来るだけ凌辱的なポーズにしていくのです。

浣腸について

先にも一寸触れたように、私が浣腸に興味を持ち始めたのは、小学校へ入学する前後の頃でした。興味と云っても、私のそれは自分より年上の同性に浣腸してやりたいと云う欲求で、その逆の立場の場合は、考える興味さえ無いのでした。私自身浣腸された経験は、幼時期に百日咳の治療の目的で二三回と、それから浣腸とは違いますが、矢張り幼時にリソゲルを肛門から注入したことがあります。併しその何ちらも、只不快と嫌悪を強く感じただけでした。小学校の五六年になると、私は元来細い絵を描くのが得意でしたから、青年や中年の男が浣腸されている図を秘かに描いては悦んでいました。そして中学へ進む頃になると、本物の浣腸器を手に入れたくなり、とう／＼我慢しきれずに、或る日薬局で顔を赤らめ乍ら二〇〇Cの浣腸器を購ったのです。それから毎日のように人の居ない時それを取り出しては、様々の愉しい妄想に耽るのです。その時、私に浣腸される相手は受持の先生だったり、又軍服も厳めしい将校だったり、顔馴染みの交番の巡査だったりしました。今書いていて気が付いたのです

が、浣腸に関する限り私は初めからズツとサヂスチックであったようです。

Y大尉が私の夢であった浣腸願望を実現させてくれるようになるとは、全く思いがけない事でした。何かの話の折、大尉は常習便秘に悩まされていると洩らしたのです。私は妙に胸が騒いでくるのを覚え乍ら、

「何かいゝ薬はないんですか——？」

と云いました。いきなり浣腸の事など何だか恥かしくて云えなかったのです。

「——薬は色々出ているが、何うもコレという奴が無くてね。それに俺は何ういうものか、昔から薬が嫌いだからなア——」

「でも気分が悪いでしょうね。週に一回位の便通じやア——」

「うん——」

「何うです、浣腸なさったら——？ 下剤よりは速く効くし、きっと気分もよくなりますよ」

「浣腸か——。併し一々病院迄行くなんて面倒だよ」

「浣腸位、病院へ行かなくたって出来ますよ。僕でよかったですら、してあげてもいゝですけど……」

「君が——？ 併し器具やなんか無くっちゃ

出来ないじゃないか」

「あるんです。持ってるんですよ。僕、浣腸器を——」

「へえ——。変ったものを持ってるんだな」

と云われ私は顔を赤くし乍ら、机の抽出しの奥へ大切に蔵ってある浣腸器と、それより大分後で買入れたグリセリン浣腸薬の五〇〇グラム入の瓶を押入れから取出しました。

Y大尉は眼を丸くして、それらのものを珍らしそうに眺めています。

私は、もう恥かしさなど何処かへ忘れて了ったように、

「Yさん。お願いです。一度だけ僕にやらせて下さい！」

と哀願しました。

併し大尉は余り気の進まぬように、

「大丈夫かい。本当に……」

「大丈夫です。注射とは違ふんですから、素人でも出来るんです。それに僕、注意してやりますから……」

「うん……俺は未だ一度も浣腸した事がないんだが、痛かアないだろうね……」

「そんな事はありません。子供だって平気でやるんですもの。ねえ、本当に、いゝでしよう？」

「うん——併し——気持が悪いだろうな」

「でも後で気分がよくなるんですから——きつとやってよかったですよ」

「そうだな——」

「恥かしい事もないでしょう。恐い事だってありませんよ」

私は彼の臆病を嗤うように云いました。

大尉は、それが一寸癪にさわったとみえ、急に、

「そんな事はないさ。じや一度だけやってみるか」

と云って吸い差しを灰皿へ抛りました。

「ええ。じやベッドへお寝みになって下さい——」

私は、念の為腰の当る位置にバス・タオルを敷いたベッドへ大尉を寝かせると、ワクワクし乍ら下半身をすっかり裸にしました。

Y大尉は、観念したように天井を見詰めたまゝ、私のなすがまゝになっています。

永い間の念願だった浣腸をいよくやるのだと思うと、浣腸器に薬液を充す私の指は、歓喜と昂奮にワナ／＼と顫えるのでした。

二〇〇C用でしたが、入るだけたっぷりグリセリンを充すと、脱脂綿をちぎってベッドへ向き直りました。

大尉の顔を見ると、背いて伸していた両脚を高く上げ、それから膝を曲げて臀部を持ち上げるように、恰度赤ん坊がオシメを換える時の恰好をしました。それは私が命じたのではなく、彼が勝手にとった姿勢ですが、その官能的なポーズは大変私の気に入りました。

「余り緊張しないで……。お尻の力を抜いて……」

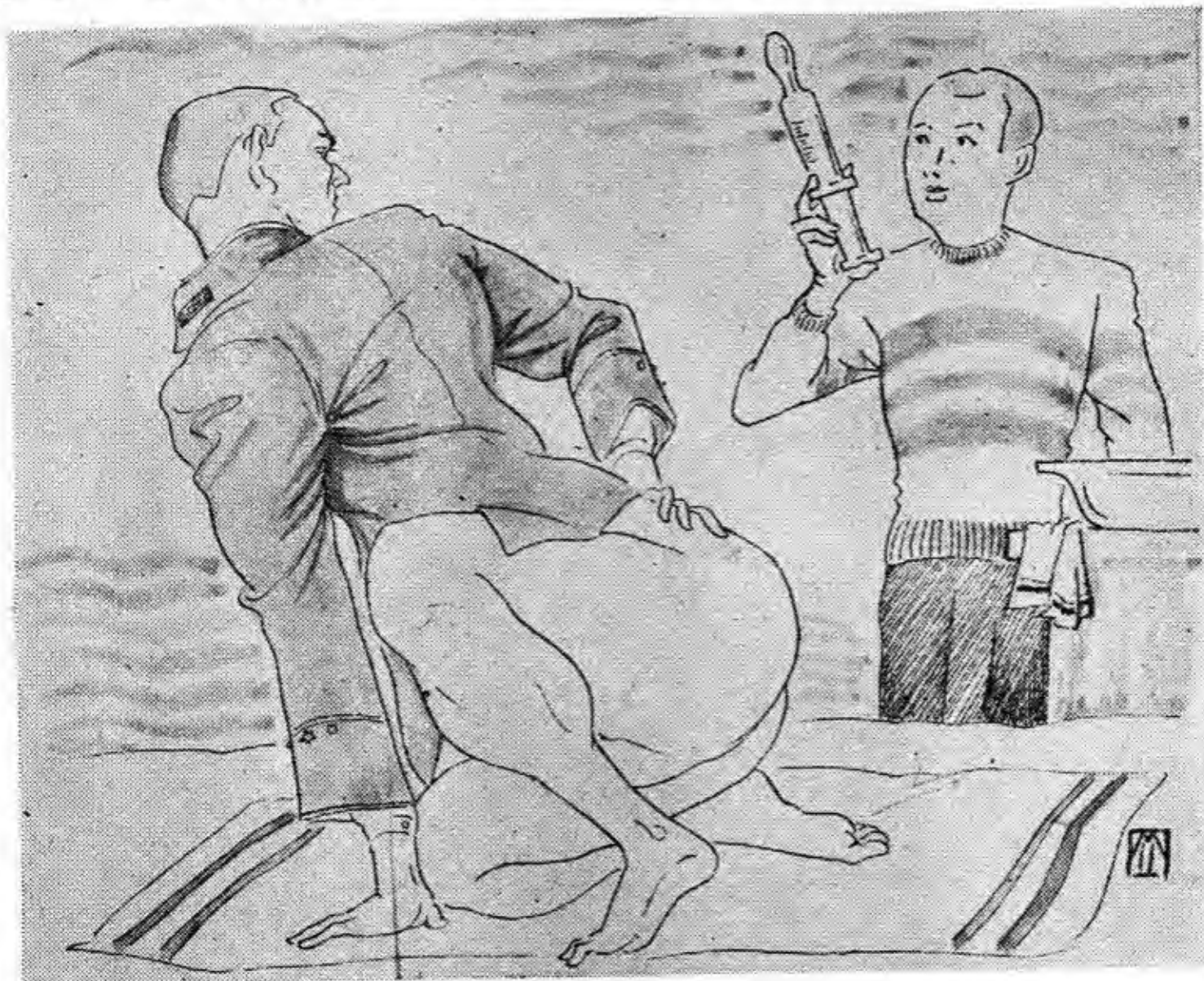
と注意しつつ、私は浣腸器の先端を、徐々に力を加え乍ら大尉の………なのです。

眉を少し寄せ、口を半ば開いて、眼を大きく開けていた大尉は小さな声で、「痛ッ」と云いました。

「力を入れるからですよ。楽にしていっちゃい……」

私は、サジスチックな感情を次第に昂まらせ、それにつれて右手の拇指の腹で把手を押していきま

した。
薬液を注入していく中に、私は全く予期しなかった現象を発見し



大尉の顔を見ると、背いて伸していた両脚

たのです。それは大尉の………が薬液の

注入と共にみる／＼変化していく事です。や

の原因が、浣腸による圧迫の為かそれ共、マゾヒスチックな感情によって起るのか、私には全然判りません。又、男子なら誰でも浣腸の時にはそうなるのか、それとも或る人物だけがそうなのか、それも未だにY大尉一人だけの経験しかない私には、疑問のまゝに残っています。

が、とにかく私にとってそれは二重の喜びでした。浣腸を益々愉しくしてくれるものでした。

浣腸器を抜きとると、あとを脱脂綿で押え暫く我慢させますが、激しい便意を覚える苦痛に、身を顫わせ、顔を歪めて脂汗を垂し乍ら、咽喉の奥で呻く様子は、何とも云えず快いものです。泣かんばかりに頼むのを、「未だ／＼」と云って許さないのもサジスチックな愉しみですが、やっと許されて跳び起きると、便器へ跨るなりたまり兼ねたように勢よく糞を排泄する時は、殆んど………

程の昂奮を覚えます。

一度と云った浣腸も、併し決して一度では
終りませんでした。そして、二度三度となる
中に、初めあんなに厭がっていた大尉が自分
から進んで浣腸を希望するようになったので
す。此れは第二の発見でした。彼が浣腸を求
めたのは、単に便通の後の爽快さを欲したか
らでしょうか。私にはもっと他に何かがあっ
たような気がしてならないのです。

次に同じ浣腸でも一寸変わった経験をお話し
しましょう。

「野糞」に対する一種の郷愁みたいなもの
が、私に此の思い付きをさせたので、それは

裏山へいき戸外で浣腸を行おうと提案したの
です。

いかなY大尉も此れには流石に躊躇をみせ
ましたが、私のたつての願いにとう／＼我を
折って承知してくれました。

浣腸器、その他必要品一切を小さな鞆に入
れた私は、大尉を伴って裏の松山へ登り、頃
合の窪地を見付けると早速用意にかゝりまし
た。

「誰も見てないだろうナ……」

大尉は帯革をはずし乍ら四囲を見廻してい
ます。

「大丈夫ですよ。此処は窪地だし、周りには
木が繁ってるから……」

そう云って、浣腸器を持った右手を上げる
と、グリセリンで濡れた尖端が初秋の陽にキ
ラリと光りました。

「では、いゝですか……少しの辛抱ですから
四ッ這いになって——」

Y大尉は私の方に尻を向け、無態な恰好で
両手を草の上につきました。

私は、夢に迄描いた「将校が野糞をしてい
る風景」を、心ゆくばかり眺める事が出来た
のです。

浣腸を施す側にある私はとにかく、される
側にある大尉は、此の場合浣腸を被虐とは恐
らく感じていなかったでしょう。併しそれで
いいのです。その時の私には、そういう微か
にも秘かな加虐こそが望ましかったのでした
から……。

(おわり)

秘 密

羽 村 京 子

十一月号の「裏返し」のA感覚」を何度も何
度もくりかえして拝見いたしました。そして
そのあげく、私はこの文章をかいてみる気にな
りました。もちろん、私のようなものに先生を批判
するなどということができるわけが
ありませんし、そのつもりもございません。
ただ、私としては、私の感じるまゝを卒直に

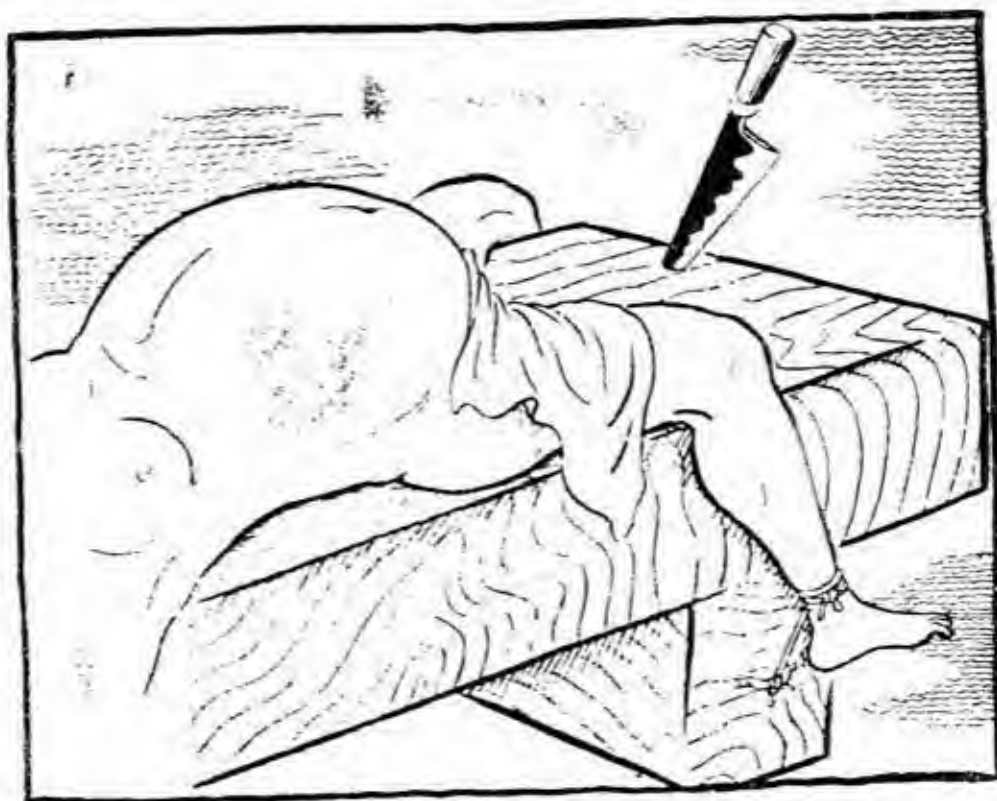
申しあげることが、先生のご好意に対する最
高の礼儀ではないかと思うのです。ですから
もしお気にさわるようなことがかいてありま
しても、どうかお怒りにならないで下さいま
せ。京子は京子のあるがままの肉体をまない
たの上にのせて、先生の前にさし出すのでご
ざいますから。

あちらこちらで私に対していただいている
身にあまるおはめの言葉を別にすれば、先生

の議論の要点は、「高圧浣腸器やゴム管やさまざまな人工手段ではちきれんばかりに膨脹した腹」が実は「裏返しにされたおしり」であるという点にあります。先生はおっしゃいます「あなたはマゾヒズムの立場からA感覚を理解しているのです。つまり、うしろにばらまかれた感覚のマゾヒスティックな享受です。ところがあなたは一方においてサドである。じぶんの眼でそれをたしかめ、愛撫し、

A 感覚の

(吾妻先生に)

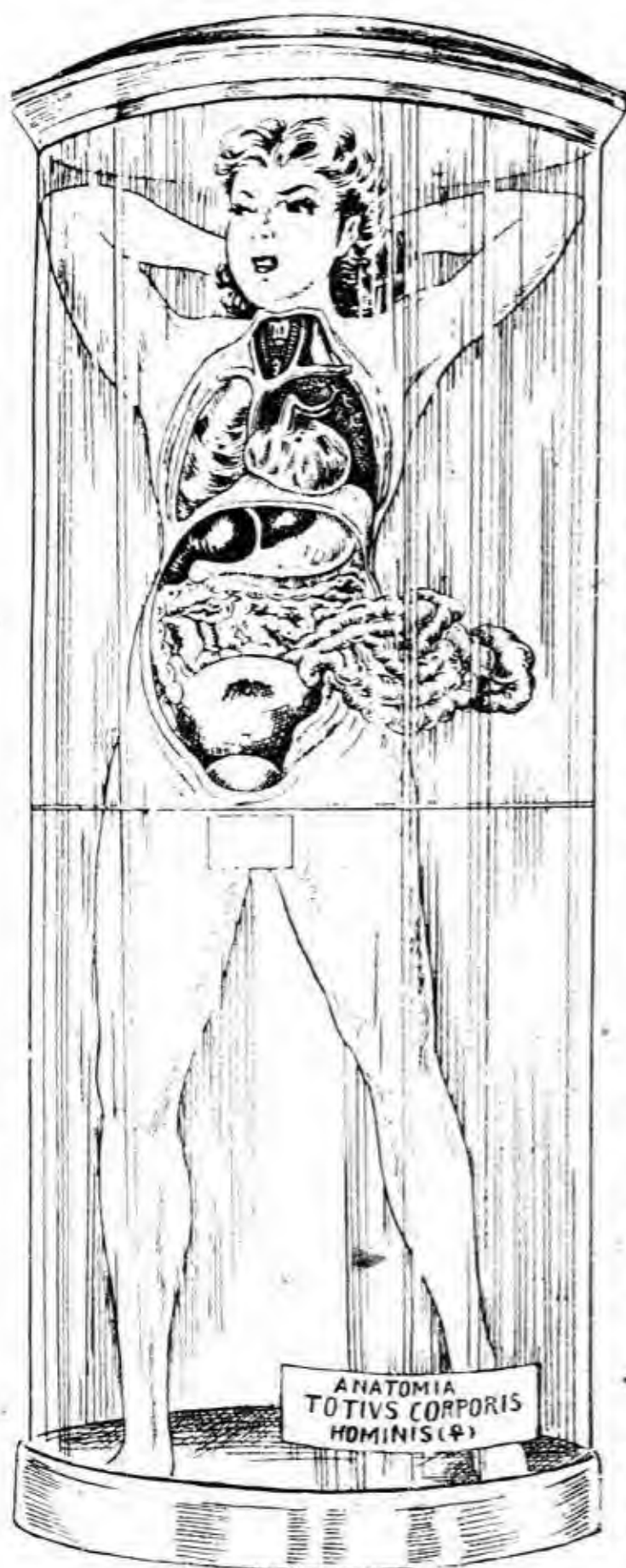


快感をおぼえたい。しかしうしろに眼がないかぎりそれは不可能です。臀部というものはマゾは提供しサドは利用すればいいのだが、サディコ・マゾヒズムの境地では主体と客体がひとつにならねばならない。だからどうしても裏返しにする必要があります」このことから先生はつづけて、「なぜ腹を立ち割らねばならないのか、またなぜ横一文字ではなく縦に裂かれねばならないのかといえ、……」

そもそも腹がおしりとくらべて遜色があるのは、縦に割れ目のないことです。……あなたはそれをつくる。割腹という形をつくる。そのとき、臀部代償は完成される」とされ、私の「臓腑への郷愁」も、「おしりの完成図をえたいために生れた『縦に裂く』幻想から、当然、みちびきだされた副産物であると云えましょう。なぜって、幻想がリアルであるためには、裂かれた腹が空っぽだなんてことは許せませんからね。やはり胃があり、腸があり、心臓があり、どろどろしたものがいっぱい必要です。」と云われるのです。つまり、こう門からおしり、そのおしりを「裏返し」にして盛り上った腹、その腹を縦にさいてどろどろした内臓、という経路がそこにでき上っているのです。

ところが、先生の文章を注意深くよんでみると、そこにもう一つの、別の経路がかくされていることが分ります。しかもこの経路の方が、ずっととっとりばやくて、近道なのです。第一は、先生自身のかくされたものではなく、引用していらっしやるところからです。が、「いったんお母さんのお腹の中から外へ出てしまえば、人体のかなめは他の場所へ移動するのが至当でしょう。口では不可です。口唇にはしよちゆう忙しい用があります。口とは反対側、そこそわりかた閑であり、したがってわれわれの『内部』への関心の門

戸だとしなければなりません」さらに、先生自身の、たくみな云いまわしを引けば、「特に腸管に惹かれるとしたら、それはあなたが空気を入れるときにつかうゴム管とおなじようなものです。つまりクダです。あなたがあおむけに寝て、曲げた脚の間から出ている長いクダが腸の一端のようにみえるとき、それはある真実を物語っているようです。いやそれは感覚的に、みぞおちの下のあたりまでつづいていなければならぬでしょう」衆道の夢ふかき春の宵ですら、肛門のA感覚の深度はてのひらの長さくらい、つまりP感覚の限度ですけれども、みぞおちの下から切り裂かれる幻想のなかでは肛門とその地点とは、めぢはるかなる関門トンネルと化するにそういありません。さえぎるものがないのです。そしてトンネルという以上、いくら大きくてもクダです。一般にP感覚という野暮な邪魔ものが想像力をおさえてしまいましたが、あなたの場合には臓腑という終点が最初に与えられているから、この距離はぐっと引き延ばされ『この横丁抜けられます』というこ



とになるのです」
ここに見られるのは、「人体のかなめ」すなわち「『内部』への関心の門戸」としてのこう門から、腸のクダというトンネルを通して、お腹の方に出てゆく経路です。この場合は、内臓は中から盛り上り、盛り上った腹は内側から裂けるのです。外側から切りさくのは、中からとび出そうとしている内臓に、いわば、たんに手をかしてやることにすぎません。

である先生はこのうち、体の外にある部分をおとりにしました。マゾヒストである私は体の中にある部分をとりたいと思います。サジズムとマゾヒズムとの関係は、P感覚とV感覚との関係に似ています。どちらも相対応し、おぎない合い、両方合せてはじめて完全なものになるという点で、私がたった今こしらえたA感覚の輪に似ています。その輪は、私のこう門とお腹の皮とをつらぬいていて、体の外にある部分は、私の両脚の間を通過してまんまるく空中に浮いており、それは吾妻先生には見えますが、体の外にあるので私には感じられません。残りの、体の中にある部分は、私の腸のトンネルを通過して私の体の中を

さしつらぬいていて、これは私には感じられませんが体の中にあるので吾妻先生には見えな
いのです。P感覚とV感覚との関係もこれと
おなじことです。P感覚とV感覚とはおそら
くことになったものでしょうが、どういう風
ことなるかと聞かれても誰も答えることはで
きません。P感覚とV感覚とは、おなじ人間
によって感じられることが決してできないか
らです。私は女ですから、V感覚とはどんな
ものか知っています。しかし、まさに私が女
であるという理由から、私はP感覚を知らな
いのです。マゾヒストにはマゾヒストとして
の独特の感覚があります。それは、打たれた
り、しばられたり、切りさかれたりする苦痛
です。体に生々しく感ずる、どうしてもごま
かすことのできない、痛さ、苦しさです。サ
ジストにはそれがありません。サジストは、
相手が苦しんでいる、痛がっているのを見る
ことによって、その見るのが、精神に何ら
かのよろこびを与えるのです。私が、私の、
あらゆる人工的手段で膨満させられた腹を見
ることに、ご指摘のようにサジストとしての
心のよろこびを感じるとしても、同時に私は
私の膨満した腹の内部で、それとは別に、私
だけに感じられる、マゾヒストとしての肉の
よろこびを感じているのです。

吾妻先生、先生によってひらかれたA感覚

の分析から、私は私なりに考えなおしてみ
ることによって、私が先生の「裏返し」のA感覚
をもう一度「裏返し」にするという失礼をお
許し下さいませ。先生はサジスト、私はマゾ
ヒスト、だから私は、先生の分析をもう一度
「裏返し」にしたいという欲望をおさえるこ
とができないのです。しかし今度は、体の表
と裏とを「裏返し」にするのではなくて、体
の外側と内側とを「裏返し」にして、今まで
体の中に秘められていて目で見ることのでき
なかった部分を、えぐり出して、白日のもと
にさらして見ようというのです。私の、膨満
したお腹の中に秘められている「A感覚の秘
密」を、私のお腹を立ちわって、お腹の中の
どろどろしたものをすっかりぶちひろげてみ
ることによって、つかみ出したいと思うので
す。みぐるしいすがたをお目にかけることを
お許しただきたいと存じます。かしこ

吾妻先生

羽村京子

二

ところでもう一度「A感覚の輪」をとりあ
げてみましょう。それは輪ですから、はじめ
もなく、おわりもないものです。どの点から
出発しても、一回まわれば、またもとのおな
じところにかえってきます。しかし、よく見
ると、ちゃんと、はじめがあり、おわりがあ

るので、吾妻先生の場合は、こう門から体の
外に出て、体の外にある部分をたどり、お腹
から体の中に入っていく、私の場合には、こ
う門から体の中に入って、体の中にある部分
をたどり、お腹から体の外に出ていきます。
こういえば誰でも気がつくように、この二つ
の場合は方向が逆なのです。おなじことを別
の言葉でいいかえてみると、先生にとっては
こう門の出口で、お腹は入口なのに、私にと
っては、こう門が入口で、お腹が出口だとい
うことになります。もっとつきつめていって
みれば、体の外にある部分をたどるか、体の
中にある部分をたどるかということが、こう
門を出口として見るか、それを入口として見
るかという、第一歩においてきまるとい
うことです。

このこともやはりP感覚とV感覚、サジズ
ムとマゾヒズムとの関係に似ているよう
です。P感覚はふきだす感覚、体の外に投げだ
す感覚です。V感覚は吸いこむ感覚、体の中
にとりこむ感覚です。スカトロジョーを例にと
ってみれば分るように、サジストのこう門か
ら体の外に出てきた大便を、口から体の中
に入れるのがマゾヒストです。私の場合にはち
うどこれの逆です。私はマゾヒストですから
サジストの口から体の外に出てきた空気を、
こう門から体の中に入れてもらうのです。だ
から、P感覚が男性的なものであり、V感覚

が女性的なものであるとすれば、一方に、男性——P感覚——サジズム、という系列と、他方に、女性——V感覚——マゾヒズム、という系列ができ上ります。この公式にしたがえば、男性のサジズムと、女性のマゾヒズム（ドイツ語流の厳格な性の区別をするなら、Masochistinの場合）は、厳密な意味では、「性倒錯」といえないことになり、せまい意味の「性倒錯」の中には、女性のサジズム（Sadistinの場合）と男性のマゾヒズム、および、多かれ少なかれこれらを前提とする同性愛（ソドムの愛とレスボスの愛）とのみを含めるべきでありましょう。

だから私は、「肉体のボタン孔はめこむ丸ボタン」の着想はきわめて重要だと思うのです。「『入れる』ことは敢て衆道の大家を必要としない通俗的な思いつき」かも知れませんが、だからといって、吾妻先生のように「ただ、彼は『入れる』のに私は『当てる』のですが、これは用途の相違と思えばよろしい」と簡単に、かたづけしてしまうことはできないように思うのです。「入れる」、または「はめこむ」ということは、P感覚によっても、V感覚にとっても重要なことで、それはまた同時に、A感覚にとっても重要なことだからです。ところが、入れたものはかならずどこから出なければなりません。入れっぱなしでは、例の、イソップのお話に出てくる

カエルのように、最後にはお腹が破裂してしまふからです。私の場合にはたしかに、どんな体の中に入れてしまつて、ついに「お腹をさく」という形でなければ体の外に出すことができないという、このカエルとおなじようなところがあります。しかし、どのようなむごたらしい形をとるにしても、いずれは出さなければならぬのです。ふつうには、入口は出口であり、出口は入口であるという形をとります。おなじように、したがって、サジズムはマゾヒズムであり、マゾヒズムはサジズムであるということができるかも知れませんが、P感覚は、相手の中に入つて、しめつけられ、くい切られるというマゾヒズムを伴っています。V感覚は、相手を自分の中に入れて、しめつけ、くい切るといふサジズムと結びついていきます。このように見てくると、私がたった今、頭の中でこねまわしてこしらへ上げた公式は、ものの表面にあらわれたところだけを、たんに形式的になでまわして分類しているにすぎないことが分ります。たとえば、明らかにサジズムの一種であるカンニバリズム、すなわち、相手の肉や内臓をたべしてしまう、自分の体の中にとり入れてしまう場合や、それに対応する、私のように、自分の体を料理し解剖されて、相手にたべられてしまいたいというマゾヒズムなどは、この公式にあてはまりません。もちろん私は、この

公式が全面的にまちがいであるとは思いませんが、この公式がなぜ成りたつのか、したがってまたこの公式はどこまであてはまるのかということを知らなければならないのであります。このことを知るためにも、私たちは、入口のあたりをうろろしているだけでは何もつかめないで、勇敢に体の中に入り、A感覚の「裏返し」の構造をしらべる必要があります。

ところが、いったん体の中に入ってみるとくねくねとまがったまっくらなトンネルが、いつはてるともなく長々とつゞいていきます。どろどろしたものがいっばいつまっています。何がどこにあるのか、どこがどうなっているのか、まったく途方にくれてしまふにちがひありません。だから、どうしても、私は私のお腹を立ちわって、中にいっばいつまっただろどろしたものをひきずり出して、ひとつひとついいいにひろげて、ゆっくりと吟味してみなければなりません。私の分析にとって、内臓は、「臓腑」という終点が最初に与えられているのではなくて、分析の「始点」として最初に与えられるのです。

まあおきがたいへん長くなつてしまいました。ではいいよ、羽村京子のお腹を、そのやわらかいところからそっと切りひらいてみることにいたしましょう。

（未完）

畸型への愛着

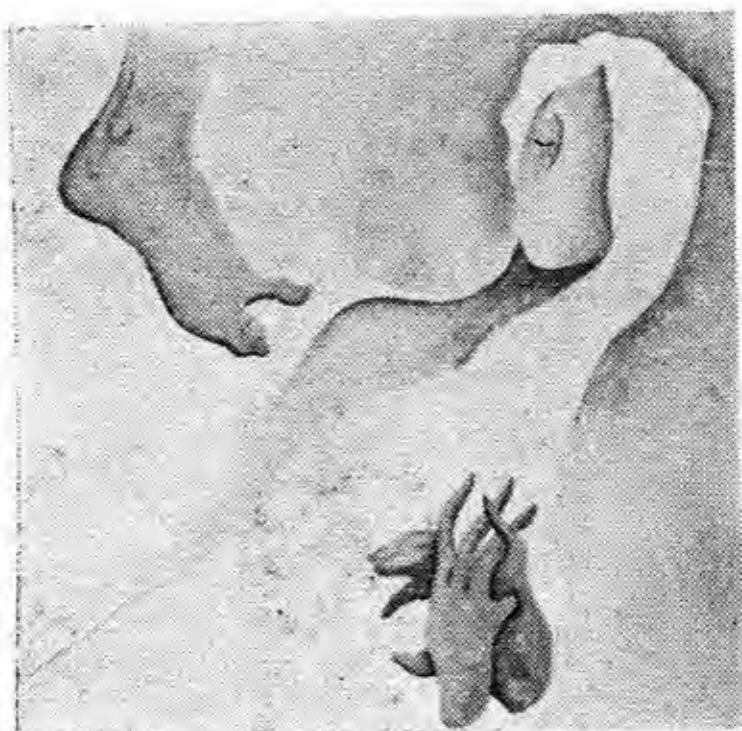
津久井 毅

(一)

私は畸型に対する偏執的な愛着をもつ者ですが、世の中にはきっと同好の士があると思いますので、私の所見や体験を話させて頂きたいと思っています。

私は青年の頃から畸型の女性に心が惹かれて、通常の五体の揃った女性には殆ど関心をもちません。とりわけ美貌の均勢のとれた女性には却ってある種の反感をすら唆られました。つい白い眼で睨みつけるような失礼な真似をも敢てすることが度々ありました。そんな塩梅ですから私の青年時代は、畸型の女性との恋愛ばかりでした。

したがって私は畸型の女を娶りたいと心ひ



そかに願望しつつづけてまいったのですが、両親や親戚の強硬な反対と圧迫で私の願望は遂に実現しませんでした。私は澁々ながら現在の妻と結婚したのです。妻は身体の正常健全な至って明朗な性質で私に対しては誠心誠意をもって尽してくれるのです、それこそ一点

の非のうちどころのない理想的な良妻賢母と云えるのですが、それにもかかわらず、私はどうしても全身的な愛情をこの妻に注ぐことができません。妻は世間知らずですから、夫婦の愛情というものはこういうものだと思ひ込んでいるようです、私はその妻の心をひとしお不惑に感じるのです。

折節に、妻が交通事故か何かで跛にでもなってくれたらよいのになあと思うことすらあるのです。五年前に妻が眼病を患いました時にも、ひそかに失明することを神かけて祈りました。思えば空恐ろしい妄想でございすが、それほど切なく畸型への愛着を抱いている私なのです。

こう云う私自身は身体健全な男子でございます。スポーツも私の身体の鍛練に役立つたのでしよう、身長は五尺四寸、体重十五貫、五官器は正常、水泳は水友会教師、剣道は三段とまあこう云った私です。

私が最初の恋人の跋で年上の女と結婚させてくれと父親に懇望しました時は「莫迦な、何を云うか」と頭から一言の下に叱られてしまいました。その次に私は兎唇の恋人を是が非でももらってくれとせがんで服毒騒ぎまで起しましたが、結局否決されてしまいました。それでも私はなお屈せずに、それは恋人ではなかったのですが小学校時代から識っている近所の僂^{せむし}の娘を妻に迎えてくれと申出しました。さすがに父親も私の畸型への執着癖を知って驚いたのでしよう、あわてゝ現在の妻と否応なしに親の権威で結婚を強いられたのです。

私は失望し、悲嘆に暮れました。過去の二つの恋愛を永遠に捨てた私は、生涯に畸型の女を娶ることのできない運命の鉄環の中に閉じ込められてしまったからです。考えてもみて下さい、この世の中には、正常平凡な人間は海にこぼれるほど陸地には氾濫しているのです。それに比して畸型の人間—そのうちで

も女性の数は極めて小数で、例えば、指の数が四本であったり六本であったりする者は一万人に対して一人の率でしか生れません、また、兎唇の者は千人に一人しか生れないのです、これは医学者のアシネルの統計だそうですが、それほど畸型は人類社会にあっては珍重に価するものです。この貴重な畸型を、ありふれた正常人共が、嘲笑したり、軽侮したり、爪弾きしたりするのは、明らかに価値観念の倒錯を来しているのではありますまいか。

実際、正常な女なら掃き溜に捨てるほどある現代の日本です……。いやこれは大変な失礼を申しましたが、しかし実際のところ盲女、跋の女、兎唇の女、僂^{せむし}の女などは、そうざらにはありません、しかもその数少いうちから、生涯連れ添う妻を探し求めるとしたら、いかがです、実に容易ならぬことであることが解って頂けましょう。同時にその得難き恋を失った私の悲傷落胆の程も推察して頂けることと存じます。

(2)

愛とは何ぞや—これは難しい問題でございます。私達は宗教的な或は哲学的な、また倫

理の愛については知らなくとも、情感的には愛の何たるかをよく知っているのです。

夫婦の関係は、愛の結ばれが根本となるものでございましょう、然るに、結婚にあたって美醜ということが、実に大きな比重をもつて撰択を左右するというのは、いかなることによるのでしょうか。

造型上の美というものは、青春と共にやがて消え失せるべき運命をもっております、色の白かった肌も齡と共に黝んでしまいます、明眸にも汚いヤニが溜るようになります、皓齒もやがて虫歯になったり抜け落ちたりします、

姿がよくて五体が揃って美貌である女—それが男性の望んでいる妻のモデルスタイルであると一般には考えられているようですが、それでは願うところの完全なる女があるかどうかと云うと、私はそれらの願いをもつ人の無知を嗤いたいのです。

そもそも人間は完全でないのです、誰でも不完全なものなのです、むしろ不完全こそ、常態である、こう申してよいと思われのです。それには人間の胎内における発生原型を考えれば、一目瞭然です。人間の体は左右別々のものなのです、その半側別々のものが

一定の發育過程を遂げて一体のものとして癒合密着したのです、だから、お腹の真ん中にその証拠の白糸線が縦に走っております。顔も正中線から真つ二つに分れて、左右別々のものが接合したのです、下腹部もそうなら、性器官もその通りです、殊に生殖器のあたりは「中胚葉の下極癒合」と云って複雑微妙な結合によって形造られているのです。

この左右別々の半側は、決して厳密に云って同寸同型とは云えません、少しずつ違うのが当り前で、右のプロファイルと左のプロファイルでは人の違うほどの変化が見られます、実はこの不揃いのところに造型上の妙味があるのです。

型に嵌めて造った能面では変化も面白味もありません、整った身体や、整った顔は平凡で平板で味もそつけないものです。少しは人並より変った線や、彫りの深さや、形が欲しいものです、あのおもちやのキューピーさんが愛好されるのは、平板でないからではありませんか。

跛や、兎唇や、偻僂のような畸型は、たしかに未来派的な造型の変化を示しているのです、そこに私を執念させる審美の妙があるのです。

そうです、私は畸型を美と感じる者です、美なるが故に、これを受愛するのです、しかも畸型の美は終生的であります。人は必ず相手の美しさにうたれぬと、純粹なる男女の愛をもつことはできません。儚い一過性のまぎらわしい美容に迷うと、やがて青春の去り行くに従ってその通俗美は雲散霧消して、ひどい失望と倦怠に襲われることになるでしょう。

私の畸型への愛着は決して単なる好奇心からではなく、深く人間性の本質に触れたところの美的感情と繋っているのです。今や私はすでに妻子ある夫であり父である以上、現在の夫婦生活を守るよりはかたがたいせんが、依然として畸型への愛着は断ち切ることが出来ないのです。

私は肩が凝りますと盲の女按摩を呼ぶのを常といたしております。そして盲女のカンの良さや、手さぐりの面白い仕種や、その顔に漂えている深い陰影を眺めては娛しみ、殊に何か感動したことがあると、首をかしげて白眼をきよろりと剥くときの盲女の表情を見ると私の情感が煽られるように燃え立ってまいります。こうして私は慰められるのです。

また、私は沢山の外科医書を需めては、畸型の頁をくって、その図解に見惚れてしま

ます、そんな時は独り幻想を愉しむことにいたしております。

もっとも大きな楽しみは、行きずりにばったりと畸型の女と出会った時です、盲の女なら、私は何を構わず、温く手を引いてやりま

す、跛の女ならそれとなく尾行して、あの奇妙なりズムでひよっこり、ひよっこりと左右に高下をつけて歩く恰好に淫らな空想を愉しみながら見惚れるのです。悪いことに私は跛の女を見ますと、すぐその女を頭の中でヌードにしてしまうのです。一見して奇怪と思える腰の線が、股関節部でくの字型に歪曲した状景を幻想すると、身を灼き焦すばかりの情慾を感じてしまいます、これは私の最初の跛の恋人のことを連想するからでございます。殊に正常な方の筋肉の盛り上った脚と、脱臼した方の痩せ細った脚のコントラストに匂っている不調和の調和が、私の異常感覚をしきりと掻き立てるのです。

近頃、兎唇の女を道では滅多に見かけません、これは整形外科が進歩したためなのでしょうが、私にとっては、とても淋しいことでございます。

こうして私は僅に自分の愛着の感情を紛らせておるのですが、やはり青春時代の優柔不

断さが悔まれてなりません。次に私はその悲恋の断章を綴りたいと思います。

(3)

「姉さん」と呼んだその女は、私の無二の親友、松木昇の姉でした。松木は胸を患って死にましたが、死の直前、松木は私に「僕が死んだら姉の相談相手になってくれ」と頼んでそれだけが今生の気懸りであったように、私が頷くとそれを見て安堵して死んで行きました。姉の一枝はそのとき三十歳の独身でした、生れつきのあの先天性股関節脱臼の、それも整復不能のひどい跛でしたので、一生を孤独で暮す心定めをしていたようです。彼女は幼少の時から裁縫が好きだったのですから、大阪でも有名な男仕立の師匠について勉強しましたので、めきめき

腕が上ってその頃は裁縫塾を開いて若い女子に裁縫を教えておりました。評判もよく二十人程の良家の娘さんが通ってきておりました。

た。

松木の死んだあと、私は彼女を「姉さん」と呼んでいました、一枝は「あなたを昇のよ



うに思います、姉弟同然仲良く暮したいと思います。末長く交際しましょうね」と云ってむしろ私のことを姉らしい心遣いであれこれと面倒を見てくれました。私と彼女の、他人でありながら親身も及ばぬその友愛については話せば尽きぬことですから省きますが、彼女も私もいっしか熱烈な恋情を抱いていたのです。私の二十歳のときでした。私は一枝に恋してはじめて畸型の美しさを発見したのです。彼女はひどい跛でしたから、座敷の中では、兎のようにびよん、びよんと跳ねるような恰好で歩くのでした。それを見ていると急に突き転して着物を割ぎとってやりたいような衝

動に駆られます。

さぞかし一枝はあの畸型の股関節の脱臼した部分を露出して私に見られることを、死ぬほど恥しいことだと思ふに違いないと想像しますと一度に青春の血が立ち騒ぐのです。

見たい！触れたい！という願望が切なく軋りましたが、もうどうにも抑えられなくなつて、ある日、私は勇を鼓して一枝に求愛しました。彼女はどきまぎして「あとで返事をさせて下さい」と俯向いてしまいました。

一枝の、彫りの深い横顔が月明りに浮んでいるのは名工の手になる陶磁の像のように見えました。夜風がさあーと川面から吹きつけてきて、突き出した手摺りにもたれて涼む二人の肌を快く弄りました。そのたびに軒の風鈴がちろりと鳴って涼を呼びます、部屋の電灯も消えてあたりは静かです、ここは立売堀川畔の一枝の家でした。

ぎい、ぎいとオールの音が風に乗って聞えてきてボートが一雙、舳の提灯をゆらりゆらりとさせながら下の川を流れるように遠ざかって行きました。

「いっぺんボートに乗って見たいわ」

そう云って一枝がはじめて私の手を熱情的に握りしめました。私はずきんとして暗い部

屋の中で顔を赤らめながら、躍る胸を抑えて彼女の顔を見ました。

「この間のお話ね」彼女もいつしか私を瞞めて口を開きました。

「あなたの愛を私が受けたら、いったいどうなるのでしょうか」

それが悶えた挙句の切ない言葉だと、私は直ぐ解りました。

「一枝さん、結婚しましょう」

私は心の中の激情を吐き出すように云いました、彼女は思いつめた私の語感にはッとしたらしく、まじまじと私を凝視めて、

「だって、私とあなたが結婚するなんて誰が許してくれるのですか、私はこんな不具だし、それに十歳も年上でしょう、私はあなたの愛をどれだけ心の中で嬉しく思っているかも知れません。しかし、将来は不幸になるよりはかに道がないのよ、それがあまりにもはつきりしているんですもの、二人はやっぱりいつまでも姉弟の心で交際しましょう、それが二人の天命ですわ」

静かな話しぶりでしたが、悲恋の情が言外に惨み出て、私の心を愁いの中にひたと濡しました。

「嫌だ、一枝さん、僕は貴女と一生を共にで

きない位なら、死んだ方がましだ」

真実、私はそう一途に感じていました、彼女は苦しうに、そっと私を抱き寄せて「そんな無理を云うもんじやないのーね、諦めて、わたしだって苦しい想いで諦めようとしてるんです、解ってくれるでしょう」

「嫌だ」

私は愛情とも憎悪ともつかない、はげしい憤怒に似た感情で、一枝の躰にしがみつきました。

「一枝さんは、実際は僕が嫌いなんだろう、僕の恋を拒絶するためにーそんなうまい口実を作ってるんだ、きつとそうだ、一枝さんは僕が嫌いなんだ！」

私は嗚咽して身をもがいて叫ぶように云い云い、彼女の躰をくいくいとしめつけました。

彼女は私の半ば狂ったような痴態に、同じように溺れかかる弱さを見せて

「ね、ね、そんな無茶を云って困らすもんじやないわ、わたしがどれほど愛してるかを知ってる癖にー」

と怒じながら云いました。私はその時、ふと今だ、この機会に一枝を完全なわがものにしてしようという決心が急に迫ってきました。恐

らく彼女は私の無法に抵抗するだろうが、一枝を三十の処女から女にするのは今だ……と云う切迫した想いが一閃して走りしました。

そうすると、いつも幻想する、一枝の深く秘している畸型への誘惑が、高潮のように襲ってきたのです。

「一枝さん、僕と、結婚する決心をして下さい」と必死で喘ぐように云って、私は彼女をすっぽりと抱え込んで唇を奪ってしまいました。それは熱い熱い唇でした。

「無理よ、無理よ」

一枝が、私の胸の下からあえやかに呻きつつ云っているのが、私は聞いたようにも思いますが。その時、風が無情に風りんを鳴らしていました。

(4)

一枝はそれがあってからは、私の前で畸型の局部を見せることを少しも恥しく思わなくなりました。

二人でよくあやめ池（奈良の近くの遊園地です）の温泉に行きました。ある時は、私は軽々と彼女を背負って遊園地を歩きました。メリー・ゴー・ラウンドでは彼女を抱えて跳躍ボートで池の中にしぶきをあげて飛び込む

ようなスリルを愉んだり、児童のように木馬遊びをしたりした挙句に、密月のような温泉旅館での一夜を明したりしました。一枝は足の不自由なために外出を好みませんでしたからこんなことはその生涯で初めてのことでした。

ホテルでの夜などは、一枝は大胆にも私に毀れたような股関節を露わに見せました。私は恍惚とした感じに浸りながら、長い時間、一枝の畸型の局部を撫で擦るのが癖のようになっていました、こうしていると、凸凹の不正不規な骨の配列の奇妙な感触が擦るような刺激となって、私は甘美な異常感覚の夢の泡の中にくるまっていつてしまふのでした。あるとき、私は蕩然としていつものように按擦の夢を愉しんでおりましたが、不図、どうしたはずみか手で彼女の尾椎骨に触れてはッといりました。

よく按擦してみますと尾椎骨が二センチほど飛び出しているのではありませんか、畸型だと私は胸をときめかせました。一枝は妙な表情を泛べて

「なんでしょう」

と不審そうに訊ねました。

「これは尾骨ですね。大昔の人類には尾があ

ったという痕跡ですよ」

「誰でも私のように突き出てるの？」

「いいや、あるにはあるがこれほどではありません。珍らしいですね」

「いやだわ、わたくし、昔の動物に退化したんじゃないかしら」

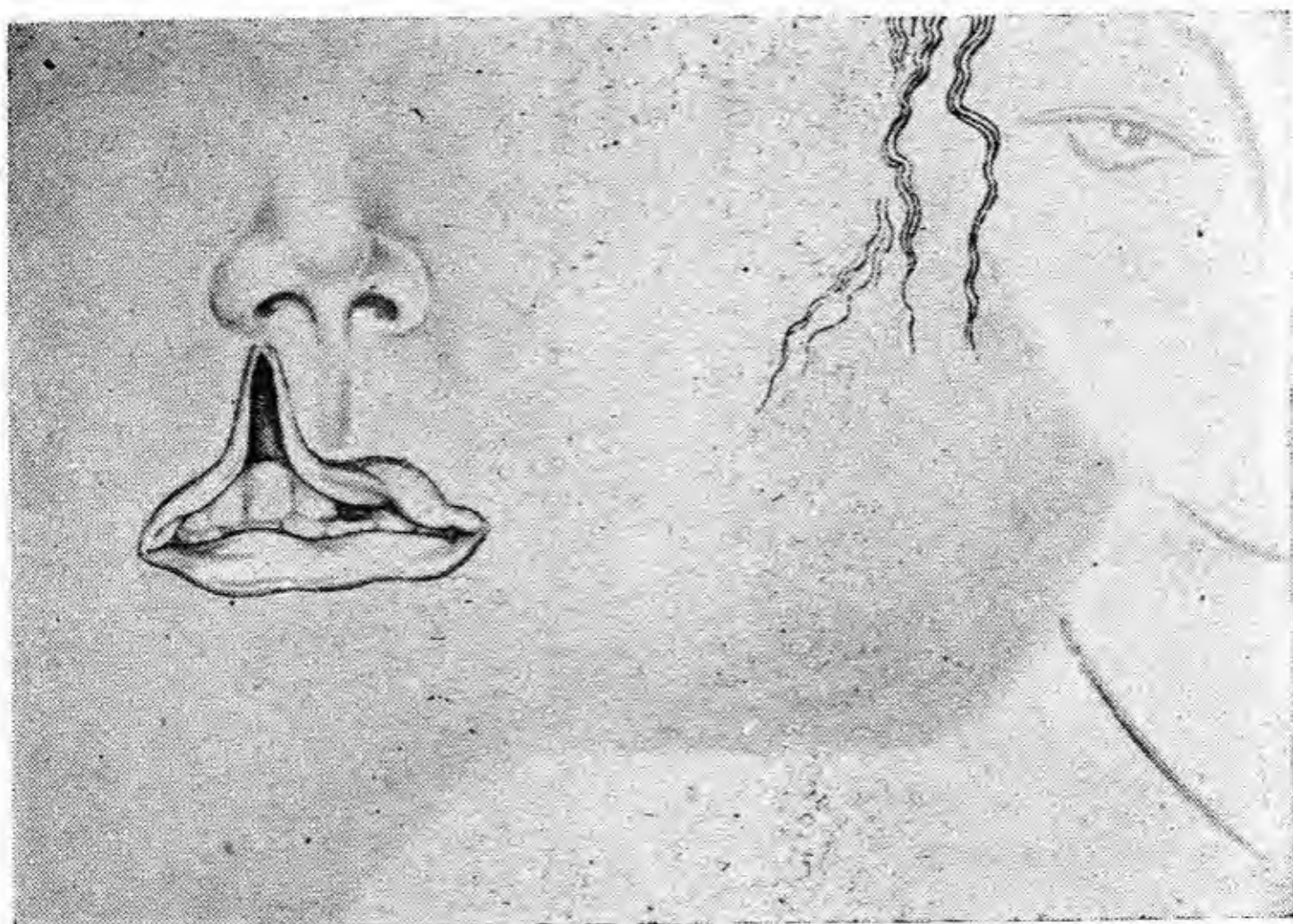
「どれ、見せてごらん」

私は一枝をころりと俯向かせてのぞき込みました。そこにはテリアの尾のように短い尾骨の先端が、にゅッと出ているのを発見いたしました。それはちよっと潜望鏡のような感じでもありました。私がその尾骨を、くりくりと珍らしげに左右に動かしますと、彼女は「いひ！」と奇妙な声を上げて身体をしなうようにしました。

ああ、私の性慾は完全に、一枝の畸型と結びついてしまったのです。彼女もいつしか、自分の畸型部を私の目の前に露出することに興味を覚えましたし、私の按擦と、尾骨の顫動にはさすがに声を上げてしまふのでした。こうした二人の間柄は、もうどんなに隠しても隠しきれぬものではありませんでした。周囲の者のお節介と、私の両親の猛烈な反対が私たちの上に冷酷に掩いかぶさってききました。

彼女の親戚側と私の両親とは内々相談した結

家に住みました。



果、遂に塾を閉鎖して一枝を遠く中国の岡山の縁者のところにやり、私も嚴重な両親の監視下におかれることになりました。

一枝は切々とした別離の手紙を岡山から寄越しました。私とその手紙を握りしめて、幾夜泣き悲しんだことか御想像下さい。その頃は若い者に恋愛の自由がなかったのでございます。ちようど「枯すすきの唄」の流行した時分のことでしたから。

(5)

一枝との恋に破れて、私は数カ月は放心したように虚無な生活を送りましたが、ふと古典研究を思いついて「日本固有神道の呪術について」の長篇の論文をまとめるために、大軌沿線の「花園」に家人と離れて私独りが一軒の借

私の研究論文は、大阪時事に載りましたから或はその道の方で覚えておられるかも知れませんが、私はこうして失恋の傷手を研究でまぎらせておりました。一年ばかり経ったある日、私の隠棲同様の家を訪れてきた妙齡の女性がありました。

突然のことで私もまごつきました。何しろ神道の研究というような年寄り臭い仕事をしているのですから、妙齡の女性にはほとんど縁がない筈でした。私はその女から一通の紹介状を受け取りました。友人の林からですが、文面でこの娘さんは林友吉の奥さんの妹だということになりました。故郷から上阪して、都会で将来自活の道を開きたい希望なので就職の世話を頼む、という風なことが略歴といっしよに書いてありました。

読み終ってから、私は心のうちで、若い女の世話なんか御免蒙りたいと思ひながら、ひよいとその娘―千歳さんを見た瞬間ぎぐつとしたものです。

つゝまじやかな恥らいの中に、ちらりと見せたそれは実に見事な兎唇でした。ちようど鬼が牙をむき出したような、一種、凄惨な趣が漂っているのです。

とたんに私は心の中で自分の畸型執着の願

望が躍り出そうとするのを知って、あわてて眼を外しました。

この私の心の動きが、千歳さんには、軽蔑しているように映ったのでしよう。不具者特有の悲しい表情をして見せました。私はまたあわて、にっこり笑って見せながら

「及ばずながら尽力しましょう」

と言いましたので、はじめて千歳さんにはツと微笑を返しました。そのとたんに、私は二度の驚きを喫したのです。実際その微笑の美しさは、梅の花の笑うような天真さと高貴さに香わしく匂っていたのです。私は今までにあのような微笑を見たことはありませんし恐らく今後も見ることがないでしょう。

しかも、笑いを消した後の鬼気のもった兎唇の醜怪さとの明暗の色調の変化はどうでしょう。美と醜の二つの面を神業のような早業ですり替えたような、鮮烈な印象は到底忘れることのできないものでした。

「美しい」私は思わず呟やかずには居れませんでした。

「え？」と千歳さんが、怪訝に私を見守りましたが、私はなんでもないように「いづれ僕の方から職のあり次第連絡しましょう、上っ

だしますので、ここで失礼します」

私は心ならずも、そう云って千歳さんを帰しました。まだ、私の心には一枝への思慕がゆるぎもせず燃えていたのです。

私はその日以来、千歳さんの兎唇が忘れられなくなっていました。そこで早速、その翌日から、千歳さんの就職に奔走しましたが、会社の事務員なんかには兎唇が崇って「それや困るな」とすげなく断られました。私は汗みどろで諸処方駆けずり歩いてやっとさる私立の文化学院の女事務員に売り込むことに成功しました。

早速、その由を、千歳さんに通知しますと千歳さんから美しい字で私の奔走を深謝した手紙がきて、その末尾に

醜い兎唇の私のような女は、世間が相手にしてくれませんが、どんなにかお骨折り願ったことでしょうか、私の心には先生が肉身の兄のように思えてなりませんと書いてありました。

(兄のように思う?) 私は手紙の文句を呟きながら、信頼は恋の糸口であることをふと

数日ののちの、夕まぐれでした。千歳さんが訪ねてきました。いずれは訪ねてくるもの

と私も心待ちにしていたことですので、今度は座敷に請じました。

二人の話はすぐほぐれて行きまして、お互いに親しい口の利き方をするまでに緊密になりました。私は思い切って「僕はあなたの、その兎唇に愛着します、と云えばあなたはか

そんな前置きで私は一枝との恋のいきさつを話して聞かせました。はじめはきよとんとした顔付きの千歳さんも、だんだん眸を輝かせて私の話に耳を傾けました。

「僕は畸型の女の人に安価な同情を押し売りするものではありません。そう生れついたことに卑屈感をもつのは、天意を知らない愚さのためです。畸型の美に憧れる異性が世の中にあることを信ずれば、何を怖れ、何を思い患いますか、勇ましく生きる道があるのです。僕はたしかに畸型を愛着するうちの一人なので

「先生は、私のこの兎唇に愛着をお持ちにな

れて？」

「持ちますとも、僕はあなたを見た日以来、あなたの唇の畸型に青春の悩みを感じていたのです」

「ほんとうでしょうか、それが先生の御本心なら、わたし命をかけた恋をしましてよ」

「むろん、僕は自分の言葉を許りません、一枝は年令的に自分から消極的になってしまったのです。あなただったら、若さの力できつと私との恋に勝利の道を進んでくれると信じます」

「先生—わたくし、先生を信じます」

千歳は、思い定めたように身を投げかけてきました。私はわくわくするような期待で、その免唇の唇に私の唇を押しつけたのでございます。

千歳は何のためらいもなく私のものになりました。私は惨酷なほど千歳のひどい免唇をいじり廻したり舐めまわしたりしました。千歳も今はすっかり安心して、口を開けてみせたり、すぼめたり、笑ったりしました。

そのたびに免唇の変化が奇妙な百面相のように千歳の表情を変えてしまうのを眺めっていると何度も血潮が狂わしく騒ぎました。

(6)

千歳はある日、色々な跛の絵を書いてもっ

てきて—

「わたくしはあなたを慰めるのが、わたしの生きることの全部だと思いました。もし、あなたが私に飽きる時がきたら、わたしは汽車に轢かれてこの足首を切断して跛になるつもりなの、千歳は決心していますのよ」

と真実の色を泛べて云いました。そしてその画は自分が跛になった時の想像画だと申しました。

私は轢断を夢想する千歳の、深い愛情に胸うたれながら、ふとそれが実際に起りそうな気配を感じてじつと跛の女の画を眺めているうちに、逆巻くような情慾の、荒々しい波の中に沈んでいきました。

やがて私は研究も一段落したので、父親のところへ帰って、千歳とのことを話しましたが、父親が驚いたように私を見て

「穀、お前はどうかしているんじゃないか。跛の女と恋をしたり、今また免唇の女とおかしくなったりして、お前は立派な完全な男なんだよ、どんな嫁だって貰えるように親は育てたつもりだ。そんな免唇の女のこととは思いつめて早くいいお嫁さんをもらって親を安心させてくれ」

元来が男性的な強気な父親が、いやにしんみりとして弱々しい口吻をしたのは、父親の年のせいであるのだろうかと思うと、私も

あまり強硬に主張することもできませんでしたが、決して屈服したわけではありませんでした。

千歳の問題は、いろいろな形で家族の紛糾を惹き起しましたが、父親は、

「片輪の嫁だけは思い止めてくれ」

とどうしても承認してくれませんでした。そんなことで一年ほど経ちますと、千歳は前途に失望を感じたのでしょうか、睡眠剤を叩いて自殺を計りました。

千歳はなぜ一緒に死のうと云ってくれなかったのでしょうか。私は悩みに悩んだ挙句、到底畸型への愛着を実現することは私の環境においては出来ないことだと悟りました。私は再び千歳との恋を捨てなければならぬ破局の感傷に耐えることができなくなって、ある晩秋の一日、逃げ出すように大和路に旅をして立田川の畔で服毒したのです。

この話は今は懶い想出でございますので、詳しくは申上げぬことに致します。ただいまも、私の心の傷は、果しなく疼くのでございます。千歳も私も死に切れなかったのは、俗に云う因業の深さからでしょうか。

世の中には、私と同じように畸型に愛着する男女がある筈です。願わくば私のように周囲の圧力に負けないで愛の強さに一筋に生き抜いていたいただきたいと思うばかりです。

縛り絵マニアの記録

諏訪俊昭
文と画

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

私が縛り絵の不思議な魅力に、憑かれるようになったのは、何時からの事なのだろうか。遠い月日のウェールの彼方に、夢の様に薄れて了った子供の頃の思い出の中には、その原因となったショックと云ったものは、別に何も思い出せないのであるけれど。――

小学校に入学してから間もなくの頃、おそらく三、四年の頃でもあったろうか、何かの少年雑誌に、前髪の美少年が、高手小手に縛られた挿絵が載っていて、それに何か異様な感じを持ったような覚えがあるが、今から思えば、其の時分にはすでに私の血の中に縛り絵に対する興味が芽生えていたのであろう。

その頃講談社の少年倶楽部に、吉川英治氏の神州天馬俠と云う読物が、山口将吉郎氏の挿絵で載せられていて、武田の遺児伊那丸が、敵方のため捕えられ縛られる、あの高畠華宵ばりの美しい場面などに、少年の胸をときめかしたのは、今でもはっきり憶えている。

その後やはり講談社のキングに、伊藤彦造氏の挿絵で万花地獄という小説があった。私は彦造氏の絵が大好きで、父が毎月購入するのを待ち兼ねては、飛びつく様にして万花地獄の挿絵を探した。物語中、お妻やお吟、特にお吟と云う可憐な娘が、縛り上げられて身



悶えするところなどになると、もうすっかり
気に入って、それから何時の間にか、
縛り絵の対象は女に限られる様になったのだ
から、その時分のその道にかけての私は、相
当早熟であったに違いない。

だが、縛り絵に対する興味がハッキリして
くるにつれて、私の心には、サチズムに対す
る恐怖も次第に成長していった。

「サチズム」、その言葉の持つ不快な重圧
がやたらに私の心を不安にした。そんな残酷
な人間になると思うと全くやり切れない気持
になった。今から考えれば馬鹿な話である
が、当時の私は真剣であった。克己心によっ
て、身内の敵と闘う事が出来ると信じたので

ある。それから二十五六才
迄の私は、誘惑に負けては
縛り絵を蒐集し、又勇猛心
?を振り起しては、その貴
重な蒐集品を焼いた。そんな
事を二度も三度もくりか
えし、矛盾した二つの心の
斗争のうちに召集され、や
がて終戦となったのである
あの頃奇クがあつて、私
の心理を理解し、指導して

いてくれたならば、あの様な苦悶と無駄な努
力をせずとも済んだものと、失ったコレク
ションと共に痛恨の念を禁じ得ない。

蟬や、とんぼを無意味に殺す事さえ出来な
い私が、何故この様な好みを持つのであろう
か。

遺伝によるものなのか、それにしても父母
兄弟其のほか祖先の考えられる範囲では、ど
うも変わったことは見当らない。とすれば万人
にその素質のあるものが、何かのショックに
よって表面に現れた、と解すべきなのであろ
うか。とにかく縛り絵を愛するという趣味が
サチズムに類するものであろう事は、私も特
別に異議を唱えようとは思わないが、私がそ
の頃感じたサチズムという言葉の持つ響き
は、たゞ非常に不人情な、残酷な感じ以外の
何物でもなかった。この言葉の意味の解釈
が、私の感じだけのものであるならば、たゞ
ナンセンスとして片付ける事が出来ようが、
私の読んだこの種のすべてのものが、サチズ
ムを罪惡視し、又多くの人たちは、現代に於
いてさえ、ただサチズムの名の上に、必要以
上の残酷と非人道の汚名を負わせているので
はなからうか。

若し然りとするならば、私は奇クの読者の

大部分を占められる縛り絵マニアの人
たちを、いわゆるサチズムを以て呼ぶ事
には、声を大にして異存を唱えざるを得ない。

私が焼いてしまった蒐集品の中には、今で
も惜しいと思うことが少くないが、死んだ子
の年をかぞえるつもりで少々思い出して見た
と思う。

最近あまり雑誌に見うけられない伊藤彦造
氏をのぞけば、志村立美、富永謙太郎の両氏
が、現挿画壇の双壁であろう。

昭和十一、二年頃、雑誌日の出に連載され
た角田喜久雄氏の妖棋伝の題字カット、娘お
京がシゴキで後手に縛り上げられ、市松模様
の裾を乱して横座りになっている志村氏のも
の、これは写真版であったが、その構図と
云い、表情といふ、印刷技術と云い、私の好
みにピッタリした全く申し分のないものであ
った。

同じころ講談倶楽部の臨時増刊で明石鉄也
氏の怪盗浅間嵐には、やはり志村氏の作品
で、縛られた娘が、襲いかゝろうとする悪代
官の前に、柳眉を逆立てゝいる絵、これはや
ゝ仰角から見たものであったが、その美しさ
は、今となっても忘れ得ないものの一つであ
る。キングの子母沢寛氏の江戸五人男の題字

カット、娘お雛が猿轡を嚙まされ、細引で縛られている。その艶かさも無類のものであった。以上の志村氏の二作は、ハイライト版であったと思う。

最近の雑誌の挿絵は凸版が多いようであるが、たま／＼見受ける或種の雑誌の中には、写真版、ハイライト共に真黒で、何が画いてあるのか判断に苦しむと云う様なものがある。

凸版の多いのは読者の好みの変化に依ることも多いであろうし、写真版ハイライト版の印刷上の困難や、用紙の質の関係等もあると思われるので、一概には云えないけれども、一般に云って昔の様な優美さがないように思う。妖棋伝の絵の美しさの再現を望むのは、たゞ私だけの希望なのであろうか。

昭和十年頃のキングに、飛弾のある郡代が、美しい娘に横恋慕し、その娘に恋仲の若者があるため意に従わぬのを怒って、些細の事を種に、若者の両眼をくりぬき、娘を晒しものにした。娘は晒されたのを恥じて自殺し、若者は盲目の身に復讐を誓って手裏剣を修行し、精進の甲斐あってその手腕は玄妙の域に達した。彼は旅芸人の仲間となって恋人の仇を探し歩くうち、江戸でその郡代であった武士を探しあて、その両眼に手裏剣を放っ

て、無念を晴らすという筋の小説があった。その文中、娘が晒されるところを一寸拾って見よう。

「まだうら若い娘の身で、着物の前もつくるわず、後手に縛られたまゝ縄尻を橋詰の桜の木につながれて――」

さなきだに人出の多い花見時である。紅屋のお雪が晒されているというので、さしも広い中橋詰も、押すな、押すなで身動きも出来ないくらいだった。

お雪は始終うつむいて桜の幹にもたれていた。しっかりと括られた縄目から、胸、肩のふくらみ、乱れた髪を唇に嚙んだ風情など、絵にも画けない美しさで、お雪の一番美しかった日、いや一番の晴れの日はその時だったろうと云われた程、人々はただうっとりして、桜の幹につながれているお雪を見ておった。何しろ二十年の前の事なので、題名も作者も共に忘却してしまったし、文も少々違ったところがあるかも知れない。

とにかく、克明の描写、井川洗崖氏の挿絵と共に、縛られた娘を讚美した点において、当時出色の作品だと思っている。

前述の講談倶楽部臨時増刊には、怪盗浅間嵐の外に、半七捕物帳青山の仇討、井川洗崖

氏の縛り絵二を始め、小田富弥氏、谷脇素文氏、羽石弘志氏などの縛り絵七、八点があった。これ等古いコレクションは、自らきめた罪悪感から、悉く焼きすてゝ了ったが、今に思えば、まことに長恨の極みであると思ふ外はない。

私は縛り絵を責め絵とは呼びたくない。何となれば、縛りそのものが目的であって、責める必要が少しもないからである。美しい女が縛られている姿と云うだけで充分満足する事が出来るのである。

縛られる女が、本気になって抵抗したり、泣いたとしたら、私は恐らく逃げ出すだろう。縛ると云うことそのものが、責めであると思ふ人があれば、私はそれに反対しようとは思わないが。

長岡変一郎氏、升岡金吉氏、藤木仙治氏の映画に関するものを興味深く読んだ。そのうち私の見た映画で、奇ク誌上に現れていないものを少しひろってみたいと思う。

無声映画時代、たしか巨活の作品で、片岡千恵蔵主演の「愛染地獄」という映画があった。劇中、吉野朝子扮する美しい娘が、非人に誘拐され、荒縄で縛り上げられて、身悶えするところがあったが、少女の頃、西陣小町

と云われたという典型的な京美人の吉野朝子の、美しい姿は今に至っても忘れられない。千恵蔵の「渡り鳥木曾土産」で毛利峯子が縛られて転がされる。この時の毛利峯子扮する娘の後手は本当に高手小手と云う感じであった。

右太エ門の「足軽突撃隊」で、歌川絹枝が縛られる。この時は高堂国典扮する主人に挑まれて、後手のまゝ立上って逃げようとするが、逃げ切れずに襖を倒して転がって下う。正にあわやという所へ右太エ門が現れて娘を救い出す。このカットは時間的に云っても比較的長かったように思う。

奇クの前号の「縛られた女優たち」には載っていなかったが、娘形を語るとき、忘れてならぬ女優に伏見信子がある。

私は伏見信子が大好きであった。従って彼女の映画は逃さず見るように心掛けていた。「恋の黄八丈」では、本縄で馬上に縛られ、後ろから撮したカメラが、手首まで本当に縛られているのをキャッチしていた。

「明月蛤御門」でも、二度、三度後手に縛り上げられた。どちらかと云えば淋しい顔立ちの彼女が、両腕を後ろざまに括られているのは、無残という感じで、雨に濡れた海棠と云

う形容がピッタリするような画面であった。「幡随院一家」では、細引で縛られて柱にながれ、うつむいた顔が可憐であった。

千恵蔵の「血煙天明神」で花井蘭子が縛ら

れる。花井蘭子は今でも時々映画に現れるが、その頃はずっと初々しかった。縛られ転がされている姿を、足の方から撮したので、非常にエロチックな感じであったように憶え



ている。この映画では花井蘭子は、三度位縛られた様に思う。

新興キネマの「里見八犬伝」で、松浦妙子が、浜路に扮して駕籠の中に縛られている。

松浦妙子は私の好きな可憐型だったので、彼女主演の「中将姫」を期待して見に行ったら、縛られると云う場面が全くなく、責められる時は、手足の自由のまゝで引出され打ちたゞかれるので失望した。縛られないで責められる場合、たゞ残酷な感じだけで、少しも美しさがないのは不思議である。

「電撃二重奏」で轟夕起子が縛られる。轟は、千恵蔵の「曠原の魂」でも後手に縛られ、捕吏に突きとばされて、美しい後手姿を見せてくれるが、「電撃二重奏」では姫君に扮して陰謀を企てる侍たちにさらわれる。追かけて来た杉狂児が、侍たちと立廻りするとき、縛られたまゝ駕籠から出て逃げ廻る姿が印象的だった。折原啓子が、大河内の「三万両五十三次」で縛られる。この場面は、ほんの二三秒であり、しかも太綱のグル／＼巻きだったので、緊縛感が少くて不満であった。「江戸城炎上」では、関千恵子と、長谷川裕見子が縛られる。関千恵子はシゴキで縛られて猿ぐつわ、長谷川裕見子は細引で縛られて

いたが、緊縛感は長谷川裕見子の方がよく出ている。柱に細引でく／＼りつけられ、猿轡を噛まされているのに、猿轡の下から自由に喋っているのは少し可笑しかった。

「咬龍の鈴」で橘公子が縛られる。この場面もほんの二、三秒であったが、娘型として活躍した橘は、流石に美しい縛られ方であった。

右門捕物帳で大倉千代子がお蘭に扮して縛られる。最初に縛られたときは、姿が半身しか現れていなかったが、二度目に縛られたときには、全身がクローズアップされ、幻想的なものに感じられる程優美だった。この時のスチールは今でも秘蔵しているが、大倉千代子の清純美と、緊縛美との醸し出した芸術的な名場面と云う事が出来よう。

私の好みは、島田や結綿であり、縛り方は胸に縄をまわした後手、どちらかといえば、裸体のものよりも、着衣の方を好きなのは、映画からの影響が大きいのであろう。

この頃映画の中で、「黄門漫遊記」の千原しのぶがあるが、これは娘型ではなかったし、縛り方にも特筆する所がないと思ったので割愛しよう。

こゝで映画の縛りについて、気のついた事

を書いてみる。

「あ——」

暗い座敷の押入の前に、後手にく／＼られた身を、わな／＼かせ乍ら突伏すお志津へ、

「案じるな！」

と飛び寄ったなだれの峯太郎、手早く締めを切りほいて、

「俺アお前を助けに来たんだ！」

「あゝそれじゃア」

反り血を浴びて立った姿へ、娘は恐れを忘れて取りすがる。

と云う映画の場面があったとする。

この場合、なだれの峯太郎は、向ってくる敵を切り伏せ乍ら、高手小手に縛られた娘のそばへかけよってお志津の胸をしめつけた縄へ刃を入れてバラリと切る。すると、胸にまわした縄を切ると同時に、後手の手首を縛った縄まで解けて了って娘はすぐに峯太郎にすがりつく、と云うのが映画の常套手段のようであるが、これは、縄を胸に巻きつけているだけで、手首を縛ってない証拠であり、我々縛り絵マニアの興をそぐ事夥しい。手拭で口を覆っただけのさるぐつわは、まず美的効果から云って仕方がないとしても、こうした不自然な描写では、これからの観客は満足しな

Das Gransame Weib

Dr. Yohannes R, Birlinger

▽ 残虐なる女性達 ▽

— 1901年刊行の独文絵入単行本より —

森 本 愛 造・訳

第三章 教育者としての女性 (三)

私は友人のクルト (Kurt) にも何も云わなかった。併し、食事の時エルナは脹れぼったい眼をしていたし、椅子の上で、ソワ／＼と左右に動いていた。彼女は坐っている事が辛かったのだ。懲戒はたしかにひどいものだったに違いない。十六才の姉エルザも視線を落していた。併し、二人共充分に美しかった。エルザは半長の上衣を着、エルナは短かい上衣だったが、すでに成熟してきれいだった。二人の姉妹の盛り上った胸、丸いお尻！——但しお尻は今は残念乍らみづばれで一杯であつた。

暫らく一緒に住んでいる中に、私はエルナと仲好くなった。私達はいつも一緒に桜の木にのぼったり、舟を漕いだりした。機会を見て、彼女に一体あの勉強部屋においてある籐笥は何の為にあるのかをきく事が出来た。すると、彼女の顔は見る／＼中に赤くなり、遂には泣き出してしまった。私は慌てゝ慰さめようとして、彼女に抱きしめ、この甘美な匂いのする若い肉体を揺すぶってやった。それは私にとって、戦慄を感じさせる程の快感であつた。やがて、彼女は彼女達の女教師は姉

妹二人を笥で打つのが大變好きなのだと告白した。彼女の言葉に従えば、女教師は殆んど連日にわたって姉妹を打ち据えるのだった。使用される籐笥、櫛笥などは女教師自身、近くの森の中で探してくるのだった。女教師は時によつては、長い白樺の杖で打つ事もあつた。然も、その打ち方は犠牲者を最も極端に恥かしめる様に打つのが普通だった。私はエルナが、きつとお尻を打たれる事を云っているのだなと思った。そこで私は更に訊ねてみた。『いっつも上衣を捲り上げてから打たれるの？』

『そうよ。』

『では、何故、貴女方はお父さんやお母さんに訴えないの？』

『若し訴えてみても、先生は両親の処へ行つて私達の悪い点をいくらでも云うので、やっぱり笥が丁度いゝという事になってしまうのですわ。一度、私達が、云いつけたときは、後で、先生から目が廻るほど革鞭で打たれましたのよ。』

『じゃあ、エルザも打たれるの？』

『そうよ。エルザだって打たれますわ。いつも、先生の質問に答えるときにエルザは両手を揃えて上向けて先生の方へ差出してないけ



更に一週間すぎた。

今や、手紙の主は、子供達が一夕、秘密にしていた相互手淫を見つけられたときに、かくれて見張っていた女教師が突然寝室に這入ってきたときの様子をかいている。

クルトは飛び上った。私は顔に手を当て、恥ずかしさに倒れるほどだった。女

う。今晚は勿論、徹底的に懲しめますけれども明日から一週間の間は、每晚懲戒しますよ。貴方がたは、其の期間中、每晚裸のお尻全体を打たれるのですよ。よろしいですか。それでは、今鞭を持って来ますから待っていなさい。」

そういつて女教師は出て行ってしまった。

私達は、不安と恥しさとでふるえていた。クルトは大声で叫んだ。

「僕は打たせやしない！」

私はつゞけて云ってみた。

「僕だってそうさ！」

けれども、其の時、扉が開いて、女教師は藤の笞を持って這入って来た。彼女は素早く扉の門をかけた。

「クルト！、前へ出なさい！このソファの上へうつ伏せになるのです。その後で、お客様にもたっぷりこの笞を上げますからね。」

クルトはおず／＼と進み出た。

「早く！ちやんとしなさい！」

彼女は誇らしげに叫んだ。そうして、クルトをしっかりと捉えて、ソファのもたれの上に俯伏せにさせた。クルトのお尻は高く持ち上った。

(訳者註)此れは全く典型的な姿勢である事

ればならないの、そうして、一寸でも答が不味かったりしたら、棒で掌を打たれるのですわ、それに、もし、五つも答えられないときは、エルゼは腰を曲げたまゝの姿勢で立たされるのよ。そうして、先生は後へ廻って、藤杖で打つのですわ。」

「その間中、エルゼはじつとしてるの？」

「あの人はお馬鹿さんだからじつとしてるのよ、私なんか、先生に打たれるときはいつだって抵抗してやるのよ。」

私にはエルゼの様な成熟した娘が鞭打たれる事など信じられなかった。しかし、エルナは、はっきりと云っているのだ。そうして、

教師が叫んだ、
「そう！こんなところでやっていたのね！さあ、着物を着なさい。フリッツ！（私のこと）私はすぐにお前のお父様に手紙で知らせますよ。」

彼女は素早く扉をしめて帰って行こうとしたので、私達は追いつがってひざまづき、泣き乍ら嘆願したのだった。彼女は部屋へ戻ってきて呉れた。クルトも一緒に嘆願したので彼女はやっととき／＼入れて、他の人には話さない事を約束した。

「けれど、罰は、しなければなりませんよ。それでは、私が、貴方がたに笞を上げましょ

に注意されたい。)

彼女は彼のシャツをまくり上げ、頭をソファの上にしっかりと抑えつけた。打擲が始まった。其の音は高らかに寝室中にひびき渡った。クルトは足をばた／＼させた。彼女は私に叫んだ。

「フリッツ！来て、脚を押さえておいで。」

私は、友達の脚をおさえた。其の間に、籐笥はうなりを立て、クルトのお尻の上に赤い溝を作って行った。彼は泣き、喚き、嘆願したが、彼女の笥は無頓着に振り下されて、クルトのお尻が全部暗い紅色に変わり、一打ち毎の笥の跡が、籐笥の形をはっきりと印す様になるまで打ちつづけたのだった。

彼女は、彼を放すと、彼は噁り泣き乍ら、部屋の隅に走ってゆき、両手で痛い処をおさえていた。

「さあフリッツさん。今度は貴方の番よ。」

私は泣き乍ら打たれた。私はお尻が捲り上げられたの感じ、即座に灼く様な籐笥を感じた。私は声を限りに「痛い！お尻が焼ける！と喚いたが、そんな事は何にもならなかった。一打ち、又一打ちと、私のよく肥えたお尻に、籐笥は勢よく打ち下された。そして最後に、私とクルトは彼女にもうあんなこ

と(手淫)をしないと約束させられた。

彼女がひき上げてからも、私達は泣きつづけた。私達はお互いに真赤になったお尻を撫ぜ合い、慰め合って、寝台に入ったのだった。お尻は火がついた様に熱く、痛かった。

しかし、奇妙な事に、その痛みは、非常に快よく快楽的であった。正に、あの打擲は、あの遊び(手淫)をする時に、普通以上に快感を刺激するものだという事を、私は察したのだった。私達はすぐさま手淫を繰返したのだった。それから毎晩、私達は打たれ、真赤になったお尻をさすり乍ら、寝台にもぐりこんで相互手淫に耽ったのであった。苦痛の涙から、私達は、かの叛き難い喜びを創造したのだった。

其の後、私は、連日の事となった笥打の懲戒の時、気紛れの様に、女教師の指先が、私の二本の脚の間に這入りこみ、最も敏感な部分をまさぐるのを感じた。その為、私達は、遂に打擲を喜ぶ様になり、その楽しい懲戒が終ったとき、次の笥打の事を期待する様になってしまった。

私はもう一度、こうしたやり方で、籐笥をうけてみたいと思っています。

奥様、尊敬する貴女、私は貴女がサディステ

ィンである事を聞いています。私の感受性は丁度、貴女の嗜好に適応するのです。貴女は打とうとし、私は打たれようとする。其れ故私は貴女を訪問しようとするのです。私は私達がお互いに、楽しい時間を持つ事が出来るという事を確信して疑わないのです。若し、貴女が……以下略

屢々、召使の娘が、子供達の唯一の教育者であり、彼等に対する処罰権を行使した事があった。此の事に関して、ブロッホ医師(Dr. Bloch)に対して一人の患者がなした告白が次の様に例証されている。(著者註⑩)此の引用は次の文献による。Iwan Bloch: Das Sexu-alleben unsere Zeit. Berlin: 1919p. 600. 『イワン・ブロッホ著「現代性生活」伯林刊一九一九年第六百頁より)』

「そこで、私の場合、確かに貴方が今仰言った様な鞭打愛好の傾向が、幼少の頃から起こって来て居た事を告白致します。その原因の中、最も肝要な事は、私の両親が召使として使って居た女に、私に対する広汎な鞭打懲戒権を認めていたという事です。私は十四才にもなって居乍ら、其の女達の手で父の完全な

同意の下に行われた、鞭打をうけねばなりませんでした。私の父は尻を鞭で打つ以外の懲戒は、すべて健康を害するという理由で、何時も尻を露わにして打たせました。この頃、私と二つしか違わない下賤な召使女に尻を鞭で折檻された有様を、私は今でもはっきりと憶えて居ります。」

子守女達の、委託された子供に対する態度や取扱について、J・G、メイボミウス

(J. G. meibomius.) の「鞭打の効用」についての著作の中から、興味ある引例をしよう。(著者註「此の引例は次の文献による。

Abgedruckt im Schatz gräber, herausgegeben von Scheible; III teil, p. 309—メイボミウスの作「宝探しの印象」——第三卷三百九頁より)メイボミウスはガレン(古代ギリシアの名医)を引用している。つまりガレンは鞭打の効果について、その著作の中で、奴隷所有者達に愛用された「鞭打による健康、肥満法」を例証して居るのである。併しガレンについては割愛しよう。

々多くの子守女達の多くが、預った子供を母親に返す前に、子供の尻を平手で打って肥大させて自分の怠惰を一時的に逃悔するのである。『児童達の感情を全く無視した躰が、以

前にはよく幼稚園や学校で行われていたかについての例。クレードン(Kloden.)の著作に、十八世紀末の非情な女教師の典型についての記述がある。

「私は未だ字が読めない位の年に、或る七十才の老女によって経営されていた一種の学校に連れてゆかれた。その老女の家は、カトリックの墓地の傍にあり、小さくて汚ならしく玄関の他には一部屋しかなかった。しかも、其の部屋というのは床にタイルを敷いてあって、窓は一つしかなく、とても汚れた小さなもので戸外を見る事など出来ない様なものだった。片隅の暖炉の側には別に一つの大きなタイルでできた炉があって、彼女はいつも此の前に坐って糸紡ぎをやっているのだった。

そうして、その傍らには、私達が常日頃親しまされて居た教育用具であるコテと一本の細い杖とが置いてあるのだった。又、三脚の粗末な長椅子が離れ／＼においてあった。其の椅子はソル／＼になっていた。色んな家から通ってくる小学生達が、とにかく字が読める様になるまで、其の上に坐っていないければならないのだった。その中の一脚にはA・B・Cから始める程度の子供達、次の一脚には字を書く事を習う子供達、三番目のには読み

はじめの子供達が坐るわけである。先ず学習は私達みんなが、既に小さなときから憶えている讚美歌と、一人が単調に節をつけて唱える短かなお祈りで始まるのだった。それがすむと、一人ずつ老女の側へ行つて、鶏の絵のついた聖書を読んだり、A・B、A・Bと誦めることになって居た。老女は口を利く事は滅多になかった。若し、子供が間違えると、彼女は黙って紡車をわきへ押しやって、片手で、子供を膝の上に抱え上げ、片方の手で、上衣をまくり上げ、例のテコや杖で其の時の間違いの程度に応じて、尻を打つのであった。この様な事が繰返して授業中何度も行われるのだった。

以前は、老女は厳しく、酷く尻を打つたのだそうだが、私が習いに行った頃は、そんなにひどくはなかった。私が市の学校に入ったときに、丁度老女は病気で入院して居た。まもなく退院して元通り授業を始めたので、私の妹が私と同じ様に勉強に行かせられた。ところが元氣になった老女は前よりも残酷だったので、罰は無茶苦茶に徹底的だった。そこで、市の警察は裁判所の手続をして、老女の授業を止めさせたのだった。

以上の引例と同様の実例を、英国の作家W

・シェンストーン卿 (W. Shenstone) が彼の詩「女教師」の一節に取り扱っている。その部分の大意は次の様なものである。

「彼女は誤ちを犯した少年を、野蠻な残忍さを以って、打擲するのだった。余り彼女が笞を揮うのが好きだったので、彼女の学校の前を通る時、子供達は白楊の枝の様にふるえるのだった。」

十八世紀の英国では、貧民学校での状況を、バルリンガムの裁判所 (Bullingham) のパヌイエ夫人 (Lady Frances Panuoye) の日記が述べて居る。

一七六〇年一月一日付の記述

「今日はまことに楽しく、満ち足りた元日でした。学校の生徒達は、氣持よく振舞い、先生との問答教授の時にはよく答える事が出来ました。併し、二人の女生徒が、不従順と、祈禱の時間中の不作法とで明日、笞を受ける事になりました。担当の女の先生はまだ新任ですから勝手が判らないと思います。私は、自分で、二人を打ってやる事になるでしょう」

同年一月二日

計画を樹て、学校へ行きました。道で、担任のオーブリ先生 (Aubley) に会って話をきいてみると、矢張り突然の事で困ら

る様でした。オーブリ先生は年も若く、美しい方ですから、打擲刑を実行するのには一寸不適當の様に思います。けれど、彼女が若し充分に注意をしてやるのなら、出来ない事はないでしょう。私達は二人で部屋に這入ったのでしたが、そこで先生は、今まで居た学校で、屢々鞭打懲戒の場に居合わせたこと、そうして、自分で鞭を揮う事が、心から楽しいことなどを打明けたのでした。「鞭で打たれるのが、其の娘達に一番応わしい事でしたわ」と。

今日、刑をうける筈の二人の生徒は、優美な仕草で、私達の前にひざまづき、宥しを乞いました。(訳者註) 宥しを乞う事は此種鞭刑に先立つ一種の形式的な儀式であった様である。これは、多くの鞭打小説、特に英国で刊行されたものに見られる傾向であって、宥しを乞うという事が、心理的に鞭打者と被打者の双方を法悦に導くのであろうか。

私は生徒達が、進んで罰をうけようとするのを大變嬉しく思いました。刑は私が自分でオーブリ先生に鞭や笞の使い方の模範を示す為に行いました。

家へ帰ってみると、ケーザーウッド夫人 (Lady Catherine) と令息が待つて居り

ました。私が昨日からの一通りの話をしますと、夫人は、「そうよ、杖や笞を充分に使わなければ、何一つ満足に出来ませんよ」というのでした。右と同じ様に、充分に信頼出来る資料であるクーパーの著作によれば、英国の貧民達の子弟が通っていた学校の実情が明らかに物語られている。此の引用は全文でなく、抜萃して記しておく。(著者註) 此の引用は左記の文献より M. Cooper: A History of the rod in all countries, London p. 398 = M. クーパー著、「各国の昔の歴史」倫敦刊 第三九八頁。

「これは、今を去る百年前、英国の伯爵領にあった、私立貧民学校に於ける生徒の躰けについての偽らざる報告である。併し、此の報告を筆者クーパーに伝えてくれた或る婦人の切実な要請に基づき、文中に現れる地名、人名、学校の所在地については秘しておく必要があるので、仮名を用いておく。『東バークム (Ost-Barkham) の貧民学校はロイストン夫人 (Mrs. Royston) 一家によって経営されて居ました。彼等は、必要な全ゆる事物を提供し、凡てを規定し、教師達を支配し私達生徒を監督する為の諸規則を、完全に実施する様な努力を傾倒したのでした。ロイス

トン家の人々は、特に体刑を自から代行するのを好んでいる様でした。中でも、若いマリア夫人(Mrs. Maria)は、何時も凡ゆる体刑を監督し、又自分で笞を揮うのが好きでした。マアジョリイ夫人(Mrs. Marjoly)は、滅多に自分から手を下す事はないのですが、笞刑の実況を側で見るのは大変好きな様でした。そうした場合、多く彼女の娘達が私達に鞭を当てるのでした。私は、夫人の娘である若い女性が、数多くの男女生徒のお尻に鞭を当て、彼等が、手足をバタ／＼させても、一向に頓着なく無慈悲に手が草薙れるまで鞭を鳴らしたりするとき、夫人の熱心な視線に気が付いたのでした。そういう場合の大部分は罪のない生徒達まで、彼女達の嗜虐的な鞭や懲戒用の細い杖の犠牲になったのです。然もこの様な滅茶苦茶な鞭打を、殊に夫人達は愛好したのでした。

私達の学校の窓からは、遙かに一マイルも離れて、ロイストン家の紋章に輝やく、広大な邸を見る事が出来ました。私達は一年に二回、其の館に連れてゆかれ、私達の支配者の一族を拝むのでした。一族の人々は、其の時は大変優しく、親愛の情をもって接するのが習慣でした。そうして、八私達は貴方にとて

もよい仕事を見付けて上げましたよ。Vと私達の中の数人に云うのでした。つまり、私達は女中、侍女、下男等の地位で彼等に生涯仕える為に教育されているのでした。此の教育というか調教というか、は極めて完全で、徹底したものでしたので、私達は完璧に仕込まれたのでした。私達は女主人が大変怖かったのです。というのは、夫人はいつでも、情容赦なく笞や鞭で打つからでした。丁度私が貧民学校に上ったところ、夫人は笞打の場合の直接的な全権を持って居たので、一度などは、四十人の子供達が、一度に、徹底的に笞をうけました。其の時は夫人は、一族の娘達と一緒に、心ゆくまで鞭の楽しみを味わったのでした。

一族の中の娘の一人はジョアン(Joan)といいました。或る時、私が打たれて泣いていると近付いてきて云うのでした。八お前はマアジョリイ夫人の侍女になればいいのよ。そうしたらもっと／＼鞭や杖の味を覚えるでしょうよ。Vそうして、馬鹿にした様子で嘲笑したのでした。又こうも云いました。

八マアジョリイ夫人は、一寸見ると優しく見えるけれど、あの方は本当はタタール人なのよ。お前が夫人の侍女になったら、御主人は

お前が、本当に従順になるまで、打ち据えて下さるのよ。V事実、それは私達の宿命でした。しかも、其の頃は女主人達の鞭をうけるのは大部分が女中で、男の召使はそれ程でもなかったのです。だから、私はその頃の女中は、今の女中よりずっと／＼従順で性のよい者が多かったと思っています。

私達の学校は古い建物で、エルミタージュ(Ermitage)という名で呼ばれていました。昔、庭園も建物も大変に美しい一つの建築がありました。その一群の建物は、極度に手の込んだ装飾がついており、立派な家具が揃っていました。これは、一族中の何代か前の伯爵が、不信仰な愛人の為に建てたものでした。長い間、この建物には住む人もなかったのです。(一七六三年現在の状況)現在の伯爵は結婚するときに妻を説得して、領地民の子弟の為にこの建物を開放して、学校をつくらしたのでした。新しい夫人は、自分でお金を出して、こゝで充分な教育が出来、立派な召使として世に出てゆく事を期行したのでした。彼女は、子供に衣服を与え、教育し、希望を実現しました。生徒達一二〇人の女二〇人の男、合計四〇人の生徒にとって、充分な教育が行われ始めたわけです。(以下次号)

禪姿に憧れを抱く少年の幼き日の同性愛抒情詩

「子供山笠」

山口 幸一

『坊んち可愛いや寝んねしな
品川女郎衆は十匁
十匁の鉄砲玉
玉屋が川へすっぽんぽん』

賑かな三昧の音と唄声で町中が踊り狂う
「どんたく」祭が済んでしまうと博多の町は
一しきり鬱陶しい梅雨の季節となりじめく
した天気がしばらくは続きます。

而しやがて梅雨空の雲を破りて南国の太陽
がじりじりと舗道を照りつける様になると、
あちこちの町角から又例の「坊んち可愛い
や」の単調な唄が聞えだして、博多名物の
「山笠」の祭が近付いて来ます。

其の頃はもう町中の大人も子供も、あちこ
ちの町内で組立てている山笠の飾りの噂話で
涼台を賑わせるのです。

又大掘や中洲の水辺には、夕方ともなれば
薄い単衣の着物のそこから素肌に吹き込んで
くる涼しい風を楽しんでそぞろ歩き散歩す
る人々で一杯になります。

永い間の梅雨の為に身も心もけん怠しき
て居りましたので、云わばその陰鬱な殻を一
べんに突き破って、思いきり官能の花園にと
び込み禁断の実を貪り喰おうとでも申しまし
ようか、そんな様な慾望が大人の心にも子供
の心にも、むくむくと頭をもたげて来るので
した。汗ばんだシャツや下着をぬぎ捨てて、

素肌に着る浴衣の気持の良い肌ざわりは、何
かしら浮き／＼とした楽しみを子供の心にも
感じさせるのでした。

丁度その頃、絢爛たる博多山笠の祭が催さ
れるのであります。

山笠と申しましても御存知無い方があるか
も知れませんが、これは七月一日から行れる
博多の櫛田神社のお祭で、その時、山笠と云
う高い櫓に人形を一面に飾りつけた花車の様
なものを各町内で一つ宛作って、大勢でそれ
を担いで町中を練り歩くのであります。

その時、子供達も大人の真似をして、小さ
な山笠を作り、町内をかつぎ廻りますが、こ
れを子供山笠といって、仲々派手で優美なお

祭であります。

申し遅れましたが、私はその年の春、田舎町の小学校を出ますと、博多の商業学校に入り、昔、父が奉公致して居ました「丸十」と云う大きな醸造業の商店に書生の様な待遇で御世話になって居りました。

「丸十」は博多でも屈指の大金持で、奉公人も三十人位居りましたが、其等は一定の期間勤めますと、暖簾を分けて頂いて夫々の町で御店を持たせて貰える仕組になって居て、私の父も先代の大旦那の居らっしゃる時分に暖簾を分けて頂き、今では田舎町で雇人も四五人使って相当な商店をやっていますのですが、今でも先代の恩を忘れず、時々博多に出ては、お店に顔を出し、今の旦那様の御機嫌をうかがうのが常でした。

私も何度か、父と一緒に「丸十」の広い奥座敷で旦那様や奥様にお目にかゝった事がありました。

昨年、私が父に連れられて「丸十」に御伺いした時、旦那様は父に向って、

「家の鉄也も今年から中学に入ったが、遊び相手がなくて困って居る。君の子供は素直で利口そうだから中学校へ入ったら預かってやっても良い」と云われました。

それで私は今年の春、博多の商業学校の試験を受けました所、首尾よく合格しましたので、直ぐ丸十のお店に寄宿するということになったのです。

丸十の旦那様は四十二三才の肥った恰福のいゝ方で、奥様はずっとお若くて美しい御方でした。子供様は鉄也さんと云う県立中学校の二年生の坊っちゃんと言ふ尋常三年生のお嬢ちゃんとの二人きりでした。

旦那様は何時も御邸の奥座敷に居られ、たまにお店に顔を出される位で、私共がお会いする事は滅多にありませんでした。

奥様は氣立の優しい方で、特に私に対しては、他の店員とは別に特に目をかけて下さいます。時々母屋の方に呼ばれてはお菓子など下さる事がありました。

私は他の店員達と一緒に倉庫の二階に寄宿して居りましたが、特に私だけは学校に通って居りますので、三疊の間を一つあてがわれていました。

お店に参りました翌日、奥の女中さんが奥様が、私を呼んで居られると伝えてきましたので奥座敷に伺いました。

そこには奥様と鉄也様が待って居られました。奥様は私に向って

「鉄也は本当に我儘で自分勝手ですが、利雄さん、どうか仲よくして上げて下さい」と申されました。

鉄也さんははばかりそうにニコニコ笑って奥様の傍に坐って居られましたが、年は私より一つ上の十五才だそうです。流石に良家のお坊っちゃんらしく凛然とした上品な顔立ちの頬も真赤に血色のよい美少年でした。

私はこんな美しい快活な少年と友達になれるのかと思うと、心の中でぞくぞくと嬉しさがこみ上げてきて、鉄也さんに向って微笑して頭を下げました。

鉄也さんもニツコリ笑って、軽く答えました。奥様は鉄也さんに向って「それじやお母さんは御用事があるから、利雄さんを御部屋に連れて行って遊びなさい」と云われました。

私は鉄也さんの後からついて長い廊下伝いに人の居ない大きな御部屋の前を幾つも通り過ぎて日当りの良い縁側のついた離れの御部屋へ参りました。其処が鉄也さんの御部屋でした。

六疊とそれに続いた四疊半の二間で六疊の間には勉強机や本箱、簞司が置いてあり、四疊半には洋式のベッドが白い布をかけて置か

れて、窓には薄緑色のカーテンがかゝって居りました。

私は御部屋に坐ったまゝしばらくその立派な調度に眼をみはって居りました。

どっしりと坐りのよい机、椅子、大きな姿見のついた簞司、それから清潔なベッド、寝室の壁にかゝっている美しい風景画の油絵、



壁に下っている立派な黒塗の胴の入っている劔道具、それからラケットやグローブ等、どれもこれも皆素晴らしい豪華なものばかりでした。

鉄也さんは本箱の中から一冊の写真帳を出して私に見せて呉れました。

小学校時代のものから次は中学時代と云う

具合に、年度別に綺麗に張りつけてありました。鉄也さんは頁を一枚／＼めくりながら説明して下さいました。

鉄也さんは年は私と一つ違いなので身体の大きさもあまり変わりませんが、流石に主人だけあって凛々しい所があり、それに性質が快活で積極的な少年なので、私に対する態度もすべて命令的でありました。

私はどっちかと云うと、女性的で、内気な始終伏眼勝ちな性質でしたので易々話々と鉄也さんの指の動くまゝ、次々の頁に現われてくる写真の説明を只おとなしく聞いて居りました。

何頁か写真帳がめくられてから、鉄也さんの白魚の様な華奢な指がアルバムの次の頁をさっとめくりました。

その時、私の眼はハッと驚きに変り胸の動悸は激しく脈打ち出しまして見る見る顔は紅潮して参りました。

その頁には昨年の山笠の時の記念写真がはってありました。鉄也さんが一人で白鉢巻をしめ、腰迄の短い半纏を胸も露わにかけ、巾の広い赤い六尺褌をお腹の上迄キリッとききつけている大きな写真でした。

身体を被うものは上半身の短い半纏一つ、それも胸一ぱいぬいで、始んど裸体に近く、腹から下は褌一本の漂々しい姿、そしてかすかに微笑している顔は女の子の様に優しく美しいでした。

この魅力的な鉄也さんの姿は、いつ迄も私の眼の底に残って居りました。

私は恐る／＼鉄也さんに向って尋ねました「これはいつの写真ですか」

「去年の山笠さ。僕の家で子供山笠を作ったんだ。僕が大将になって出たんだよ」

「今年も出られますか」私はふるえ声で尋ねました。

「勿論さ。君も出るんだよ」

私は其時以来、あの美しい鉄也さんの山笠姿を早く見たいと思いますと、勉強の間でもあの写真が目先にチラ／＼して、片時も忘れる事が出来ませんでした。

勿論、私もその時は同じ様な服装をして、一緒に町を走り廻るのだと云う事を想像して様々な楽しい状景を画いていた事はいふ迄もありません。

ようやく梅雨も終りに近付き急に夏らしい気候となりまして山笠の日が近付いて来ました。やがて九十のお店の前に子供の山笠が組

立てられて行きます、近所の少年達が見に集って来ました。鉄也さんはそれらの少年達と色々当日の打合せをして居りました。

いよいよ、待ち焦れた山笠の祭りの日が参りました。

子供の山笠は大人のそれに別に面倒な行進規則や、やかましい喧嘩などはありませんので、只自由に大人の真似をして町内を担ぎ上廻って遊ぶだけです、あまり小さな子供は大人の肩車に乗って見物します、山笠に出る子は十二三才から十五六才迄の少年が主であります。

当日、夕方になりますと、町内の少年達は揃いの半纏に赤褌と云う姿で、ちらほらお店の前に集って参りました。

私も奥様から貰った半纏をきて赤い木綿の褌をしめお店の前に出て居りましたが、半纏は非常に短いため、前からも後からも褌をしたお尻が丸見えなのではずかしく、早く町へ担いで出たいと思って居りました。

奥様やお嬢様も女中さん達とお店の前迄出ていらっしやって集った少年達にお菓子など出して居られましたが、やがて私に向って、「鉄也はおそいじやないの。支度はまだ出来ませんか。もう皆集って居りますから早くし

なさいと云って御いでなさい」

と云われました。

私はすぐ廊下を走って奥の鉄也さんの御部屋へ参りました。私の胸は早やドキドキと高鳴り初めました。

私は障子の外から、

「鉄也さん。お母様が早くいらっしやいと云ってます」と申しますと、中から

「利雄君か。一寸入って待って呉れ」と云われしたので私は障子をさっと開けました中の光景は予期はして居りましたが、私の心臓が一瞬停ったと感じた程の場面でした。

真裸になった鉄也さんは、大きな姿見の前で、巾の広い緋縮緬の褌をグイグイと真白い肌に締めている所でした。

お尻の割目に深くギョツと喰い込んだ赤い褌は薄化粧をして女の子の様に美しくなった鉄也さんの顔と調和して全く絵本で見る昔の御小姓が画面からぬけ出して来たかと思うばかりでした。

私は足もとに蹲んだまゝ只々恍惚として、その姿を眺めて居りました。

二人がお店に出て来ますと、奥様は、

「まあ二人とも良く似合うこと」

とほめて下さいました。

女中さんや番頭さんも皆鉄也さんの姿を口を極めてほめないものはありませんでした。全く御世辞ばかりではないと思ひました。

興奮に満ちた山笠祭りも、やがて終りました。

鉄也さんは又普通の中学生にもどり毎日学校へ通います。私も商業学校へ行きますが学校へ行っても、あの夜の鉄也さんの禪姿が眼の前にちらつきまして、ほっとため息をつく事が多いのでした。

それからしばらくたってからの事です。或日、私が倉庫の裏からお店の方に行こうとして井戸端を通りますと、奥の女中さんが洗濯をして居りました。

私は洗濯台に乗せてあるシャツや下着を見て直ぐ鉄也さんのものだと思ひましたが、その中に紐の付いた晒の越中褌があるのに気が付きました。

鉄也さんは今迄何時も下ばきには白いパンツをはいて居りましたが、もしやと思ひまして、はづかしさを隠してその女中さんに尋ねました。

「誰のものを洗っているの？」

「坊っちゃんのですわ」

「其れ全部坊っちゃんのですか」

「きまっているじゃないの。どうして？」

「いや、なんでもないよ」

私はそこで鉄也さんが此頃越中褌をしていると云う事を知りました。

其の当時は中学校の二年生頃から、越中褌をする子が大分居りまして、多分鉄也さんもその子達の真似をしているのだらうと想像しました。私は鉄也さんのものらしい越中褌が股にかゝる所だけしわが寄ってくびれて、X字形になったまゝ洗濯台に確に乗せられていた光景を見ましたが、それが本当に鉄也さんが使っているものだと思ふ事は、締めている現場を見なければ、はつきり分りませんでした。

何とかして鉄也さんが確に越中褌を使っていると思ふ事をつきとめた上でそれを手に入れた、自分が締めて見たいと思ふ様になりました。

それには鉄也さんと一緒に風呂に入る機会をとらえて、脱衣所で素早くすり替えるより他に方法がないと決心しました。

鉄也さんは母屋の旦那様方の御入りになるお風呂ですし、私共雇人達の風呂は、別になつて居ります。

一緒にお風呂に入ると云う事は平常は出来

ません。

私は尚も平常鉄也さんの衣服を注意して見て、学校から帰えられて上衣をぬぐ時などもしやズボンの上から褌の白い紐が出ては居ないかと注意しましたが、其れらしい物は見あたりませんでした。

そうかと云つて、女中さんに、

「鉄也さんは、何時も下ばきに何をしていますか？」

などと聞く事は到底出来ません。

私は、いら／＼した気分を毎日を送つて居りました。が、思ひがけずに近く私の計画が成功しそうな機会が到来致しました。

旦那様はお昼過ぎに風呂を済ませて晩は宴会とやらで、御出掛けになりました。奥様も午後から御嬢様を連れて知り合いの方の御宅に出かけられました。

私は鉄也さんの帰りを待つて居りました。四時過ぎに鉄也さんは帰つて来られました。女中さんがすぐ御部屋に行つて旦那様も奥様も外出された旨つたえしました。

その後で私は一人鉄也さんの御部屋へ参りました。

「お疲れでしょう。御風呂に入りませんか。」

私が背中をお流ししましょう」

鉄也さんは無邪気に、

「うん、じゃ君も一緒に入ろう」

と云って、タオルを取ると、湯殿の方に歩いて行かれました。勿論私も直ぐ後を追いました。

脱衣所に入ると鉄也さんは、

「あー、今日は汗かいた」

と云って、直ぐシャツをぬぎズボンのバンドを外しました。

ハツと思って見ると、やはりズボンの下には、晒の越中褌をして居られ、その三角形の布がお尻の割目にはさまりやゝ汗ばんで居るのがはっきり見えました。

私も直ぐ着物を脱ぐと素早く私の褌と鉄也さんの褌とをすりかえて、籠の上に置くと、後を追って浴室に入りました。

鉄也さんの風呂は早いので、気が気でなく出ようとされる時私は一足先に脱衣所に



出まして素早く鉄也さんの褌をとると尻から当てて、紐を結び前に廻して締めました。しつぽりと湿っぽい肌独りを感じ、生暖い体温が私の体内に通って来る様な気がしました。間もなく鉄也さんが出て来られると無難作に私の褌をつまみ上げると姿見の前で締め初めました。

湯上りでブーツと桜色に上気して美しい鉄

也さんの顔と、股間を被う白い越中褌との対照美は何と云って良いか、たまらない少年美を発散致します。

文学者なら「酒とならざる麦の穂の青き豪奢」とでも形容致すのでしようが、私にはたゞ美しいと思うだけです。

しかも今、眼の前で鉄也さんが締めているのは、私の褌で、鉄也さんのは既に私の肌に

まどっているという事を考えますと、一種異様の陶酔感に襲われて、私はシャツを取上げる事も忘れ裸体のまゝ呆然とその後姿にみとれて居りました。

斯くして、私の目的は達せられました。私の心の悩みは一応は昇華する事が出来て其後しばらくは平静に過す事が出来ました。けれども、やはり、あの山笠の晩の姿が忘れられませんでした。

もし私があのだ山笠姿の鉄也さんに、私も同じ姿で、ひどく、いじめられたり、せっかんされたりしたら、どんなに甘美な満足を得る事だろう等と妄想をたくましくする事もありました。

私はあの日、鉄也さんが締めた緋縮緬の褌が簞司の抽出の底にそのまゝ置いてある事を知つて居りました。

それはいつか、鉄也さんが、抽出から着替えのシャツを出す時、チラッと赤いものが見えたのを覚えて居りま

す。あの時の褌でなければ他に赤いものなど入っている筈はありません。

私は、こっそり鉄也さんの室にしのび込んで大きな姿見の前で、あの褌をたっぷりと締めてみたいと思ひました。

間もなく旦那様は急用で大阪に出張されまして四五日はお帰りにならないとの事です。

奥様は女中さんをつれて田舎の伯母様の病氣見舞に行かれました。お帰りは何でも旦那様と同じ頃になる由、私はこの機会に是非実行したいと決心致しました。

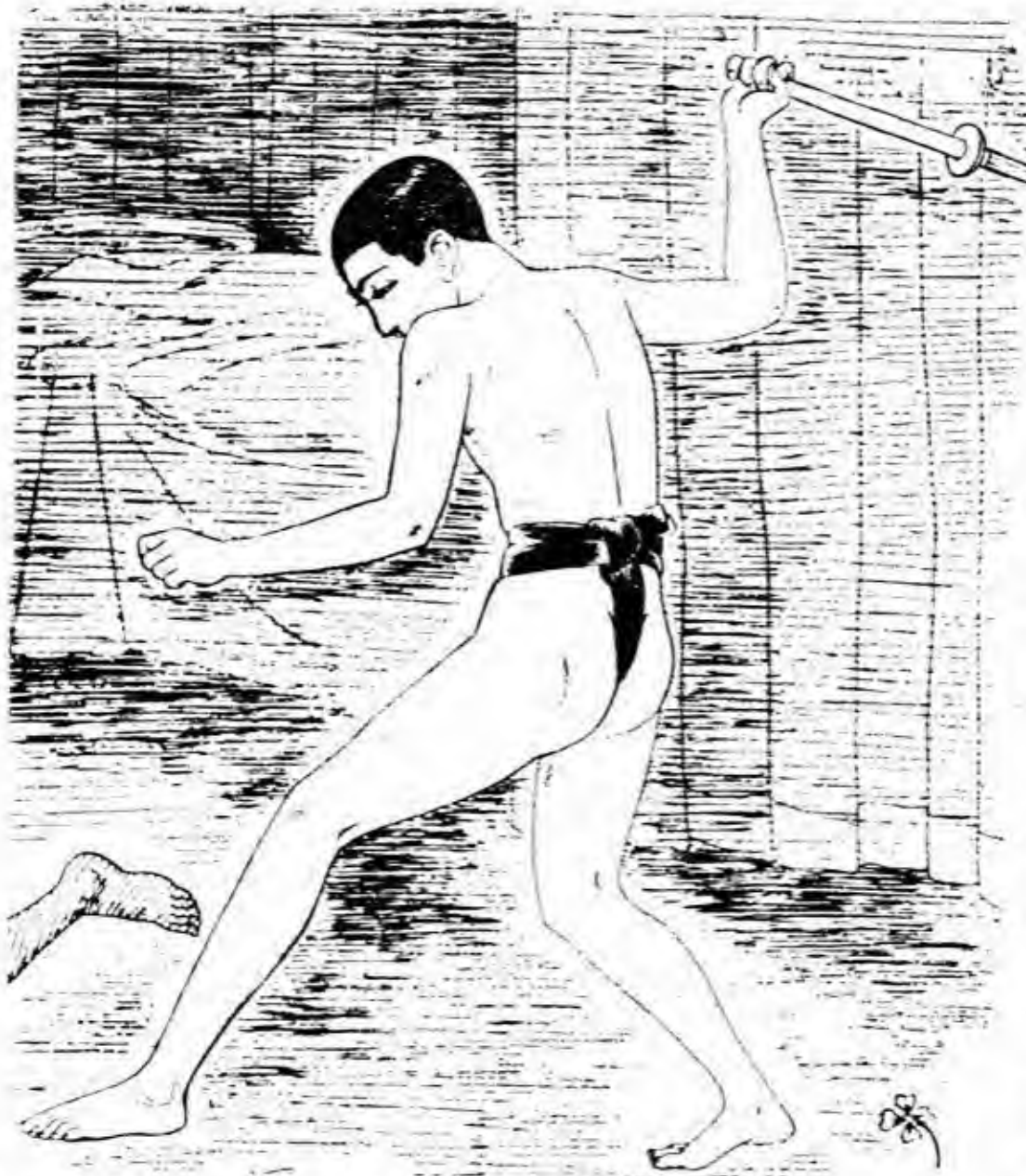
その日の夕方、鉄也さんは誰もつれずに一人で一寸散歩に出かけると云って町へ出て行かれました。

丁度町内で夜相撲をやって居りましたので、それを見に行かれたのかも知れません。

暗くなるのを待ち兼ねて、私はこっそりと長い廊下を足音をしのばせて鉄也さんの御部屋に入り込みました。

六畳の部屋には電燈が明るくついて居りました。寢室の方は薄暗いでしたが、昼寝でもされたらしく、ベッドの上の布団は敷き放して掛布団が荒々しく足の方にまくられたまゝ、ほの白くうす闇の中に浮上って見えて居りました。

部屋の中には、少年特有の何か酔う様な体臭がこもって居り、それは何かの花の臭いの様



でもあり麝香と汗とを混ぜ合せた臭の様でもありました。

私はふるえる手で素早く簾司の抽出を開けると一杯詰っている下着類をまくり上げて一番底をさがしました。

やはり思った通り山笠の褌が出てきました。

私は胸をとどろかせて、さっと着物をぬぐと素裸となり、褌を締めました。

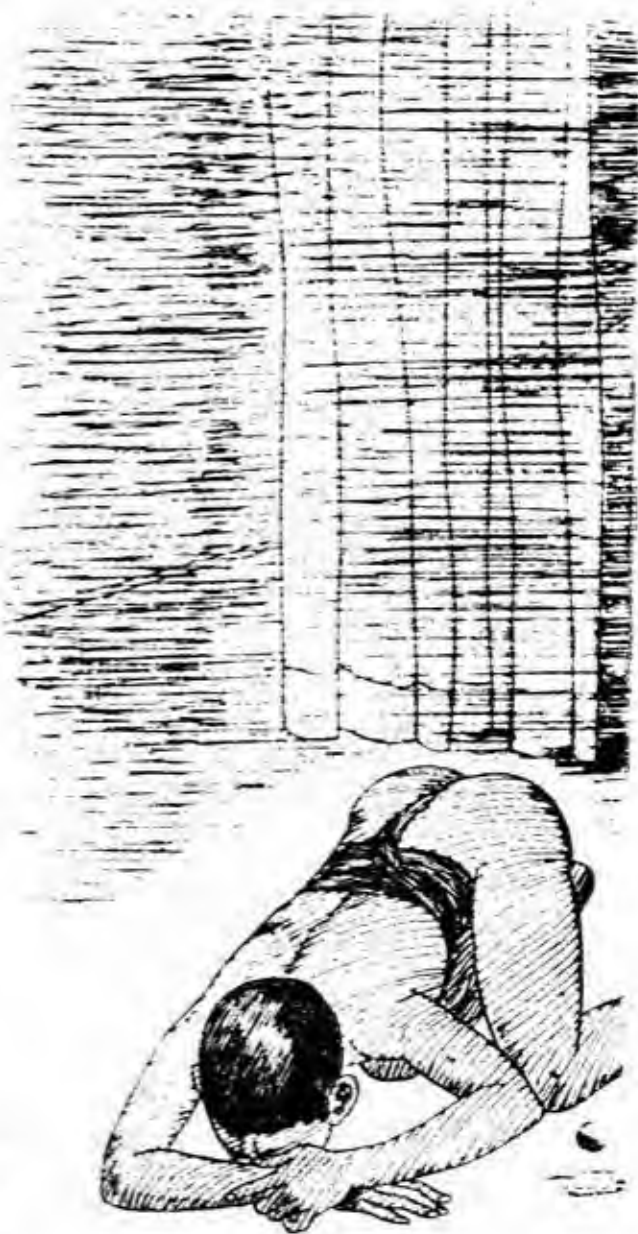
太い柔い緋縮緬の布はたっぷりとした重量感を伴って心持よく私に締って行きます。

私は姿見に映し出された私の像に、うっとりとみとれて居りました。その時遠くの廊下で足音がきこえて誰か此方に近付いて参ります。私は慌ててベッドの脇のカーテンの陰にかくれました。

サツと障子があきました。

鉄也さんが帰って来られたのです。何の用で急に散歩から帰られたのだろうと思って居りますと、鉄也さんは簾司の抽出をあけて、どうやら私が取った褌をさがして居るらしいです。

「おかしいな。確に此処にあったのだから」



私はハツと気がつきました。

夜相撲を見ている内に、友人達が皆出ているので急に出たくなって、廻しを取りに帰られたのだろうと思いました。十五と云ってもまだ子供です、お母さんが居らっしゃらないのでその間に、鉄也さんも羽をのばして、町内の少年並みに、自由な事をして遊びたいのでしよう。

しかし幾らさがしても見付かる筈はありません。やがて鉄也さんは黒い無地の大巾のメリンスの帯を簾司から取り出しまして一寸ためらって居りましたが

「仕方ない、帯を使ってやれ」

と云うと、俄にシヤツをぬぎ、ズボンを取

って素裸になりますと、そのメリンスの帯を相撲の褌のようにして締めました。

私は黒いメリンスの帯が鉄也さんの白いお尻にギユツと喰い込む様に締め込まれて行くのをカーテンの陰で、胸を躍らせて見て居りました。

美少年の白い肌に締められた黒い褌の対照の美は又とない魅力で私の心をゆすぶります。私ははも早や官能の刺激に耐える事が出来なくなり、カーテンをあけると裸のまゝで鉄也さんの前に駆け出し、その足元に倒れ伏してしまいました。

「すみません。私が悪いでした。いたずらしたのは私です。何とでもして下さい。すみません」

忽ち私は鉄也さんに荒々しく踏みつけられました。鉄也さんは棚の上の竹刀を取ると私のお尻をピシ／＼と叩きつけました。

「すみません。何でもします。すみません」
尚もはげしく振り下される竹刀の下で私は只じっとして耐えているばかりでした。

やがてグツタリした私は後褌を鉄也さんの

手でつかまれると、寝室のベッドの上に引きずり上げられました。

同じ位の年でも鉄也さんには主人としての

威厳があります。私は只鉄也さんの為すがままに身をまかせて無抵抗に致すより他はありませんでした。

その夜ベッドで二人はとうとう生れて初めての事を行ったわけでした。

(終)

人工女性「松平多恵子」

との会見記

滋賀雄 二

「人工女性第3号」の見出しで、先月東京の日本観光新聞に報道された、松平任弘氏と、渋谷の某酒場で会見した筆者は、同氏のあまりな数奇の半生に驚き、且つ真剣な人生航路の歩みに敬服した。幸に松平氏の許可を得たので、会見の模様を読者にお伝えしたい。

(筆者註)

松平氏は本年三十一才、某宗教大学出の秀才で、軍国時代には、海軍中尉として華々しく戦地で活躍された勇士である。しかも同氏は、某宮妃をイトコに、元伯爵を伯父に、元男爵を父に持つ名門の三男に生れながら、幼時より女性的精神の所有者であっ

た為、女装生活に憧れ、昨年遂に男性のシンボルを切り落し、髪を長く延ばして女装をし、名前も多恵子と改め、心身共に女性になり切っている人である。

◎

―筆者、今日はお忙しいところ御足労をかけまして。新聞の写真よりも、実物は遙かに美しいですね。男娼なんかは、昼間外出する時は、殆ど男装している様ですが。

―多恵子、私はいつも女装していますの。だって女ですもの……。今は男の着物は全然持っていないわ。

―筆者、こうして眼の前で貴女を見ている

と、昔男性だったとは一寸想像できませんね。髪は長いし、色は白いし、咽喉仏も殆ど出ていませんね。それに声がソプラノでとてもきれいですよ。

―多恵子、皆さんがすっかり女として交際して下さいますので、昔の男性時代が夢のようですわ。

―筆者、女になった以上、男と結婚したいと思いませんか。

―多恵子、私のような女を愛してくれる方があったら、結婚したいと思えますわ。

―筆者、貴女の恋愛観を聞かせて下さい。

―多恵子、ロマンチックかも知れませんが、肉体的よりも精神的な恋愛が好きです。お仕事に情熱をささげるのが男で、愛情に凡てをささげるのが女だと思っています。一口に云えば、フラトニックなラブが好きです。

―筆者、男娼については、どうお思いますか
―多恵子、私は肉体的なことは嫌いですから、男娼なんか軽べつします。人間は誰でも

人工女性「松平多恵子」さんの写真



子とばかり遊んでいました。中学へ進んだ頃から、日本舞踊が好きになり、尾上流の手ほどきを受けました。

その頃お姉さま（筆者註、後の李健公夫人となつた桃山佳子さんの）の部屋から、着物をこっそり持ち出しては、鏡の前で着込んだりして、一人で楽しんでいましたわ。或る時は、死んだお父さま（筆者註、元男爵の松平勝氏）から発見されて、メッタ打ちの折檻を受けたことがあります。

その頃から、肉体的には男性でありながら、精神的には女性である自分に悩みましたわ。中学時代から髪をのぼし、女装して不良学生にさそわれると学校をさぼり、映画館や喫茶店等に通いました。だから「女装のお坊っちゃん」なんて、新聞に書かれたこともありましたわ。

筆者、当時は、華族のことですし、御両親や兄弟や親類の方が、心配されたでしょうね。立正大学へ入学されたのはどういう訳ですか。

多恵子、宗教で私の倒錯した気持を直した

めだったのでしょうか。しかし結局は駄目でしたわ。

筆者、家出されたそうですが。

多恵子、「女性になりたい」という私の切実な気持なんか、全然みとめてくれませんし、その上変態だとか、家門の名誉を傷つける者として、全く罪人扱いなんですもの。居たゝまれなくなつて、中学三年の頃に家出してしまいましたの。

筆者、どの位、家出していましたか。

多恵子、そうですね、八ヶ月位だったでしょうかしら。東京から大阪へ出て、四国へ流れついた時は、無一文になって、高松で空腹のまゝ、倒れていましたの。高松城を見ながら、世が世であれば、あのお城の中で若様として暮せるものをと、思うと涙が出て仕方ありませんでしたわ。

筆者、高松の殿様と貴女の家とは、どういう間柄ですか。

多恵子、私の家の先祖は、光圀の兄で、代々この四国の高松城の殿様だったんです。

筆者、旅芝居に入ったそうですが、

多恵子、空腹でのびていた所へ、通りかゝった七、八人の旅役者の人達から拾われて、その劇団のメンバーに加えられました。

神や仏のような心があって尊いものですが、している仕事によって善くもなり悪くもなります。女の姿をしていても、まじめと女淫（筆者註、みだらな性行為を指す）とを区別してほしいのです。だから世間の人から、男娼と同じように視られると、ほんとうに腹が立ちますわ、でも現在では、それ等乗り越えて、一筋に芸にいそしんでいますの。

筆者、ところで、どんな原因や動機で女性になろうとしたのですか。

多恵子、原因や動機は幼い頃にあると思います。乳母が、死んだ姉の身代りに育てましたので、女の身振りや、言葉をおぼえ、女の

「筆者、何という劇団で、貴女はどんなことをしていましたか。」

「多恵子、ク筆本家庭劇々という四国だけを巡業する田舎芝居の一座でした。幼い時に習った三味線や日本舞踊が役立って、玉枝と名乗り、女形をしていましたわ。(筆者註、この巡業中の事は、長くなるので割愛して、これ稿を改めて発表したい)」

「筆者、海軍へ入団したのは、いつ頃ですか」
 「多恵子、太平洋戦争が始り、私のいた劇団がエロだといって、警察にあげられ、身元がわかって、家へ連れもどされました。それから立正大学の予科に入って勉強していましたが、戦争は段々と激しくなるし、女装も出来ないし、思い切って海軍に志願して、第三期予備学生として武山海兵団へ入団しましたの」
 「筆者、海軍の中尉まで進級されたそうですか、当時の模様を話して下さい。」

「多恵子、入団当時は、上官から『お前の声は女みたいだ』といって、よくなぐられました。だって私の声はこんな風にソプラノでしょう。だから『松平!』って呼ばれると、思わず『ハイ』と女のように長く延ばして返事しちゃうんです。」

海兵団から航海学校を卒業して少尉になる

と、上海の第二気象隊に派遣され、暗号解読の仕事をしましたの。やがて中尉に進級し、九江の気象隊長になりました。

終戦の時も、暗号をやっていた為、早く知って部下三名を連れて上海へ逃れました。

「筆者、上海での生活はどうでしたか。」

「多恵子、早速、髪を延ばして女装生活を始めました。丁度上海に小牧バレエ団がいましたので、小牧正英氏にバレエを習い、又支那芝居の女形を勉強して、中国舞踊をも身につけました。やがて帰還船に乗って、女装のまま、日本に帰って参りました。」

「筆者、帰国してから現在迄、ずいぶん苦労された様ですね。」

「多恵子、それあ、もう全く一生懸命でしたわ。親、兄弟、親類とも絶縁しててでしょう、生きる為は何でもやりましたわ。闇屋、ソバ屋の出前持、紙芝居屋等……。」

でもその間、踊りだけは続けたの。高田せい子や江口隆哉氏等から洋舞を習い、花柳徳太郎、瀬川喜久仙師匠から日舞を習って、瀬川喜久一郎と云う瀬川流の名取り免状を貰いましたわ。

「筆者、読売ホテルで、新作舞踊を発表されたそうですが。」

「多恵子、昭和二十八年の春でした。バレエの人と組んで、『霸王別妃』の虞美人を踊りましたの。でも今から考えると、只筋を追って、一寸変わった振付けをただけに止り、もっと踊り方自身に新工夫をこらし、或る心を表現したら良かったと思っています。まだ、力が足りませんわ。」

「筆者、ところで、貴女の多年の望みであった女性になられた手術の模様を話して下さい。」

「多恵子、手術の有様って……。」

「筆者註、ここまで話すと多恵子さんは、恥ずかしそうに顔を赤らめて、口をつぐんでしまった。筆者は、心身共に完全に女になつてしまった多恵子さんの初心な姿態に、今更驚異の眼をみはりつゝ、これからは、誘導質問の形をとらざるを得なくなつた。」

「筆者、手術されてから、どの位経過していますか。」

「多恵子、去年の五月ですから、もう一年半になります。」

「筆者、手術の動機は、コウ丸肉腫にかゝって、どうしてもコウ丸を切断しなければならなくなったので、この際思い切ってペニスも一緒に切り落そうと思われたのですか。」

—多恵子、そうなんです。

—筆者、よく医師が承知しましたね。

—多恵子、先生に一生懸命お願いしましたの

—筆者、手術の時は、痛かったですか。

—多恵子、麻薬がきいていますし、それに女
になれるという喜びで無我夢中で、痛いな
んで少しも感じませんでしたわ。

—筆者、手術後の経過が良好で何よりですね。
注射は何をしていますか。

—多恵子、あれからずっと女性ホルモンを
注射しています。

—筆者、ペニスとコウ丸を切断して、一応女
の形にはなりましたが、これだけではまだ本
当の女性とは云えませんか。

—多恵子、お金が出来次第、又手術をしたい
と思っています。

—筆者、直腸の一部を取って、人工腔を作る
手術は、昔のように難しいことではなくなり
ました。

—多恵子、人工腔に成功したら、将来、子宮
の人工移植をも考えていますの。

—筆者、子宮の人工移植をしたいと云うこと
は、赤ちゃんを生みたいのですか。

—多恵子、ええ、私、結婚したら普通の奥さ
んの様に、赤ちゃんを生みたいわ。

—筆者、最初のロマンチックな考えと、可なり
違ってきましたね。

—多恵子、だって、手術が出来て、完全な女

になれたら考えも現実的になると思います
わ。今は独身で呑気に暮らしていますけど、好
きな人が出来て結婚できたら、炊事でも、洗
濯でも、裁縫でも一生懸命にやって、良い奥
さんになりますわ。

—筆者、貴女の現在の生活費は、踊りの稽古
で得ているのですか。

—多恵子、そうです、お弟子さんは、大人や
子供合せて三十人ばかりいますの。でも生活
ぎり／＼で、安定するには百人以上のお弟子
さんがいないと出来ませんわ。

—筆者、踊りの出稽古の外、何か仕事をやって
いるのですか。

—多恵子、今は専ら、舞踊理論と、舞踊譜の
完成に情熱を注ぎ込んでいますの。(筆者註
舞踊譜というのは、立体的に動く踊りを、方
位、角度、速度、音楽等々に分析して、各種
の簡単な記号で表わし、それを五線譜の如く
に平面化するもので、彼女独特の考案によるも
のである。)

私って女は、凝り性なのね。日々の生活費
の中から、ブラウスを買う予定の金を残して
いても踊りの参考になる本を見つけると直ぐ
買ってもらうんですよ。こんな所ちっとも女
性的でないと自分で思うことがありますの。

—筆者、人工的に女性になっても、やはり完
全に女になり切れない面が残っているのでは
しうね。

—多恵子、そんな面があるかも知れません
わ。踊りにばかり夢中になったり、数理哲学

(筆者註、彼女の研究によるもので、東洋
の神儒仏、三学一致の法則を立てて、数理的
に東洋哲学の一致点を見出すもので、新しい
東洋の思潮を生み出そうとするものに凝った
り、天台宗の止観本を出して読んだりして。

—筆者、女性になっても、勉強することは結
構なことだと思います。哲学や宗教はいつ迄も
捨てないでほしいですね。

—多恵子、でも私、とっても寂しがりやです
の。親、兄弟、親類と離れて暮らしていますの
で、時々わけもなしオセンチになったり、又
反対にむやみに楽天的になったり、そんなこ
とが周期的にまわって来ますの。

—筆者、将来はどうなさるつもりですか。

—多恵子、私のような女でも、結婚しようと
申込まれる方があったら、お互に理解し合い
愛し合った上で一緒になってもよいと思って
いますわ。でも舞踊は一生捨てないつもりで
す。五十才位になったら、お坊さんにでもな
って、宗教方面に転向して晩年を送りたいと
思っています。今でも時々、大蔵経を出して
読んでいます。

—筆者、貴女を理解するよき男性の現れるこ
とを念願すると共に、将来の幸福を祈ります
本日は色々とお難うございました。

〔遺稿〕

― 若き女性の手記 ― (二)

悪の広場

角 皓 子

西 条 武・画



蟬の鳴き声をきいていますと、もう秋だと何か不意に感ずるのですけれども、毎年ほかの季節にくらべて秋にだけ特に敏感なのは、やはり私の感傷癖のせいなのでしょうかしら。でも感傷だけでは処

理しきれない問題が、私たちの生きてゆく上には数多くあるということが、近頃ではだん／＼判ってくるような気がします。

きよう久し振りに、クラスメイトだった杉野絹子さんからお便りを貰った。しかしそのお便りは、私の感傷を一層募らせ悲しませるだけでした。――井上友子さんが死んだ。何という悲しいお便りだろうか。あんなにいつもお元気だった友子さんが日本脳炎で死んだなんて、それにしても随分子供っぽい病気でなくなられたものだわ。……皓子にはとても信じられないくらい。

でも現在の私の境遇に照し合わせて、このショックは非常な圧力となつて、私の躰にのしかゝってくるように思えるのでした。何か今まで私の触れなくなかったものが、不意に私の前に飛び出してきた感じがした。

あんなに親しくおつきあいしていた友子さん。……勉強のよく出

来る明るくおとなしい方でしたのに、本当に可哀そうなことをしてしまったものだわ。

世の中のはかなさと言うものが、私にも判るような気がするけれども、何だか無性に寂しくってやりきれなくなります。

逝った人を限りなく惜しむ気持。誰も彼もが、健康で明るく生きてゆけたなら、そうして生きていることを大切にしてくれ、仲良く生きてゆけたなら、と何かそんなことを心の底からしみじみと感ずるのでございます。

私は早速杉野絹子さんに返事を書く、只ぼかんと流れてゆく白雲を見るときもなくレースのカーテン越しに眺めていましたが、ふとある事を思い出していました。

「……あら、いやだわ、又あしたあたりからあの憂鬱なお客様が、今日は？って、やってくるかも知れない。そうだったわ。もうそろそろやってくる頃だわ……」

私はそう思いあたると、そっと腰をあげて筆筒の処まで歩みよっていきました。

私たち女性だけの処に、毎月毎月、ちやんと決まって訪れてくるもの。

——お客様！　なんて素晴らしい表現でございましょう。私はいつもこう呼ぶことにしておりますが、でもこの素晴らしい表現法は残念ながら私の考案したものではございませんの。宮田重雄先生のお宅で奥様やお嬢様がそう呼ばれているのを伺って、素晴らしいと思い、それから私も真似ているのでございます。

筆筒の抽出を開けて調べてみますと、脱脂綿が切れているのに気付きましたが、シーズンバンドの大分くたびれたのを手にします

と、何か私は一人で顔を紅らめていました。

幾らなんでも、これではちよっと恥しい。奮発して新しいのを買おうかしら……。そんなことを考えている時、私はまたしても一つの冒険心が、むら／＼と私の心の中に頭をもたげ始めているのに気付いていました。

私のお客様が訪問中、兄はいつも苦虫を踏み潰したような顔をしては、私をちらっと見るのです。そりやあ女の私だってさえ、あの匂いには堪らなくなるのですから無理ありませんけれど、私はこんなとき女である自分がひどく情けなくなつて、つい兄が憎らしくなってしまうのです。あんな眼で私を見なくなつたってよさそうなのを……。

私はふと、不断よくあんな侮辱したような顔で私をみる兄に、シーズンバンドを無理に買わせてみたら、さぞ痛快だろうなあ——とそんなふしだらな想像を思いめぐらしているのでございました。

——月経帯を買わせる。

兄はどんな顔をするだろうか？　私は思ってみるだけでも、何だか体がゾクゾクしてくるのを覚えるのでした。

そして、そんな時、ふと、そんな嗜虐癖が顔をだして、兄に逆ってみたいような衝動に私を追いやるのでございました——。

でも、やがて冷静にかえりますと、そんな自分がひどく浅ましくみじめに思われて、その考えを思い返して手紙を手に執りますと、私は散歩がてら、外へ出て行きました。

二

秋の太陽とは申せ、まだ、そのまぶしいばかりの陽ざしを躰いっ

ばいに受けながら、私は町の繁華街まで出ますと、杉野絹子さん宛ての手紙をポストに投函してから、街角の小綺麗な薬局に這入りしました。

中には丁度兄ぐらいの年配の二十七、八歳位の男の人が一人、買物をしているだけでひっそりとしていました。

私は早速、もうひとりの女店員の方に、シーズンバンドを見せて頂いて、二、三種類の中からなるべくぴったりと股に密着し肌ざわりのよさそうなのをあれこれと吟味してから、そのうちのトリコットの白のブローズ式になったのを求めると、忘れかけていた脱脂綿と、それにもう一つなくなっていたメンソレタームのことを思い出して、それもついでに求めると、私の横でぐずぐずと買物をしている男の方より、一と足先きに外へ出しました。

私はその帰り道、行きかう人々の視線がある一点に集中されているのにふと気がつきますと、私もその視線の行方を追いました。

そこには丁度、皓子と同年配ぐらいの二人のお嬢さん風の方が、しかもショートパンツの腕も太腿も白く輝くばかりにピチピチとした健康な肌を露わに剃きだしにして、自転車に乗りながら丁度、私の前を通り過ぎようとしている処でございました。

何という大胆な娘さんたちでしょう。それにしても何と私の身にくらべて健康的で愉しそうな表情をしている娘さんたちでしょう。

しかも万人の眸を浴びながら、それはまるで舞台上のヒロインのような優越感をすら満身にたぎえて、その上一種のそれと判るポーズすら作っているのです。

私はこの二人を見た時に、咄嗟に女学校時代にクラスメートが話しあっていた、女が自転車に乗るのは或る種の満足に耽溺できるか

ら……と、言う話を思い出していましたが、そう思った瞬間、何かわけの判らない嫉妬心が、むら／＼と私の胸中にたぎってくるのでございました。

ピチピチした健康な二人に、……そうして私が自転車に乗れなかったからなのかも知れません。でもその中で味わったものは、私の孤独感でした。山の中にひとりて居る時よりかも、雑踏の中に居る時の方が一層深まるあの孤独感でした。

私は孤独——？　そう思うと、私はとてもその二人を最後まで見送ることは出来ませんでした。私は努めてそっぽを向きながら、家路を急ぎました。

私は孤独なのです。孤独に捉われた私が、然しそれをいくら思っ てみた処で、孤独から解放されるばかりか、私は一層みじめな孤独感に突き落されていくだけでした。

私を満たし孤独から解放してくれるもの、それは只ひとつ、今となっては絶え間ない慾望を自から求め、その中に身を浸すより他に方法はないのでございます。

その翌日、案の定お出ましになったお客様の憂鬱さを身に感じながらも、午後、母のお使いに出たのを幸いに、物置においてある自転車の在処まで急ぎ足に駆けてゆきますと、寝巻を脱いで、昨日買った真新しいシーズンバンドを嵌めたまゝの姿で、サドルに股が固定された自転車のペダルを夢中で、交互に踏みかわすのでございました。

後輪が勢いよく唸りをたてて、気持よくグルグルと廻転する音が何かわけの判らぬ衝動となって私の胸に突き刺さってくるのでございました。

「私だって……私だって……」

私はきのうの二人を見返すように心の中でそう呟きながら、何故かあふれ出る涙をハラハラとこぼし、尚も夢中でペダルを力一杯、踏み続けるのでございました。

三

いつの間にか秋も終り、季節は冬となっていましたが、吐く息がもうそろ／＼白く煙のように見え始めだしました或る日、私はもの想いに沈んでいた心をおしやるように、いつもの妄想に執り憑かれベッドの上で自分の口にも余る程のズロースを無理矢理にぎう／＼押し込めると、痴呆のように大きく開いた口の上から、しっかりときつく手拭で縛りつけました。

私は自分の猿轡姿を、手鏡に写して見ながら、又してもその不思議な像をまじまじと見詰めているのでございました。

これが私の姿なのだろうか？　これが皓子なのか知ら？　私は幾度、猿轡の自分を鏡に写して見ながらそう思ったことでもございましたよう。そうして得も言われぬ陶醉に身を悶え乍ら、私はその瞬間の

武



悦楽に浸っているのでございました。

母や兄の眼を盗んでは、病気をいふことに自分の部屋に閉じこもり、金属の棒や、ハンカチや、ストッキングや、ズロース等の色々なものを口の中に一杯に詰め込み、息も詰まるかと思われる程の猿

鬱の昂奮と陶酔に痺れながら、狂おしい時日を過してきたことでございましょう。

私が何故ズロースの猿轡にこれ程までの異常な興味を抱くようになったのかと申しますと、これにはある忌わしい思い出があるのでございませうけれども、これはいずれ後程申し上げたいと思っております。

その時は、本当に堪えられない死ぬ程の侮辱と苦痛を感じたものでしたが、今ではあの時の思い出が忘れられないばかりではなく、一種の悦びの昂奮をまじえた刺激となって、甦ってすまいるのでございます。

と、その時、私の部屋に近づいてくる足音が、聞えたように思われたのでした。

私は慌てゝ、猿轡を解く間もなく、そのまゝベッドに素早く横たわると、蒲団を頭から引被って、息を殺しながら猿轡をほどくのでした。

「何だ。眠っているのか……」

それは兄の声でしたが、兄は私が本当に眠っているとも思ったのでしようか、それでもまだじっとそこに立っているようでした。

私はしらばくれて眠った振りをしていました、やがて気持が少し落着いてきた頃、そろ／＼と蒲団から顔を出していました。

「何だ。起きていたのか？ おかしな奴だなあ、蒲団なんか被ったりして……そんなことをしちや苦しいだろうが……」

「うふふふ……」私はとぼけていました。

「それよりどうなの、気分は？」

兄は勤めから帰ってくると、必ずこうして私の部屋にきては、私

を労わるように言葉をかけて下さるのでした。

私はこんな兄にほんとに済まなく思い、心の中で感謝して手を合わせることも度々ございましたが、口に出して申したことはございません。

「やはり入院した方がいゝのじやないかねえ。その方が何かと充分な手当も出来ると思うし……入院費とか治療費は心配しなくともいいのだ。それに伝もないことはないから、入院するとすれば割り合

い早く入れるかも知れないし、……その方がいいのじやないかね。只、兄さんが邪魔だから、無理矢理に皓子を病院へ追いやると誤解されては困るのだがね……それは判って貰えるね。そりや兄さん

だって、出来ることならそんな処へ皓子をやりたくはないのだから……。大きな声では言えないけれども、皓子も知っての通り、今で

はこの世で兄さんと皓子だけが血肉を分けた中なのだからね。無理にとは言わないけれど、今の話よく考えておくといいいねえ……」

兄はおだやかな調子で私の顔を見ながら喋り続けていましたが、私は蒲団の中で猿轡を弄びながら、只黙ってきいておりました。

私は心の中では済まなく思いながらも、何とも言いだせませんでした。その孤独さもさることながら、私には兄にも打ちあけられない性癖のために、とてもその決心がつかかねるのでございました。

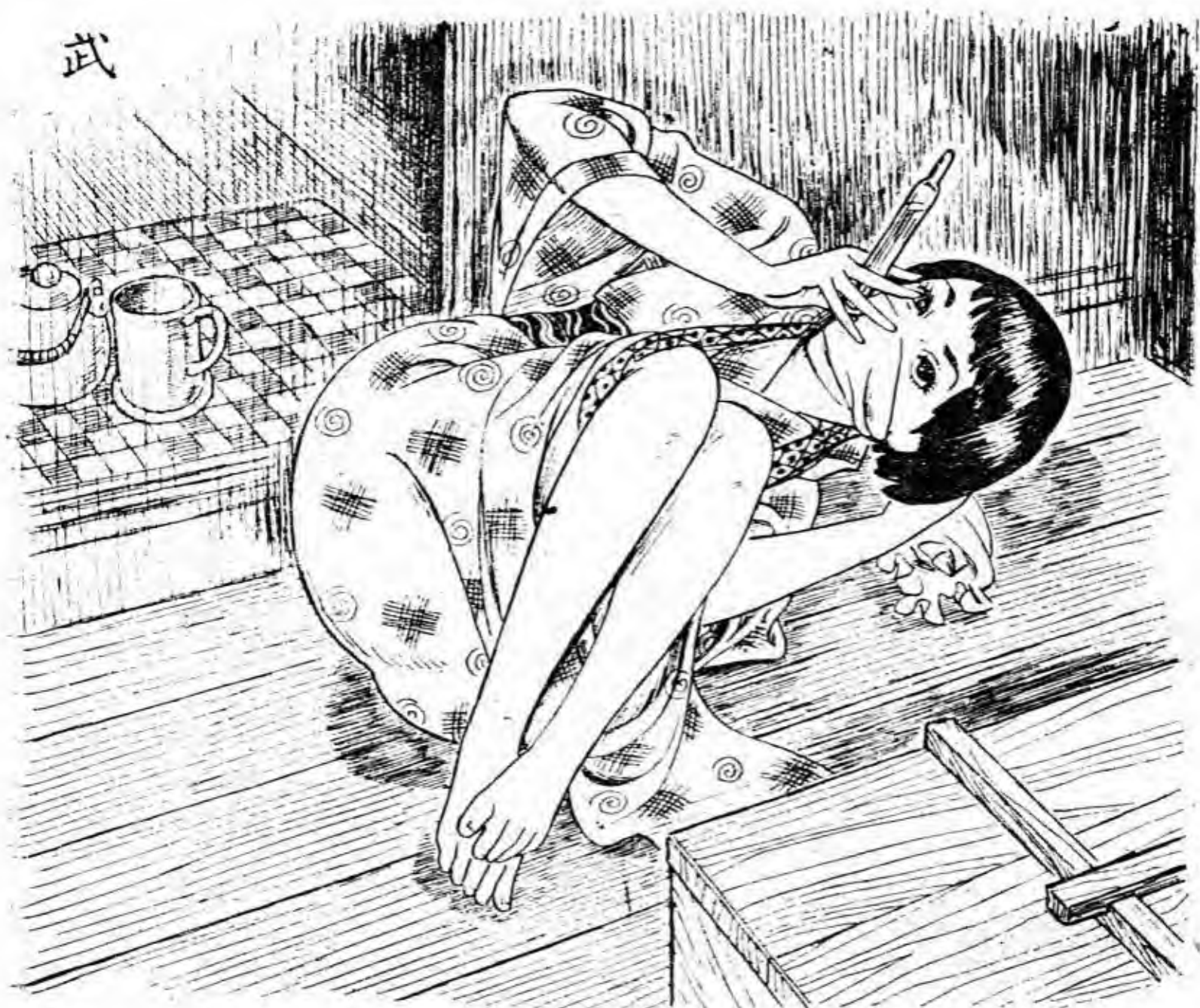
只、浅ましい病癖のために——何ということございませう。

兄がもしこのことを知ったとしたら、何と申され憤慨されることでしょうか。

兄はそれだけ言うと私の部屋を出ていかれましたが、私は何かシーンとなって一人で考え込んでしまうのでした。

翌日、私は朝食を済ませてから、いつものように新聞を隅から隅

武



まで眼を通しておりますと、偶然といえましょうか、ふとイチジク浣腸の広告が眼にとまったのでした。

その図解入りの広告を見た瞬間、私の眼は異常にそこに吸いつけられていました。

私は浣腸という活字を見ただけで、どうしても体が震え、激しい衝動を感じるのでしょうか？ それが何故だか自分でも判らないのです。何か不思議な糸が私を操るのでございます。自分が自分で怖くなる程に、その糸が私を玩具のように弄ぶのでございます。

私はふと、こんな工場で働いている人は、どんな人達なのだろうかと思像してみました。私と同じ位の女の人達かあるいはもっと齡下のそれとも齡上の人たちが働いているのかしら。そうしてどんな工程で仕事が運ばれ、あの見事なイチジク浣腸が完成されるのかしら……等と私はその広告を見ながら色々のことを想像してみるのでした。

そこで働いている人達は、きっとみんな浣腸が好きな人達ばかりなのではないかしら……。そうして私もそんな工場で一日中働いたらどんなに嬉しいだろうなあと、想いめぐらしてみるのでございました。

それはきつと、私の想像以上に愉しく生きがいのあるお仕事に相違ございません。私は何かそんな想像に思いをはせては、ひとりで興奮しているのでございました。

でも私は、やはりイチジク浣腸よりも、注射器型かイルリガートルの浣腸器の方に、より一層の興味と昂奮を感じます。

私はそんな妄想に遊びながらも、もう何かお尻のあたりがムズムズするような衝動を感じていたのでした。私は又、母のお使いに出るのを待ちわびるのもどかしく、——そうしてこの時間だけが、私の最も自由に振舞える時間なのでございますが——、母がお使いに出たのを見届けますと、早速、お風呂場へ小走りに駆けて行きました。

浣腸器は、お風呂場の棚に置いてあるのでございました。——30
CCの浣腸器——。

私は早速、注射器型の浣腸器を箱から取り出しますと、震える手で、二、三度上下に動かしてみましたが、度々の浣腸で薬液がもう切れているのを知りますと、手早く、やかんを台所の瓦斯にかけました。

その間に、私は少々寒いのを我慢しますと、早速ブロースを脱いで用意にとりかゝりましたが、それで猿轡を嵌めるのでした。

やがて少し熱い目のお湯を浣腸器に採っておいてから、私は冷い板の間に転がり横に臥ますと、首と脚膝の関節の所を海老しぼりのようにきつく縛ってから、次の瞬間の期待に震えながら、浣腸器を手執りました。

四

やがて十二月、もうその年も幾多数多くの事件や思い出を残し、その登音を歴史の一頁一頁に刻みながら、もう半月たらずで、その再び巡りこぬ年を終ろうとしていました。

例年の通り師走の町は何かにつけて気ぜわしく、人々の気持も落着かぬ様子でございます。でも考えると人間なんておかしいもので

鯉鯉しながらこうして毎日々々を、相も変らず慌しく生きているのでございます。

みんな他の方は、どんな愉しい毎日を送っておられるのだろうか、私はよくあれこれと考えて見るのでございますけれども、その家庭に一步這入れば、きっとみんな五十歩百歩の坦々とした生活なのでございましょう。

丁度十月から暴落し始めた株は、相も変らず毎日々々止まる処を知らぬげに泥沼の中に落ち込んでいました。

私には株なんていう事は全く判りませんけれど、それでも兄の感化のため、いくらか気を留めるようになっていたのでございます。そうしたある日、いつものように兄が私の部屋に這入ってきまして、私が、

「みんな随分下っちゃったのね」と話しますと、

「あ——又、世の中が不景気になるだろうね。いつでも株がそれを一番敏感に反映するのだから……それに失業者はあふれるし、現にデパートの売り上げも落ちていく。世の中っておかしなもので、平和な時代がくると不景気に悩まされるのだよ。何とかかんとか云い乍らも、現にある労働組合員の中にも、又どこかに戦争が起った方が、サラリーをたんまり貰えていゝなんて言っている人もいる位なんだから……。それでも自分が捲き込まれるような戦争は厭で、よそに起る戦争を喜んでいゝのだから、まるで火事見物の弥次馬みたいなものだよ——」

兄がそう言って喋るのを、私は興味深く聞いていましたが、

「どう、だいぶ損しているんじゃないの？」

と、更に訊きますと、兄は笑いだして、

「えへへ……素人だなあ。株はね。買うだけが能じやないのだよ。カラ売りすることだって出来るし、誰だって危い時には現物を繋いでいる。だから現物だけを後生大事を持っている人が、一番損をして馬鹿をみるのだよ。株は誰かが損をするから儲かる人がいるのだからね。だから言ってみれば、一種の相手の見えない戦いかも知れない——」

そう言ってみる兄の眸がキラキラと輝いているのが不思議なほどで、競輪もパチンコも全然やらない兄が、株にだけ打込んでいる姿なんて、本当に皓子には怖いみたいなのです。株式投資は人間修業だ、と言うのが兄の口ぐせですが、株の達人に性格的にほれぼれするような人間的な親しみを覚えるのは、性格がそれによって陶冶されているからだと申すのです。

だから広い世界観、人世観、社会観がなければ、只バクチのようにやろうとすれば、必ず失敗するだろう。とも言われるのです。

私はそうして年の暮頃から心算かに告白記か何かを書いてみようかしらと思ひ始めていました。でもそれを雑誌なんかに発表したいなんて言う考えは毛頭なく、只なんとなく書いて見たいと思うだけなのです。

でもいざ書き始めてみますと、小説を読んだり「奇ク」に書かれている方々のように、とてもうまく書けないことを知ったのでございしました。読むことと違って、いざ書くとなると随分むずかしいものだ、しみじみ思ひあたったのでございます。

それでも、かじかむ手を擦りながら、毎日気の進む時には、せつと筆を進めるようになっていました。

縛った絵や浣腸の絵も面白半分に書いてみましたが、これも中々

うまくは描けませんでした。

そうして相も変わらず、猿轡を嵌めたり、脚を縛ってみたり、浣腸をしたり、カテーテルで用をたしたり、……（最も前にも申し上げましたように、これだけは公然たる使用物でしたから、誰憚る処なく使用してりましたが、寒い時にはわざ／＼トイレまで出向かなくとも済みましたので、一層重宝しておりました）

ある日、お勝手の方で「今日は」と誰かが呼ぶ声がしたのですが寒い時でしたし、それに母もお使いに出て留守の時でしたので、つい面倒臭さくてそのまゝにしておりましたが、あまりしっこく呼びますので、綿入れを引掛けて勝手口に出て行ってみますと、そこに一人の若い男の屑屋さんが立っていて、

「何かお払いものはございせんか？」

と、私に声をかけました。

「別にありませんわ」

「何でもいいんです。新聞でも何でも……今日はどういう訳か一つも商売にならないのです……」

その屑屋さんは、さも困ったという顔付きで更に、何か少しお払い物を出してくれるようにと、頭をさげて頼むのでした。

「ボロ屑でも何でもいゝんです……」

私は何かあんまり気の毒になり、可哀想に思えて来るのと同時に突然、いつもの冒険心がむくくと頭をもたげているのでした。

私は、瞬間後向きになると、サッとその場でズロースを脱いでいました。そうしてそのズロースを屑屋さんの前に差し出し乍ら、

「はい。これあげるわ。でも私があげたこと誰にも言っちゃ駄目よ。ほんとに喋っちゃいやよ。だけどこんなもの一つじやしようが

ないわね。でも何もないよりはましでしょう」

私は何か訳の判らぬ昂奮にポーッとしていたが、相手の屑屋さんも顔を赤らめて、どきまぎしているのがよく判るのでした。

「済いません……。でもこれだけでは秤にかけようがありませんが……」

「いいのよ。あげるわ……。でも、それまだ充分に穿けるのよ——」

屑屋さんが、それに応えるようにズロースを拡げると、中を覗きこもうとしましたので

「いや！ こゝで見ちやあ」

私はそう言うと、部屋に駆け込みました。

「済いません。毎度ありがとうございます」

そう言う上ずった声だけが、はつきりと私のあとを追ってくるのでした。

あゝ、私は侮辱された。あの屑屋さんは、私のズロースをみて何と思うだろうか？ 私は辱められるのだわ——。あの人に——。私はベッドに潜り込んでからも、その興奮がいつまでも醒めませ



んてした。

そうしてそれと同時に、いつでしか散歩の時、私のズロースを欲しいといった、あの坊主頭の少年のことを思い出していました。私もまだあの頃は、今のように人に自分のズロースを与えて悦ぶ

と言う趣味は持っておりませんでしたので、あの時はちょっとびっくりも致しましたが、きつとあの少年は、ズロース狂崇とかフェチシストとか言われる種類の少年だったのでございましょう。

ですから、私の露出癖を一層深め、興味を抱かせるようにしむけた動機と申せば、少くともあの少年にも、その一斑の責任があるようにも、私には思われるのです。

それにしましても、自分のズロースを見ず知らずの人にあげて、その侮辱と露出癖を愉しみマゾ感に浸るなんて、何と浅ましいことございましょう。

でも若し、こんなことに興味をお持ちの方が（私も始めのうちは大変軽蔑していたのでございすけれど）、いらっしやって、人知れず私のはき古したズロースを、欲しいと仰有るのでございしたら、皓子思い切って差し上げてもよいと思っております。

五

兄の帰宅が、このところ大分おそく続いています。会社が忙がしいのかしら？ いゝえ、きつと又、恵子さんと遊んでいるのに違いないわ。兄に一度、恵子さんて仰有る方のお写真みせて頂いたことがあるけれど、ちよつと見たところは、とても粹で垢抜けのした、艶っぽい感じのする方だったけれど、兄はこの恵子さんて方を愛しているのかしら……？

兄の話によりますと——恵子さんは、以前ある一流楽団のマナーシヤ—S氏の奥さんであったのが、こう言う社会によくある関係から別れて、いま子供さん一人を抱えながら、ある会社の秘書をしている二十四歳の方って言うことでしたが、何か兄らしい愛人？ の

ように皓子には感じられるのでございました。

兄のような人は、きつと猛烈な変愛をするのではないかしら……。何か皓子には、そんなような気がするけれど……。案外一本気な兄には、やっぱり情熱的な女の方が向くらしいのね。それでいて内に女らしさを充分に兼ね備えたやさしさのある方——。これが兄の好きな女性のタイプらしいわ。いつかそんなことを、ちよつと洩らしていたことがあったのを、皓子は覚えていたけれども、もしこの方が兄のお嫁さんになったとしたら、皓子にも生れて始めてお義姉さまが出来るのだわ……。あゝ何たかうれしくなっちゃうみたい。そうしたらうんと甘えてやるわ！

「早く、皓子もあんまりトウがたゝないうちに、お嫁に行くんだなあ——」

なんて、冗談半分に私をからかいますけれど、私なんかを好いて呉れる方なんてあるのですか。こんないろんな性癖のある事を知ったら、どんな方だつてきつと、びっくりされるに違いありませんもの……。

私は傷心に泣きたいような気持ちをおしやるようにしながら、和服姿で、寒空の中に、ぶらつと出掛けて行きました。

外は随分寒いけれど、背すじがジーンとしてきて、何だか気持ちが引き締り、気分よく感ぜられるのでした。

あの女の方、随分パリツとして素敵な洋装ぶりだけれど、そうしてあんなに澄ました顔をして歩いているけれど、あの女の方も内心では流腸が好きじゃないかしら、カテーテルも、……人一倍好きなのじゃないかしら等と、私は駅の方から吐き出されてくる勤め婦りの方々の姿に、そんな妄想をめぐらしてみるのでございました。

兄が珍しく、久し振りに早く帰ってきました。

「きようは随分早いお帰りね！」

と、私が兄に声をかけますと、

「なに言ってるんだ。きようは土曜日だよ。皓子は、どうかしてるね？ 毎日、家に居ると、何時が土曜日だか、わかんなくなっちゃうんだろ——」

と、言って笑っていましたが、ほんとに私ってどうかしてる。兄の言われる通りだから、仕方がないのです。

「はい、お土産！ 退屈だろうと思ったから、本買ってきてやった」

兄はそう言う、S 婦人雑誌を私の前に差し出しましたが、それを見ると、

「どうも、有難う！」

と、私はひと通りのお礼は申しましたものの、別に何の感動もございませんでした。

こんなことを言うと、兄に悪いのですけれど、私の心は、もうそんな婦人雑誌を受付けはしなかったのをごさいます。

私は最早や、洋服のスタイル、お料理の作り方、編物の方法等に對して、（そりやあ私だって女ですから、申すまでもなくそう言う

ことには、ひと通りの関心は持っておりますけれど……）でも、それ以上の興味は惹かなかったのをごさいます。

夕食の後、私は又ベッドに這入ると、憑かれたように、妄想の世界に遊ぶのでした。そうしたあとの重苦しい頭を圧えつけられるような不快感と寝不足に悩まされることを知りながら、どうして私を操る系が、こんななまで狂おしい悦虐の脅迫観念の中に、私を追いやるのでございましょう。

どうして私をこんなに苦しめるのでございましょう。こんなことでは……こんなことでは、とても皓子の病氣など癒るわけがございせん。

でも、でも、私はこの狂おしい操りの系から逃れることは出来ないのをごさいます。どうしても振りきれないのでございます。

あゝ今のうちに、何とかしてこの狂おしい脅迫観念から逃れなければ、一体私はどうなるのでございましょう。このまゝでは皓子の躰は、一層虫ばまれ腐ち果てるまでございます。でも皓子を打ちのめそうとする被虐の系は、怒濤のように私の躰にのしかかってくるのでございました。

それと共に、あの上野の人里離れた森で辱められた、あの日の忌しい思い出が悪魔のような圧力となって、私の胸にまざまざと甦ってくるのでした。

あの日の忌わしい思い出！ そうなのです。あれ程の忌わしい思い出でありながら、それが今はむしろ甘酸っぱい追憶となって私の胸に甦ってくるなんて、本当にどうしたと言うことなのでございましょう。何故、醜い痛烈な自責の念となって、私の心に甦ってこないのでしょうか？

数年前のあの初々しい清純な心、醜い自堕落を反発する心、憎悪する心、そうしてたった一つの、あの私の良心さえも、いったい何処へ行ってしまったのでしょうか？

——あゝ、私は自分自身が判らない。

私は苦しみ悶えながら、いっしかまどろむと次第々々に深い眠りの中へと、惹き込まれていくのでございました。

（おわり）

懸賞【告白と手記と体験】入選

不貞妻の告白

島津輝子

市場へ買い物に出た道すがら、本屋の店頭でふと手にとってパラ／＼とページをめくった雑誌、おセンチな少女の表紙に気がひかれて、何げなく手にしたのですのに、私はその雑誌、奇譚クラブを立読みしてゆくうちに何か、身内がぎゅっとひきしめられるような気持で、いつしか、その本にひきつけられてしまいました。

「告白記」と書いたその中の記事に、私の胸には、すぎ去った日のあまりにも生々しいおもい出がよみがえって参りました。遠い日の悪夢と思って、私の胸にだけそっとしまっておこうと思った出来事も、皆様の何かの参考になるならばと、私はすべてを告白して書いて見ようと思ひ立ちました。

今から四年前、当時二十三才だった私は、五つと三つの二人の子供の母親として、夫と共に、夫の勤めている会社の社宅で、ほんとうに幸福なあけくれを送って居りました。

その時、夫は三十才、大学の応用化学科を出てからずっと、この化学工業会社の研究室に勤めている真面目なサラリーマンでした。私にはよき夫、子供達にはやさしい父、そして、酒もあまり嗜まず、かけ事一つするでなし、どちらかといえば、冗談口もた／＼といったこともない無口な、まことに申分のない

夫でございました。

見合で結ばれた私達ではありましたが、そんな夫を私は理想の人としてかぎりなく愛して居りました。平凡な波風一つ立たぬ、おだやかな私達の家庭でありました。近所に住む未亡人のだれ彼と、たえず／＼をくりかえしていた父、それで嫉妬にヒスギミになつて、ことごとくに父に拵おどろっていた母、そうした父母の生活を知っていた私にとっては、何だか、物足りないような気になる時さえありました。幸福ではあるが、毎日のあまりにもはんで押したような生活が、勿体ないことではありますが、時々いやになる事もありました。私の血の中には、父のあのほうじゆうな気まぐれの性質をうけついで居たのかも知れませんが。二人の子供は、どちらかといえば母の私よりも父である主人をしたって居りました。でも、まあ／＼私達の生活は、世の多くの常の夫婦の如く平凡ではありましたが、又、それだけ平和な日々がつゞきました。だが、私達の生活が根底からくつがえされる日が突然やって来しました。それは鬱陶しい長い梅雨もすぎ、身も心もすが／＼しい初夏の頃、勤め先の事務所で夫は咯血してしまいました。あまり突然な出来事で、私はすっかりあわて／＼しました。そんな時の心の構えについて、平常から何一つ考えていなかった私で

した。そして、その日から夫の療養生活が始まりました。十日、二十日と、私は只おろろするばかりで過しましたが、日がたつにつれて咯血もおさまり、夫は初期の結核だから養生さえすれば、すぐ治るといふ医師のすゝめで療養所へ入院する事になりました。咯血してから丁度一カ月目、夫は汽車で四時間以上もかゝる隣県との境近くの山間のサナトリウムへと去ってしまいました。二人の子供を実家へ預けた私は、心持ち痩せて元氣のない夫の手を握って、病室まで送ってゆきました。

後に残った私は、しばらくの間は放心したようなうつろな毎日の連続でした。これから先、何年かゝるかもわからない別居生活の事を思う時、私は、たえられないようなさびしさにおそわれるのでした。夫が去ってから、二カ月も経った或る日の事でした。便所のくみとりをたのんでいた私は、いつものようにくみとり券に印を押していました。会社からやとって居るこのくみとり人の男達は、すんだ所の印をもらって帰るのが常でした。くみおえた男はちらっと私を見上げて、

「奥さん、小便の方はいつも空っぽですねだんな、居ないのですか」

と云々しました。私は、はっとして、思わず男の方を見て、

「ええ、一寸ね」

と、言葉をにこしてしまいました。

ずんぐりした体、骨太い陽にやけたたくましい腕、ギロリと光る目、夫とは全く違ったタイプのこの男が、何だか不気味になって来て、あわてゝ、裏木戸を閉めて内へ入りました。帰る時、心なしか男の目がキラリと光っ

けような気がいたしました。

夫と別れてから三カ月、人一倍健康な私の体は、夜になると夫がたまらなく恋しくなってきました。夜、もん／＼としてねむれず、ほんとうにねむりにいるのは、あけ方のことでした。夫の病氣に対する心配と、満たされぬ性のなやみで、私は自分でもげっそりとや





つれたと感じるぐらいでした。となり近所の人々は、何かと私をなぐさめ、はげましてはくれますが、私の心が、かたくなで、ひがんで居るせいかわかりませんが、なぐさめてくれる言葉の裏には、女一人の私の行動にたえずこうき心をもって眺めているように思われて、仕方がございませんでした。

特に隣近所のうるさい、社宅の事とて、私の一きよ一動は、すべて人々の目を意識しきして動かなければならなかったのです。ほんとうに味気ない毎日でございました。夫の病気はよくもならず、悪くもならず、サナトリウムに面会に行っても、つとめて性の話はさけ手をにぎり合っただけで、その日の汽車でさびしく帰ってくるのが常でした。

そして夏もすぎ、秋もあわただしく散る落葉と共に、その年も暮れました。月日は流れて、又、うとうとし、思い出すのさえ、いやな梅雨の季節がやって来しました。あのこえくみとりの男は、それからも時々やって来しました。ギロツと光る目で私を見つめ大便所の戸だけを開けて小便の戸はもう開けてみようとせせず、がっかりとした肩をそびやかせて去ってゆ

くのでした。

二

朝からひどく降っていた雨が、夜になってますく／＼ひどくなり、ザーッと、たきのような音をたて、雨樋にあふれて、庭へ流れ落ちていました。

二人の子供はすでにねむり、スタンドの灯で本を読んでいた私は、十二時を打つ時計の音に本を伏せて、横になっていました。いつもの事ながら昨夜はとりわけねむれず、夜通し夢になやまされた私は、床には入ったらずぐねむってしまった。どの位ねむったか見当もつきませんが、何か重苦しく息のつまりような夢に目ざめた私は、思わず「あッ」とさけびました。あの男の顔、あのギロツと光る目が、たくましい体が、私の目にとびこんで来しました。

あわて、起き上ろうとする私の口を押えた男は、「しッ、しずかにしないか、今更あわてたって同じだよ」と、ひくい押しこらしたような声でいうのでした。その男の言葉は、目に見えない縄でひし／＼と私を縛りつけていったのです。声をたてれば私の恥、いゝえそれもありましたが、私のこゝろは、もういつの間にか私の気持とは反対に、しっかりと彼の男にしがみついて居りました。夫と別れてからも一年近く、私のからだは長い間の禁欲に、がまんが出来なかったのです。理性

も、何も遠い彼方にきりのように消えてゆきたゞ、眼の前の誘惑におぼれていききました。長い間ひとりでいたからでしょう、その夜ほど、私は未だかつて、夫とでは感じた事のないほどの喜びを知りました。

あゝ私は、その夜を境として、人妻としての道をふみはずしてしまつたのです。

三

いけないと心にちかひながらも、夜になると、なぜか彼の男のくるのが待たれる私でした。たくましい胸毛の密生したからだ、乱暴とさえ思われる仕草で私をもみくちやにしてしまふ男、私を舌の先でなめる様にやさしく可愛がつてくれた夫とは違つて、軽々と私を抱きかゝえて、畳の上に投げだすと、ギラギラと光る眼で、狂つた様に私のからだの隅々までのこりなく眺める男。

毎月、メンスの時にかぎって必ずしのびこんでくる男、あまりにもはげしいその愛撫の仕方、私もいつしかそんな荒々しい動作のなかにうつとりとなつて溺れていってしまうのでした。夫との生活では、想像だにもなかったこの甘美なうずき、いゝえ、性感などというそんな表現ではありません。このまゝ死んでしまふかと思われる様な全身をかけめぐらるあらし、しのんでくる前には必ず酒をのんできて、私にも口うつしにのませて、むせる私に、又もや息のつまる様にのませるので



した。私の二人の子供は幼いせいか、奥の部屋にねかしておけば、決して目はさましません。私は近所の人の耳をおそれました。隣とはいっても、たったかば一重です。いくら狂った私でも平常の時は理性があります。物音一つにもはっとなつて気がとがめました。ガラス戸をそつとあけて男がしのんでくる時、私は月夜のぼんにはいくら夜更だといえ、あたりを見廻して、どんなにびく／＼した事でしょう。

この男と、こんな秘密を持つ様になる前の私は、月に一度は必ず夫のもとにたずねて行つて居りましたが、その頃からいつとはしらず、だん／＼私の足は遠のいて行きました。何も知らぬ夫からはいつもかわらず、やさしい、いたわりのこもった手紙が来ました。そして或る日の事、速達で来た夫からのたよりには、胸郭矯正の手術をする様になつたから至急来る様にとの知らせでした。取るものも取りあえず、夫のもとにいった私は、夫がしばらく見ない中にすっかり肥つて丈夫そうになつてゐるのに、おどろくと共に、しばらくでも夫の事を忘れていた自分を恥じました。

山ぞいには月見草の花が乱れ咲いていました。夫は私を送って駅まで一緒に来てくれました。そして、夕暮の汽車で帰るといふ私を引きとめて近くの宿屋へつれていきました。その夜、夫は、ほんとうに長い間の想いを今よいの一夜にかけた様でした。又手術後の何か月は安静を必要とするので、夫にとっては今よいがたまらなく待たれた事と思われました。だが、あの男を知らぬ以前のまゝの私だったら、夫の愛撫で十分満足出来た事でしょう。だが、私にはもう夫のあの表面だけの愛撫には、どうしてもついていく事が出来ませんでした。

たましいのない人形みたいに、夫の胸にいだかれた私の心は冷たくひえて行くばかりでした。夫は私のからだをだきしめて、私が女

の喜びをうしなったのも、自分の病のためだといって男泣きになりました。私はなんと罪深い女でしょう。すべてを告白して夫にゆるしを乞おうかとも思いましたが、だが、今はうまい、いつかは彼も打明ける日が来るだろう。手術前の夫をくるしませて何になろうと、私は思いなおしました。

四

危んでいた夫の手術の経過も意外によくてもうあと四カ月もたてばサナトリウムから帰ってこれるという知らせが夫から来ました。このたよりをうけとった頃、私はずる／＼と彼の男に引きずられて、道ならぬあやまりをくりかえして居りました。

或る夜の事、いよいよ夫のかえる日も近づいたので、男に事情を話して手を切ってくれ居る様にしたのみしました。男の肉体には引かれて居ても、夫や、子供をすてゝまで、土くさい彼の男のもとに走ろうとは思っていなかった私でした。だが、男は私に哀願しました。あれほど、私の前で荒々しくふるまっていた男でしたが、このときばかりは、土下座する様に、すべての物をぎせいにしても私を幸福にするといって、私をはなすまいとしました。畠仕事に荒れた骨太い指、広く厚いのひらの中で、私の白いきしやな細い指を、いとしいものゝ様に愛撫しながら男は、あわれな程に哀願するのでした。

都会で育つた私の、細いしなやかな肉体にあこがれと、十分なみれんを持ったこの男が私には、にくめない様になりました。夫のいない間、私はこの男から数々の物的援助を受けました。この男の在所から持ってきたという白米、新せんな野さい、だが、私は今この男と別れなければなりません。どうしてもこのまゝにしておく事は出来ませんでした。夫のかえってくる日がきまった日、私は、一夜せめてもの償いに男のどんな要求にも甘んじてうけようと思いました。

いつもの様に、こっそりと忍んで来た男のために、私は彼のなすまゝ裸になりました。哀願しても、私の決心が動かぬ事を知った男は、いさぎよくあきらめてくれました。だが最後の夜は、この男は完全に狂人でした。そ

歡義先生性愛相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ御記入の上御送り下さい。質問者の秘密は厳守します。

一、相談文及び回答は漸次本誌に掲載いたします。御都合悪き時は住所や氏名を明記されなくとも構いません。

の夜の事を私はこゝに事こまかく書く勇氣を持ちません。

夜明けちかくまで、つかれた様に荒れ狂った男は、私をかきいだきながら、大きな涙を流して泣くのでした。こうして私は、かりそめのちぎりを結んだ男と別れたのでした。

五

その後の私達夫婦は、今までの長い間の不幸も消しとんで、夫のからだはすっかり元氣になり、又、元の会社につとめて居ります。心静かな、おだやかな夫の愛撫に、今では十分満足出来る妻となりました。あの男との出来事も、今は遠くに消え去ってしまい、夫と二人の子供に囲まれた昔の様に幸福で平和なあけくれを送っております。

もちろん夫には、あの出来事は秘密にして居ります。不貞な妻だとのゝしられても、私は夫を愛しているからこそ、だまっております。夫の心を傷つけるよりも、昔のまゝの貞淑な妻として、夫から愛されたい私なのでございます。最後にあの男の事でございますが夫が帰つて参りましたから、一カ月位たった頃、あの丈夫だった男が、ぽっくりと死んだと風のたよりでございました。だから、よけい私はあの男の事は、生涯、口にはすまいとちかいました。只、時折私の心の奥底で、うずくようなあの男との思い出が、ちくりとする事がございますが、そんな夜は私は、こと更夫にやさしく仕えるのでございます。おわり

——私の少年時代の告白——

丁^{でつ} 稚^ち 小^こ 僧^{ぞう} 幻^{げん} 想^{そう}

森

太 一

前 書

私の少年時代から現在まで性的興奮を貰くものは、禪と丁稚小僧だ。現に私は毎日或る酒屋の小僧を期待して通勤している。私の職業は、酒屋の小僧とはおよそ縁のないサラリーマンにすぎないが、その小僧の動静を探るのが、一日の重要な仕事となつて消えない。そして、白い文字が染め抜かれてある紺の前垂が私をして執拗につきまとわせ、バスの中から電車の中から紺の前垂少年の姿を見ては興奮し妄想を逞うしているのだ。戦前と異つて、厚司と云うものが姿を消し、唯、前掛だ

けでは、果して丁稚小僧だか、中学生だか判然としないが、凡その見当はつく。

私が今大いに心を燃やし続けているのは小さな酒屋の小僧だ、彼を始めてその店の前で見たのは、二ヶ月前だった。その酒屋は、丁稚小僧などを置く程大きな店ではなく、間口も少ない構えて、ほんの申し訳のような酒屋であるが、勤め先からの帰途、不意に前掛少年を見てどんなにシヨツクを受けた事であろう。少年の年令は、中学一年位という所、金ボタンの洋服の上から、紺の前掛を締めていた。私はとつさに、彼はその酒屋に新らしく奉公に来ているのか、それとも、あまり小さ

いから、ほんの手伝い程度で仕事をしているのか、ひよつとしたら息子かなあという／＼と想像しても見た。しかしそんな詮索よりも服の上に、大きな前掛を締めている姿がたまらなかつた。唯その前掛がひどく汚れているのが不服で、若しあさやかに白い文字が現われ紺も新しいものであれば、私の心をどんなにひきつけたであろうと思われた。その少年が小さいだけに、尙一層いじらしいものに見える少年への思慕の念が湧き起こり、唯一瞬間ではあるが、毎日彼の姿が見られる事を期待して帰るようになった。時たま、配達のためか少年の姿を見られない時はひどくがつか

りした。

私はそうして、自分が何かのひょうしに、現職を止め、酒屋を開業し、そのような、小僧を二人位雇えるような日が来ればどんなに素晴らしい、念願を達成し乍ら生活する喜び



を考えても見た。そうなれば、前垂姿の小僧の姿を心行くばかり眺める事が出来るであろう。しかし到底実現出来る事ではなく唯淋しい夢に過ぎない。私は、夢を持っている。それは写真機を買

上級に進むに従ってやゝ成績は下ったが、中学校へ入学して、思いも及ばなかった級長に任命されたと言ふ事は、かくし切れない喜びであり又今迄にない自信がついた。朝早く起き毎朝真白い白線入りの制帽を被り、校章の

つて、世の丁稚小僧を写す事だ。私は時々、今でも、紺の前垂を買って締めて道を歩く時がある。又、この前垂を越中褌のように締める。そして、はかなき満足をしている。愛する丁稚小僧達よ、私は、丁稚小僧をこよなく愛す。前垂少年よ。私の心をかき乱す。いとしき姿、焼きつくもの、それは、六尺褌を締めた丁稚小僧。

早熟なばかりで、自分の本能を制する術を知らなかった悩ましい小学校時代を終えた太一ではあったが、素質もあったせい、中学校の入学試験には優秀な成績で合格した。自分でも疑う位で、第一期入学早々級長に任命された。最も小学校時代

刺繍の入った鞆を肩にどんなに希望に燃えて遠い道を通学した事であろう。世の中の幸せを自分一身に背負ったような気持であった。しかし、小学校時代からの習癖は相も変わらず続けられ倦む事を知らなかった。間もなく体の一部に大人になる徴候が見え始め、自分ももう子供ではないぞと言う辱かしいながら成長して行く份が営まれていく嬉しさを覚えた。そしていつしか入学当初の奮い立った希望が薄れ、

——僕は根から学問よりも、体の一部の方に熱中する性質だ——

と思ひ込むようになっていた。他の同じような新入生の喜々として遊び、着実に中学での勉強に熱中している姿を見ると、どうして自分もあのようになれないのかと、我乍ら情なく思い強く反省したが、それも一時の事に終り、家に帰ってはもう駄目であった。所がクラスの中には、落第生が三人位居り、彼等は何れも体格もよく、自分が原級留め置されたのを卑下するどころか、其れ共年令が一つ上だと云う貫録を示そうとするのか、いろいろと露骨な話を始めるので、太一は始めて、自分と同じような習慣を持っている者が相当居る事を知り、安心すると同時に、何か自分独

りの世界に邪魔者が居るようにも思えるのであった。然し、そんな落第生や一部の素行の良くないクラスの者が、あからさまに淫らな体験を如何にも自慢気に話しても、自分だけは、彼等とは遠くかけ離れた地位にあるという自尊心は失われないでいた。

表面は、制帽を誇り、中学生としての態度を示す事にあたりに気を配っていた太一は、どんなひょうしか、妙なものに心が惹かれ始めて来た。自分乍らわけの解らぬ現象で何とも説明がつかなかった。それが又、長く太一の内にあって支配して行った。

——丁稚小僧になりたい——

当時、中学校へなど、数える位しかなかった幸福な身分であるのに、事もあらうに、丁稚小僧になり度いとは、太一自身、どうかしていると思つた。太一の丁稚小僧への思慕は彼等の生活も幾分あったが、その服装だったのである。

——厚司と前掛をしたい——

11日が経つにつれて益々強く心を惹きつけさせた。太一が最初に異様に印象づけられたのは、襟に白い字が染め抜いてある厚司であった。この厚司は、褐色の地もあり、紺地もあった。縞のごつ／＼した未だ木綿の手にせぬ

感触が、何故かぞく／＼させるのであった。そんな厚司を着た小僧を見ると、太一は、すべて雄々しく見えて仕様がなかった。特別な体臭を感じ厚司が少年の体の中へ、特別な力を与えているように思えた。又、大きく白い文字の入った、紺の前掛も魅力があり、小僧が尚其の上、角帯を締めて呉れば申し分がなかった。厚司、前掛、角帯が、丁稚小僧に対する思慕への第一歩だった。その裡、太一はその範圍が拡がり、丁稚小僧であれば、一樣にある感激を覚えるようになった。ちよつとした商店街に育った彼であつたし、又、商都で、丁稚小僧など幾らでも見られた。太一は是等の丁稚小僧の服装を分類した。厚司に紺の前掛は、酒屋の丁稚、米屋の丁稚に多く、厚司だけは材木屋、金物屋の丁稚で、角帯に黒い前掛は呉服屋の丁稚、大工の丁稚は印半纏。魚屋八百屋の丁稚は、黒い木綿の半纏に股引だ。どんな服装をして居ようと、丁稚小僧だと一目で見れば良かった。通学の途上、一度丁稚を見ると、太一は必ず彼等の姿が遠く視界から去るまで見送った。大抵自転車に乗って通り過ぎる場合が多かったが、若し、正面から見直す事が可能な時は、来た道を引き戻して、觀賞した。太一が最も望ん

だ理想的な位置は窓がある。そこからは往来がよく見渡せる。窓の向う側の並びは、酒屋、米屋、八百屋等が店を並べている。何れの店にも、未だ数え年十三四才位の丁稚小僧が働いている。自分は、一人々々の仕事をゆくりと眺めている。自分が丁稚小僧を眺めて心をとぎめかしているのは誰も知らない。

——と云う状態だった。然し、都合のよい様には行かないもので、太一は家の二階の窓（土蔵作りのすき間の狭い）から、僅かに、時々通り過ぎる丁稚小僧を見て慰めるに過ぎなかった。

丁稚小僧になりたい。厚司や前掛を着け度い太一の希望は、若し太一が開放的な外向性の気質であれば、いとも容易に達成せられた。中学校を止めて奉公する迄には決意出来なかったにしろ、厚司や前掛を着けるのは、太一の家が昆布屋であった為、父に一言意志を伝えれば良かったのである。父もその決心すれば、どんなに喜んで呉れるであろうし太一の為に、真新しい厚司を買って呉れたかも知からない。けれど、太一は、皮肉な事に、商売の昆布が大嫌いとして来ているので、店の仕事を手伝うなんて出来るものではなかった。それより、昆布屋と云う家業に対してす

ら、卑下と嫌悪と憎悪の念を強く抱いて居た。昆布屋であるが為にどんなに片身の狭い思いをしていたであろう。長男である太一は普通ならば父の職を継ぐべきであったが、徹底的に昆布嫌いとして来ては、太一に何一つ仕事を手伝えなかったし、——自分は家の仕事など絶対しない——と決め込んでいた太一であったので、父や母が強いぬのをよい事にして太一でも充分用を果せる仕事でも決してしなかった。或る日、どこかの中学校の制服を着て、厚司姿の少年を見た事があった。太一は、とっさに、自分の理想の姿を見出したような興奮を覚え、ひどくその少年を羨ましかった。

中学生生活も経験し、厚司も着られる生活、これであった。此の丁稚小僧への憧憬は、習慣と密接な関係を持っていた。即ち、その時の妄想はきまっていたように丁稚小僧だったのである。その実演の動機を、自分を丁稚小僧（酒屋）に擬し、一日の労働からやっと開放された体を小僧部屋で休める時、疲労をいやし、奉公人という不遇な境遇を慰める唯一の手段としていたのであった。又、昼は学校にあって夜は昆布屋の小僧として厚司で働いている自分の姿を想像したりもした。

眠ても覚めても厚司姿の丁稚小僧が離れなかった。そして、彼等の服装だけでなく、言葉（音声であろうと、文字であろうと）異様な響きになって五感に伝わって来た。若し、雑誌等で、丁稚小僧が登場していると、筋は面白くなくても太一にとっては偉大な発見でもしたかの様に、その箇所だけは繰返えして読み、主人公の時は、まるで鬼の首でも取ったように夢中になってむさぼり読んだ。読んでしまっても、その丁稚小僧が、いつまでも消え失せないで体をむずくさせるのであった。

——雄々しい厚司少年——勇ましい前掛少年——素晴らしき魚屋の小僧——等、種々様々の服装と少年を結び合わせてノートの上にペンを走らせ独り満足させ、妄想から妄想へと走り続けた。そんな時、親戚の家が水商売から菓子屋に転業した事が有り、人手不足の為太一に日曜日だけ手伝って欲しいと言ってきた。父は

「太一、行って来い。お父さんの厚司貸してやる」

と言った。「うん」と言えば、憧れの厚司が、特別の勇気を要せず着られるのに、太一は顔を赤くして黙って居た。せっかくのチャンスが目前に用意されているのに、意思表示

の出来ない太一であった。この時、太一が、手伝わねばならない破目になり、極く自然に親戚の家に行つて、叔父が、

「太坊、これ着て、服が汚れるから」と新しい厚司を出して呉れたら、太一は気楽な気持ちで手を通すことが出来たかも知れなかったが、父のように、姉妹の居る前でひらき直つて言われると「うん」とはどうしても言えなかった。後で勉強机に向つた太一は、絶好のチャンスを逸して、残念でならなかった。唯、厚司を着て菓子売っている自分の姿を頭で描いているばかりであった。

街の雑貨用品店の中には、厚司や前垂を売っている店があった。その前を通る度毎に目は厚司や前掛に集注していた。金に余裕があれば買いたかった。しかし太一の小遣から、それを求めるのは余りにも手痛い代価であったので、淋しくならむばかりだった。

今日も酒屋の丁稚が配達なのか自転車に乗って通る。彼は、太一の近所の酒屋に奉公している。年は太一よりも一つ位上だ。背は高くないが、丸顔育ちで血色よく、太一のようにやせては居ない。が

っしりとして如何にも健康そうだ。白い歯並が美しい。いつも襟は酒屋の屋号を染め抜いた厚司を着て、紺の前掛を締めている。太一がこの丁稚を見たのは、中学へ入学してから間もない頃だった。毎朝この酒屋の前を通るので、いつしか、この丁稚の居るように期待

している自分を変な性分だと思ふようになっていた。時折、太一の体と殆んど接するようにして通り過ぎる事があった。太一は、そんな時素早く、彼の厚司の布地を観察したり、前掛の文字を見極めようと懸命だった。そして、ブルルツと体が震えた。



唯近寄ったと云うだけで、厚司や前垂から異様な、そして得も云われぬ感触がさつと伝わって来るようで、ゾク／＼する程嬉しかった。

「君は、厚司を着ている事を何とも思わないのか。前掛を締めて嬉しくないのか。僕は君をつくづく羨ましいと思う」

いつか、この丁稚が、太一の家に酒を持って来た事があった。偶然太一は台所に居たので酒瓶を二本持って台所迄来たので、二人きりで相対し顔を見合わせて、太一はひどく見透かされたような気がして照れた。その時、丁稚の奉公人臭さ、をひし／＼と感じた。太一のような年下の者に対しても、上目使いではあったが、如何にも奉公人らしい態度が見受けられ、現実感に打たれて、後味のよいものではなかった。太一は、むしろ、彼が傲然として居て欲しかった。そして、たとい一言でも友達としての言葉が聞きたかった。

「毎度おおきに」

他人行儀は水臭く物足りなかった。しかし酒屋の丁稚から発散した体臭は、いつまでも太一の体を落着かせなかった。

毎日々々うとうとうしい雨が続いた。家族の者が皆映画に行った後、宿題やら、中間考査

の為に太一は留守番をした。店は、戸を閉めて置いた。店の若い者も公休で居ない。太一は勉強部屋で独り英語のリーダーを開いていたが、何故か手に付かなかった。勉強するのに最もよい条件であるのに、あまり落着きすぎると、かえっていろ／＼な事に心が動く性分で、——こんな事は滅多にない。何かこっ

そりするのによいチャンス——だとも思うともう試験勉強等はそっちのけで、何をしてやろうかと頭をひねった。ふと丁稚小僧の姿が浮かび上がり、太一は、下へ行った。気味悪い程の静けさで、ミシリ／＼と言う自分の足音がいやに耳に響いた。座敷に、父の厚司が掛けてあった。太一は、後で自分がそれをさわったと気付かれない為には、始めどういう風に掛けてあったかをよく見覚えて置いて、はずした。始めて直接手にする厚司、シャツの上から着て見た。前掛は店にあった。それも着けて鏡台の前に立った。微笑む自分の丁稚姿を見た。ひどく似つかわぬ恰好だった。前掛の紐が快よく下腹を締め付けた。太一はなるだけ、肌で厚司の感触を味おうとして、猿又迄脱ぎ捨て、着直した。言いようのない喜びが体全体から感ぜられ急に力がむく／＼と湧いて来た。予想した通り、厚司や前垂の

威力をひし／＼と体験した。鏡台の前だけでは物足りなく、家中を歩き廻った。如何にも自分が昆布屋の小僧になったかのようにして——。

店は戸を閉ざしている為暗かったので、倉庫の中へ入った。倉庫には、商売の昆布が高く積まれて居た。平常あれ程嫌いであった昆布が何故か違った臭いで太一の鼻をついた。触れた事のない昆布にも手をやり、体をもたれさせた。昆布は太一にとって決して近寄れない存在でない事を知らしめた。太一は、出し昆布の山の上に這い上がり足の裏から直接自分の肌に触れる昆布の感触を十二分に味わうとした。

——僕は今、昆布屋の小僧だ。——

得意になった太一は、大の字になって昆布の上に寝転び、両手で昆布を撫で廻わした。カサ／＼と昆布を結えた縄が体の下で音を立てた。名状すべからぬ情緒が勃然と湧き上りしばし陶然たる境地に陥り、無我夢中であった。激情の一瞬が過ぎると、何とした変化である。厚司や前掛が、汚らしいものに思え一刻も早く脱がないと、その色や形が濃く自分の体に刻み込まれるような錯覚を催し、猿又やシャツが慕しくなってきた。

太一はそれが病み付きとなった。もう一度厚司を着たくて仕方がなかった。が、思うようなチャンスは到来しなかった。そうなる和尚更、居ても立っても居られぬ気持になり、少々冒険をしても実行しなければ気が済ま



なくなり、遂に意を決し、全財産を投げ出して、雑貨店で、厚司と前掛を買ってしまった。太一はこの時、変な目で店の人に見られはしないかとオド／＼して居た。二度も三度も店の前を往き来しては、思案しやっど店先

にたゞずんだ太一は。顔を赤らめ胸をドキ／＼させて、厚司と前掛を指さした。厚司には、大人用と子供用とあるのを前以って確かめて置き、それを買った。店の人が畳んで新聞紙に包んで呉れるのがもどかしく、金を払うと、急いで去った。——とう／＼えらい物を買ってしまった。後悔はしたが、嬉しさはかくし切れず、人通りの少ない場所に来ると、包みを解いた。ガサ／＼した木綿、父の古びたのとは違った格別の肌触わりで、前掛の白い文字も鮮やかだった。一方が板べいの長く続いている暗い路地に入っ

てそれを着た。体にそぐわない、まるで借り物見たいで、落着かなかったが、厚司を着て前掛を締めて人前を歩こうとする自分の姿に自分で興奮し乍ら、夜の巷を歩き廻った。顔見知りの者に出会わないかとそればかり心配した。足は、いつしか歓楽街の方へと向いていた。其処ならば賑やかで、かえって遠い所から来ている人であふれているから、都合が良いと思った。こうして厚司姿の太一は、自分の恰好を人が見

てどう映ずるかと言う事が期待であった。少しでも自分の姿を見度く、前掛がハタ／＼するのを眺めて丁稚小僧の姿全体を想像した。太一は、映画を見ようと思って、二流館の〇座に入った。これも普通の太一にとっては考えられないことで余程の冒険であった。学校では、映画館へ入ることは厳禁されて居た。しかし、厚司を着たという事が太一を大胆にして居たので、さっと切符を買って入ってしまった。真暗で、ぎっしりと観客が詰って居た。太一は、ウロ／＼と適当な場所をさがしたが、何処からともぐり込めそうにもなかった。しかしたとい飯の丁稚と云う姿が、厚かましく振舞わせ、や／＼と少しのすき間をさぐり当て、勇気を出してもぐり込んだ。

や／＼との事、椅子席の最後部に体を覗かせることが出来て、スクリーンを見た。時代劇で、武士と腰元らしいのが、夜道を歩いているシーンであった。その映画はすぐ終わったので、筋は解らぬ儘に終わった。明かい休憩中太一は次の上映が待遠しく、今にも誰かに発見されるのではなからうかと、ビク／＼して下ばかり見て居た。太一のように、厚司の丁稚は一人もなかった。次の上映は、喜劇で、観客と共に太一もゲラ／＼と笑った。しばしスクリーンに見とれている裡に、太一は自分の体が背後の者にぴったりと押しつけられているのを知り、ハツとした。最初、太一の肩に軽く手を置いて、さも顔知りか、二人が一緒に映画に來たと他に思わせ振りで、勝手な奴だとしやくに障ったが、半面、そうされていると、怪しまれる心配はないとも考えて、男のする儘に委せた。或いは、その男が、太一を見破って思いやりを掛けて居るようにもとれた。所が、男の手が肩から異動し始め腕を徐々に降下して行った。やがて、両腕をしかりつかまれた太一は、男の体が、強く圧迫するのを覚え、だん／＼注意がその方に向き、スクリーンの筋の興味が殺がれた。男は腕を滑って、手の掌を握ろうとしたが、太一は抵抗した。男はそれをあきらめたのか、二三回腕に力を入れて握り締めたかと思うと、今度は、腰の方へと手を伸ばした。

——僕の体を触るのは、丁稚小僧の服装をして居るからだろうか。僕を本当の丁稚小僧と思って見下げて居るのかな——

太一がこんな事を思っている間、太一がひよっとしたらと予期の如く、男の手は、前掛の上へ手を当てがった。

太一は居たたまれなくなり、遂に逃げ出し

て映画館を出た。そして歓楽街の直ぐ近くの公園のベンチに厚司と前垂を脱ぎ捨てると、中学生にかえり、家路を急いだ。

——あの男もえげつないが、僕もあきれた少年だ——

太一は辱かしいやら、やるせないやら変な気持であった。その夜、太一は疲れ切ってぐっすり眠ったが、遅刻した夢を二重に見た。

翌日、学校では、この事が何度も頭に浮び面はゆい気持で一杯であった。そして、同級生の誰からも遠く放れた人間だと言う運命である事をはっきり認識した。後で、あっさり捨てた厚司と前垂が惜しくなり、帰り途寄って見たが、もうなかった。ルンペンにでも拾われたのであろう。使った金が無暗に惜しく捨てないで持って帰って蔵って置けば又使えるのにと考えたが、後の祭りであった。

(次号は「少年の体臭」)

【註】男女の服装や下着類について、変った狂崇をお持ちの方々が沢山あること、思いますが、私達の共同の広場である本誌の誌面を益々豊富にするため、自分一人の胸にしまっておかずに、ドシ／＼お寄せ下さるようお願いいたします。

(編集部)

懸賞【告白と手記と体験】入選

動物嗜好者の手記



麻耶馨

現在考えると、私の異常な性癖は、小学生の頃から既に目醒めていたと思われる。その頃、私の家は東京のS区に在って、道路一つ隔てた前には、観兵式で有名な代々木練兵場が広範囲な敷地を専有していた。現在では、ワシントンハイツとか称される米軍関係の住居が、すっかり整理された平坦な敷地に、その近代的な様相の家屋を並べているが、当時

（昭和十六年頃）は、松林の多い起伏に富んだ練兵場であって、毎日のように軍事訓練が行われていたのである。大東亜戦争末期には、広大なその周囲に鉄条網が張りめぐらされ、高射砲陣地の設置と共に一般人の立入禁止区域に指定されたが、その頃は自由に立入りが出来て、軍事訓練の無い時は子供達の屈強の遊び場所であった。兵隊の訓練中であっても、邪魔にならない程度なら咎められもせ

ず、塹壕掘り、武器類の運搬、点呼、その他さまざまな訓練を眺めたり、休憩（大休止と小休止と号令されていたが）には兵隊さんと仲良く遊んだものである。戦争熱に燃え立っていた当時の事として、子供ながらも軍人に対する憧憬は強く、兵隊の訓練を真似して、兵隊ごっこをして遊んだりする事は大きな魅力であった。

訓練は実に厳格であった。銃を片手に重い背囊で完全武装した兵士が、地面に伏したままの形で射撃の練習をする場合、伏せ方が悪いとか、一寸した脚の恰好に迄一々文句を云い、伍長位の下士が二等兵（初年兵）を足蹴にしたり、銃の台尻で厭という程臀部を打つ場面や、薬莖一つ紛失したといっている野原を探させたり、銃の手入が悪いといって打擲される暴力的場面を屡々目撃したが、今でも明瞭な記憶として忘れられない事柄は、短剣を紛失した二等兵が口から血の出る程平手打ちされた事と、休憩時間に練兵場から脱け出し、直ぐ近くの茶店で大福を食べていた兵隊が、折から巡廻中の憲兵に見えられ、大福を口中にはおぼったまゝの姿勢で目茶苦茶に打擲された後、連行されていったことである。さうした兵士が可哀想で可哀想で正視出来なかったのであるが、その反面、私はそうした光景に強く魅きつけられた事を意識してい

特集 告白 (懸賞選入)

る。凄惨であればある程、恐いもの見たさというのであろうか、私の視線はその場から離れようとしないうばかりでなく、全身ぞくぞくとするような興奮（十一才頃であるから、純粋なる性的興奮といえるかどうかは疑問であるが）すら覚えるのであった。

しかし、私を気絶する程、魅きつけたのは兵士打撃の場面よりも、馬であった。

夏の炎天下に野砲や武器弾薬を牽曳した馬が急激な坂道を上る時、既に疲労、その極に達していたのであろうか、一頭の馬が遂に倒れ伏し、地面にどうと投げ出されてしまった瞬間、私は突然身内に異常な感覚のこみあげてくるのを意識したのである。それは始めてのものであった。自分自身の現象に、私はすっかり驚愕してしまったが、それから馬が酷使に耐えかねて倒れるのを見る都度、そうした経験を味うようになったのである。それを契機として、私の馬（動物）に対する異常な性癖が強くなっていったのであった。

2

中学校二年の末期、戦災で家を焼失した私は、母の実家である田舎へ疎開し、其処の高等学校から大学へ

進んだのであるが、高校と云っても、当時は農学校と云って、高等科二年を卒業した者が三年間の教育を受ける制度になっていた。終戦後の学制改革で新制高校になる以前は農学校の名が示す様に、授業内容は農業中心であり、農場での労働（実習）も行ったが、農業と云っても、その中には畜産、養蚕、

林業等の科目も必修になっていた。普通科程の中学から農学校入学を余儀なくされた私は（私の村の近隣にはこの農学校だけしかなかった）勿論農業に関する授業に興味は全く抱けず、時間中小説ばかり読んでいた。そうした私に大きな興味を惹起させたのは、学校で行われる馬の交配であった。壮烈？とも云うべき交尾を見た瞬間、私は忘れかけていた激情を意識し、その夜密かな楽しみに耽ったのである。その頃、上級生から女性生殖器の実物写真を見せられたことがあったが、



別に性慾は感ぜずむしろ醜惡とさえ思い、男女共学であったにもかゝらず女生徒に対する興味はほとんど湧かなかった。私の空想するのとは、激しい労働に依ってぶっ倒れる馬の姿であり、交尾時のオス馬の激しい動作であった。不思議なことには、一度も人間の性行為を連想した事は無かった。比較的私の村では性関係の事は解放的で、よばいの習慣も一部に於いては残っており、村祭に於ける男女の猥らな行為の話は跡を絶たなかったし、誰それは隣村の青年三人に輪姦されて腰が立た

なくなってしまった、等と云う露骨な話を屢々耳にしたが、それらの事は少しも私には刺戟を与えなかった。

農学校二年の時、学制改革に依って新制高校と名称が改められ（私も新制高校一年生になったのだが）、同時に畜産科が別に設置され、多くの家畜を飼育する様になったが、家畜当番は私達も行わねばならなかった。鶏、七面鳥、緬羊、山羊、豚、アヒル、乳牛、そう云った家畜の小舎が新築或は改造された。その年、牛の品種改良運動が行われ、私達の学校には県から優秀な種牛が一頭配属されて、種付場に指定された。種牛は牝牛の二倍以上もある立派な体格で、重みに耐えかねて牝牛がつぶれそうであった。発情期に入った牝牛はその徴候として、牝牛ばかり入れた運動場などでは、はえて歩きまわったり互に牝牛同志で身体をぶつけあったりした。

牛の交尾時間は短い。しかし、直後の満足し切った牝牛の表情は、実に優しいものである。牛に限らず、私は豚、緬羊、山羊、兎等の交尾を見たが、兎のは変っていて、その瞬間二匹共転倒するのである。その頃春画も見たが奥につまらぬものと思えなかった。後になって人工受精が行われたが、私の学校で行った方法は、牝牛から採取した精液をスポイトで牝牛へ注入する方法であった。こゝで問題となるのは、精液の採取法であるが、

これには多種多様な方法があり、例えば、ゴム又は膀胱性の袋を用いるコンドーム法とかゴム製の袋を腔の中に保定するペッサリー法、交尾前に消毒した海綿を腔に入れ、事後それを取り出してしぼる方法、更に、牛のみに行われるものとして、牝牛の直腸に片手を入れ、直腸をへだて、初め精のうを摩擦し、次に精管膨大部をマッサージして精液を流出させる等、沢山あるが、学校での方法は人工腔法と云って、ゴム製の筒がトタン等の筒に入れ込んであり、そのゴム筒を体温に暖める為に、両者のすきまに温湯を入れてあった。この人工腔法を用いる時は、牝動物の代りに擬牝台と云う、牝の大きさに近いしつかりした木馬状の台を使うのである。精液の量は普通牛で3〜10cc程度である。此の精液をブドウ糖液、生理的食塩水等で稀釈し、0・5〜1・5ccを注入するので大体一回の採取で牝10〜15頭に使えるわけである。牝に注入する時は、腔鏡（ギネの用うクスコー氏子宮鏡と同型である）と注入器が用いられ、子宮頸管内に注入するのである。馬に於ける、肛門での体温測定とか、浣腸等、どれ程私を欽ばしたか。この様な事が自由に出来る獣医になりたいとさえ真剣に思った程である。

3

高校三年の一学期に、私は大学進学の為、家から八里離れた市の普通科高校に転入して

知人宅に下宿した。小さな街ではあるが一応県庁所在地として、都市の形態は備え、農家は一軒も無かったので、私の動物との関係はこれを機会に絶えてしまった。私は、唯一の楽しみを失ってかなりガッカリしたが、動物の精液採取法として犬の場合、摂護腺をマッサージする方法のある事を思い出し、知人宅の犬にそれを試したのである。犬の交尾は長い時間がかかり、射精は三期に分けられ、第一期は6〜26秒で0・5cc射精し、8〜26秒の間隔があつて第二期は10〜44秒続き0・5cc。次いで第三期は4〜16分を費し、14〜30cc射精するというのが平均値である。

知人宅のエスはポインターと呼ばれる白と黒との斑の毛を持った犬で、私に馴れていたのが散歩に出た際、街外れの林の中へよくつれていった。

その後、こうした行為は病みつきとなり、一週間に一度位の割合で散歩につれて行ったのであるが、そのうちにエスは、私が学校から帰えつてくるとじゃれつき、変な仕草をしたりしたので、そうした場を小母さんに見つけられた時等、冷汗の出る思いだったが、四十近くの小母さんも流石に私の秘密には気づかず、顔を一寸赤らめながら「厭ね、家のエスったら。近頃サカリがついて来たらしくて困ってしまったわ」と云われただけだったので、ホッとしたのであった。

動物の交尾なんかに興味を抱く私は、本当の変態性慾者なのであろうか。たとえそうだ

としても、この癖は永久に終る事が無いであらう。若し同好の方が居られたら、意見をお

聞きしたいと思うが。

(おわり)

お灸二題 (絵の解説)

〃治療の灸〃と〃お仕置の灸〃

若い娘さんのお尻は豊満であり、背中肉付き好く滑らかで、実に美しい、その美しいお尻や背中に、お灸の火傷の痕が出来た時、いよ／＼もって優美となり、そして素晴らしい魅惑をかもし



だしてくる。

いましめの為に、懲罰用のお仕置台に跨がされて、お尻に据えられるのも、治療の為に、背中へ据えるのだからと云っても、お灸の熱さ辛さに変りはないが、

「ああッ、熱い熱いッ！オウ熱い、もうやめてッ……………も、うたくさんよ……………熱いわよオ！ あちっちっち……………」と悲鳴を挙げ乍ら、歪める顔も又、美しく、若い女性の灸を据えられている場面は、こよない魅力に満ちているものだ。

(岩瀬祥一・画)